

どうして日本人は英語が苦手なのか？

どうして中高6年間も英語を勉強したのに、
英語がしゃべれないのか？

日本人に適した英語の学習法はないのだろうか？



*CLA*メソッド

足立 博史

※ 2013年3月22日 慶應義塾大学 優秀卒業プロジェクト受賞研究論文
(最終更新日: 2022年12月13日)

<目次>

第1章	はじめに.....	6
1.1	研究概要.....	6
1.2	問題設定と仮説の提示.....	6
1.3	論文の構成.....	8
第2章	第二言語習得研究の知見と英語上達レシピ.....	9
2.1	臨界期.....	9
2.2	なぜ日本人は英語が苦手なのか？.....	11
2.3	どんな英語学習者が成功するのか？.....	13
第3章	CLAメソッド（本格派レシピ）とは.....	22
3.1	CLAメソッドの定義と本質的な効用.....	22
3.2	CLAメソッドの早見表の提示.....	22
3.3	CLAメソッドにおける独自の3つの特徴.....	25
第4章	CLAメソッドにおけるListening Sectionの裏付け	30
4.1	Listening Sectionにおける早見表の再提示.....	30
4.2	2.3の方略10と方略11との整合性.....	32
4.3	【段階1. フィルター段階】.....	33
4.4	【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】.....	39
4.5	【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】の手法について.....	45
4.6	【段階3. 音変化への”慣れ”】.....	50

4.7	【段階4. 理解段階】	53
-----	-------------	----

第5章 CLAメソッドにおけるSpeaking Sectionの裏付け 55

5.1	Speaking Sectionにおける早見表の再提示	55
-----	-----------------------------	----

5.2	2.3の方略16～23との整合性	57
-----	------------------	----

5.3	【段階1. 舌作りの段階】	59
-----	---------------	----

5.4	【段階2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階】	60
-----	-------------------------------	----

5.5	【段階3. さらなる流暢さと機転の利いた会話】	64
-----	-------------------------	----

第6章 CLAメソッドにおけるReading Sectionの裏付け 65

6.1	Reading Sectionにおける早見表の再提示	65
-----	----------------------------	----

6.2	2.3の方略12～15, 24～26との整合性	66
-----	-------------------------	----

6.3	リスニングとリーディングの関連性	67
-----	------------------	----

6.4	【段階1. 基礎語彙力と文法構文の習熟段階】	69
-----	------------------------	----

6.5	【段階2. 文字と音(内語)のつながりの強化段階】	69
-----	---------------------------	----

6.6	【段階3. 多読段階】	71
-----	-------------	----

第7章 CLAメソッドにおけるWriting Sectionの裏付け 73

7.1	Writing Sectionの早見表の再提示	73
-----	-------------------------	----

7.2	2.3の方略27～31との整合性	74
-----	------------------	----

7.3	【段階1. 基礎語彙力と文法構文の習熟段階】	75
-----	------------------------	----

7.4	【段階2. 英借文の習熟と文章の添削】	76
-----	---------------------	----

7.5	【段階3. Readingからの転移】	77
-----	---------------------	----

第8章 EMによるCLAメソッドの実践とモニター評価	78
8.1 EM (eigo-manabu.jp) とは	78
8.2 CLAメソッドの実践によるケース別モニター評価	85
第9章 仮説への解答	101
9.1 まとめと結論	101
第10章 獲得した3つの能力	102
10.1 獲得した1つ目の能力：【鋭敏な看破力】	102
10.2 獲得した2つ目の能力：【高次元の戦略眼】	103
10.3 獲得した3つ目の能力：【創造的な実装力】	104
引用・参考文献	112
書籍（和文）	112
雑誌論文（和文）	113
欧文文献	113
インターネット資料・その他	113
巻末資料	114
CLAメソッド早見表一覧	114

第1章 はじめに

《キーワード》

英語上達レシピ CLAメソッド EM 第二言語習得研究 純ジャパ 方略

1.1 研究概要

本研究では、第二言語習得研究の知見から、**英語上達レシピを根幹とするCLAメソッド** (Classified Language Acquisition Methodの略称) を独自に構築する。そのCLAメソッドが、どのような知見に基づいて裏付けられ、どのような独自の特徴を持っているかを明らかにすることが本稿の目的である。また、CLAメソッドの実践の形として、eigo-manabu.jp (以下EMと呼ぶ) というウェブサイトを開設した。そのEMの活用例についても随時触れていく。本研究では、“純ジャパ”¹の英語学習時における、1つの効果的な言語学習方略²として、CLAメソッドを提案する。

また、CLAメソッド (理論武装した本格派レシピ) の根幹である“**基本の英語上達レシピ**”として、第2章3節記載の「**31の方略と5つの示唆**」 (英語成功者の成功学習パターン集) を位置付けるものとする。

1.2 問題設定と仮説の提示

■ 研究の背景

以下の3つの疑問が、2001年に本研究を始めた原点となる問題意識である。

「どうして日本人は英語が苦手なのか？」
「どうして中高6年間も英語を勉強したのに、英語がしゃべれないのか？」
「日本人に適した英語の学習法はないのだろうか？」

この3つの問題意識については、「留学すれば英語が自然に使えるようになる」という幻想を抱いたまま留学し、英語の壁に何度も対峙しなければならなかった留学時に、生活に関わる緊急かつ重要な問題として特に意識せざるをえなかった。そこで、インターネット上や、学術的なデー

¹ 純粋なジャパニーズの略。日本で生まれ、日本語を母語としながら、日本の初等・中等教育の中で育った人の総称を指す。「純粋」という表現は、単に帰国子女 (幼少期を海外で過ごしたのちに日本に帰国した人) ではないというだけの意味しか含まれておらず、文化民族的意味合いは特別に含意しないものである。

² Language Learning Strategyの日本語訳。情報の利用や取得、保存、検索を補助する際に活用する方法 (Operations employed by the learner to aid the acquisition, storage, retrieval, and use of information. (Defined by Oxford))。

タ／論拠が乏しい個人体験のみに基づいた書籍で紹介されていた英語学習法を何度も試し、失敗を繰り返し、結局、「第二言語習得研究へ”正しい英語の学習方法”の解答を求めるようになった。それが、英語上達レシピ、並びに、CLAメソッドが生まれるに至った経緯と、その動機である。

また、社会的な文脈においても、世界規模でのグローバル化が趨勢である昨今、英語の重要性が増していることは言うまでもない。2010年から楽天における、英語の社内公用語化が始まり、ユニクロを傘下にもつファーストリテイリングもそれに追随する形で英語の公用語化を推進した。また、楽天、ファーストリテイリングだけに限らず、パナソニックなどの大手企業も、外国人の新卒採用が年々増加しており、様々な文化背景や言語を使用する従業員が増加傾向にある。このように社内が多文化化、多言語化する中で、お互いの価値観を認め合い、意思疎通を図るツールとしても、英語の使用の重要性が再認識されつつある。

さらに、2011年4月より、小学校において新学習指導要領が全面実施され、第5・第6学年で年間35単位時間の「外国語活動」（原則として英語）が必修化された³。そして、2020年東京五輪を控え、2015年度に日本を訪れた外国人観光客（インバウンド）数が前年度比45.6%増の2135万9000人となり、初めて2000万人の大台を超えた。⁴

このような流れを考慮すれば、今後さらに、日本においても、あらゆる分野で英語化が進み、それに伴って、日本人がより効果的に英語を学習する方法がますます求められてゆく状況が容易に予測される。

■ 問題と仮説の提示

先に提示した3つの問題意識に潜む共通の心理は、「純ジャパでも本当にペラペラになれるのか？」ということである。言い直せば、「純ジャパにとって、英語が自由に使いこなせるようになるための、効果的な学習法は存在するのであろうか？」という問題に収斂することになる。

その問題に対する、1つの解答・解決案として、英語上達レシピを根幹とするCLAメソッドを提案する。つまり、「CLAメソッドは、純ジャパにとって英語が上達するための効果的学習法になりうるのではないか？」を検証されるべき仮説として提示する。

すでに、CLAメソッドは、筆者自身の英語学習を通して効果は確認されている（CLAメソッドにより、センター試験平均点以下の文法中心の片言英語レベルから、TOEIC 980点／990点中、TOEFL iBT 99点／120点中のレベルにまで向上）。ただ、自身での実験結果だけでは、CLAメソッドだけの効果であるとは言い切れず、その客観性・再現性・反証可能性・汎用性が乏しいことは認めざるを得ない。であるから、本研究を通じて、CLAメソッドの理論的裏付け、並びに、CLAメソッドを実際に実践してもらったモニター実験による評価を通じて、その信頼性を確保していく。

³ 文部科学省 小学校外国語活動サイト http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm

⁴ 政府観光局 http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html

1.3 論文の構成

論文の構成は以下の通りである。

まず、次章の第2章では、CLAメソッドを理解するために前提となる第二言語習得研究における知見を紹介する。また、CLAメソッドの根幹である、英語上達レシピについても説明する。

第3章では、CLAメソッドの定義、そして、その3つの特徴を中心に、具体的にCLAメソッドについて詳述していく。

第4、5、6、7章では、CLAメソッドの4つのセクション（Listening, Speaking, Reading, Writing）において、第二言語習得研究の知見からCLAメソッドの理論的裏付けを順次行っていく。ここまでの論述により、CLAメソッドの内容を説明・裏付けし、純ジャパとの関連性、純ジャパへの効果の妥当性を学術面から示す。

第8章からは、その実践として、EMの説明、モニター評価を行い、CLAメソッドにおける一定の客観的信頼性の確保を試みる。

第9章で、先に提起された問題・仮説に対する解答として、CLAメソッドの妥当性と有効性を再検討し、本稿のまとめとする。

追記した第10章では、実際の英語学習者にとってのCLAメソッドによるメリットを詳らかにし、CLAメソッドの実装を試みる。

第2章 第二言語習得研究の 知見と英語上達レシピ

《キーワード》

臨界期 動機付け 態度 方略 31の方略と5つの示唆＝英語上達レシピ

2.1 臨界期

■ そもそも大人になっても英語習得は可能なのか？

具体的に、英語上達レシピ、ならびに、CLAメソッドの詳述に入っていく前に、そもそも大人になっても英語ができるようになるのか、という疑問を解消しておく。なぜなら、その理解がない状態、つまり、「大人である自分は英語習得ができないのではないか？」という不安がある状態は、中長期的学習意欲／動機付けという点において、障害となる可能性が高いからである。

臨界期仮説は、竹内(2003)によると、「思春期のはじまり（12～13歳⁵）の時期を過ぎると、ネイティブのような言語能力を身につけるのは不可能になる」という仮説である。つまり、思春期を越えた、いわゆる「大人」にとって、英語はそもそも習得可能なのかどうか、という点について、主に2つの先行研究を参照しながら考察していく。

1つ目の先行研究は、白井(2008)によるものである。白井(2008:39)は、ジアらの2002年の論文の研究を論拠として、第二言語学習には、年齢要因よりも、むしろ、環境要因の方が強く影響していると主張している。

このジアらの研究では、アメリカへ移住した人のアメリカ到着時の年齢と英語能力の関係を調べ、それをヨーロッパ系グループ（主にロシア語を母語とする学習者）とアジア系グループ（北京語、広東語、韓国語を母語とする学習者）に分けて比較している。彼らの英語能力の伸びに関して、ヨーロッパ系学習者には統計的に有意な年齢の影響がなく、アジア系学習者にだけ有意な年齢の影響が見られた。

もし、臨界期の原因が脳の構造によって決まっているのであれば、同じ影響が全人類にあるはずであって、アジア系だけに年齢の影響があり、ヨーロッパ系にはない、という現象はつじつまが合っていない。いわば、年齢よりも、学習者の心的態度を含めた環境の方が強く影響している、と白井(2008)は結論づけている。

⁵ 白畑(2004)によると、発音に関しては、7～8歳という説もある。

2つ目の先行研究は、竹内(2003)によるものである。竹内(2003:9)によると、臨界期 (Critical Period) を学術的に主張し始めたのは、Penfield & Roberts(1959)やLenneberg(1967)であり、Penfield & Robertsは臨界期の上限年齢を9歳前後まで、Lennebergは思春期頃まで、と主張している。

臨界期の考え方は、厳密な実験で立証することが不可能なため、臨界期「仮説」 (Critical Period Hypothesis: CPH) という名称で呼ばれており、絶えず議論の対象となり、賛否両論のデータが提供され続けている。

竹内(2003)は、CPHを支持するデータを概観した後に反証を試み、結論を導き出している。ここでは詳細には立ち入らず、簡潔に、どのようなデータを分析対象としたのかを取り上げ、結論を明示したい。

例えば、発音や聞き取りの習得に関するOyama(1976,1978)の研究、発音や文法の習得に関するPatkowski(1980,1990)の研究、文法習得に関するJohnson & Newport(1989)の研究、さらには、普遍文法⁶ (Universal Grammar: UG) の習得に関するCoppieters(1987)やJohnson & Newport(1991)の研究などが挙げられる。また、竹内(2003:25-27)は、34に渡るCPHに関する研究を検証し、CPHを支持する学説と支持しない学説が入り乱れており、CPHが未だ実証されていないことを強調している。

以上の研究分析の結果、外国語学習には、年齢以外にも多くの要因が関与しており、それらの要因のあり様次第では、思春期以降に外国語の学習を開始しても、相当に高いレベルに達する可能性が十分にあることがわかった、と主張している。

以上の2つの先行研究からも分かるように、CPH自体は立証されておらず、未だ仮説のままであり、むしろ、年齢よりも、他の様々な要因、特に、環境要因が英語学習に強い影響を及ぼしていると言える。しかしながら、7歳を機にネイティブレベルの発音がほぼ不可能になるというJohnson(1992)や白畑(2004)の研究も統計的に有意を示しており、その点は考慮すべきである。ただし、それは、臨界期以降の学習者の学習到達度の低さを示すものではなく、ネイティブに近いレベルまでならば到達可能であるという示唆も含んだデータである。

また筆者(足立)も、臨界期を確実に過ぎた、成人(20歳)以降に、片言の英語レベルから比較的スムーズに英語でコミュニケーションが取れるレベル(TOEIC 980点/990点中、TOEFL iBT 99点/120点中)まで到達したことを考えれば、直観的にも、白井(2004:32)の言う「Older is faster, younger is better」(年齢を重ねるほど学習が早くなり、若いほど発音が良い)という一般化に含意された、「大人になっても言語習得は可能であり、それどころか、むしろ、大人の方が言語習得自体は早い」という点にも納得がいく。さらに本章の第3節で紹介する、「大人」になった後に学習を開始した英語学習成功者らの存在も、その一般化の主張に対する確かな論拠である。

以上より、CPHは完全に実証されておらず、「大人」ながらも、ネイティブレベルとまではいなくても、かなりのレベルまで英語能力を向上させることが可能であると結論づけられる。

⁶ 全人類に共通な言語の源。人間には生まれつき文法的に正しい文を生み出す能力(生成文法)があり、それはその言語の演算装置のようなものと考えられており、どのようなタイプの言語であれ、ここから生成される。(ジョンC.マーハ:2004) 米ハーバード大学の言語学者ノーム・チョムスキーにより1957年に提唱された。(伊藤サム:2003)

2.2 なぜ日本人は英語が苦手なのか？

2010年のTOEFL iBTの国別平均点は、参加人数比率は各国でばらつきはあるものの、アジア30カ国中、日本は下から4番目の26位だった⁷。また、ほとんどの生徒が中学高校の6年間、英語を学習するにも関わらず、この20年間TOEFLの点数が向上しておらず(白井:2004)、日本人が英語ができないという事実を受け入れざるをえない。なぜできないのだろうか。

以下の5つの理由が考えられる。

理由1： 弱い動機付け
理由2： 言語間の距離
理由3： 周波数の距離
理由4： 日本人の国民性／恥の文化
理由5： 文法偏重の中等英語教育

■ 理由1：弱い動機付け

シンガポールやフィリピンなど、英語が生活の一部にとけ込み、公用語となっている国と違い、英語ができなくても基本的に日本での生活に困ることはない。先に述べたような日本社会における英語公用語化／グローバル化の流れも、受験や留学、就職や昇進に有利であるというレベルでの必要性を助長してはいるものの、「英語が絶対に必要である」という社会的要請を日本での生活者につきつけるまでには未だ至っていない。

■ 理由2：言語間の距離

当然の話ではあるが、言語が似ていれば似ているほど、その習得難易度は低くなる。例えば、韓国語と日本語の文法的な語順が極めて類似しているという点で、日本人にとって英語に比べ、はるかに韓国語の方が学びやすい。逆に、英語は日本語との類似性が乏しく、学びにくい言語である。同様に、ドイツ語など、英語と同じインド＝ヨーロッパ語族に属する言語を母語とする学習者にとって、英語は非常に親しみやすく学びやすいが、日本語や韓国語における習得難易度は高くなる。

白井(2004)によると、カーネギーメロン大学の甲田慶子は、日本語学習者を韓国語、中国語、英語の3つの母語グループに分けて、学習進度を比較した。すると、初期段階ですでに、英語話者は韓国語話者・中国語話者に差をつけられて、しかもこの差は学習が進むにつれてさらに広がる、という結果が出た。

このように、母語と対象言語の間の距離(類似の度合い)によって、習得難易度は左右されるので、日本人は英語ができないことを恥じる必要は全くない。むしろ「元々、言語的に不利だからしょうがない」と開き直って英語に取り組むことで、モチベーションを維持しながら学習を進められるのではないだろうか。

⁷ ETS TOEFL(2010). Test and Score Data Summary for TOEFL Internet-based and Paper-based Tests. January 2010-December 2010 Test Data.

■ 理由3：周波数の距離

言語がそれぞれ持つ周波数（Sound Waves）の距離が原因で、日本人が英語が苦手であるという主張もある。しかし、この理由はいささか疑問が残る。

イギリス英語は2,000ヘルツから12,000ヘルツの周波数を持っているのに対し、日本語は125ヘルツから1,500ヘルツの周波数であり、両者の周波数はまったく重ならない。このために日本人は英語が苦手である、という主張に対し、白畑(2004)は疑問を投げかけている。

TOEFLのリスニング部門のスコア（Paper-based） From ETS(2001)

母語	リスニング部門
ドイツ語	61
スペイン語	57
ロシア語	55
イタリア語	54
フランス語	51
日本語	49

もし、周波数の違いにより英語の聞き取りに対する困難度が説明できるのであれば、英語に近い周波数を持つ言語を母語とする学習者の聞き取り（スコア）が良い事になる。上図のTOEFLのリスニング部門のスコアと周波数の関係を見ると、イタリア語はスペイン語に比べてイギリス英語に近い周波数を持っている。（イタリア語：2,000~4,000ヘルツ、スペイン語：125~500ヘルツと1,500~2,500ヘルツ⁸）。しかし、TOEFLの点数では、スペイン語話者の方がイタリア語話者より成績が良い。また、ロシア語は、125~10,000ヘルツと、かなりの周波数をカバーしているので、英語のリスニングに問題がないと考えられる。しかし、実際はロシア語話者のTOEFLの成績は、スペイン語話者に比べて良くない。したがって、母語との周波数の違いのみではリスニングの力の差を説明することができない、と白畑(2004)は主張している。

たしかに、白畑の主張は的を得ているが、周波数の違い自体は看過されるべきではない。なぜなら、「言語が聴こえ、理解できる」という現象は、音声の知覚自動化プロセスと、その音声を理解するプロセスから構成されており（第4章で詳述）、周波数の違いが、前者のプロセスにおいて重要な役割を果たす可能性を完全に否定できないからである。

また、補足として、周波数の違いだけを学術的根拠とした教材が巷にはあふれているので、読者に注意を喚起したい。つまり、教材により、英語の周波数だけに耳を慣らしたとしても、音声の知覚プロセスでの限定的な効果が期待されるだけであり、それだけで、リスニング能力自体が向上することはない。

■ 理由4：日本人の国民性／恥の文化

一般的に、日本人は恥じらいがあり、曖昧さを好み、Yes/Noをはっきりさせないシャイな国民性／性格の傾向があると理解されている。その一見したら内向的に思われる性格が、仮に、積極

⁸スペイン語において、501~1499ヘルツの周波数が抜けているため、母音と子音の中間にあたる音素が存在していないと推測できる。

的で外向的な性格であれば、より多くの会話の機会や試行錯誤の機会が得られ、必然的に英語の能力も向上していくと考えられる。実際に、筆者が海外の語学学校や大学にいた頃、ヨーロッパや南米出身の学習者が間違いを恐れずにどんどん発言し、会話能力を伸ばしていく一方で、多くの日本人の発言量が、相対的に著しく低く、と同時に、口頭での英語運用能力も相対的に低いと言わざるを得ない状況であった。

しかし、白井(2004)、白畑(2004)は、性格と外国語能力が直接的な相関関係がないと結論づけるデータを提示しており、外向的な性格そのものよりも、「外国語で会話をするを含む」外向的行動を実際に行うことが重要であると主張している。

また、遠藤(2010)は、英語での討論会に参加することで、言語能力の向上だけにとどまらず、コミュニケーションを円滑に行う方略や知識が身に付き、他者とやりとりしようとする態度（意欲、積極性、動機付け）が高まり、普遍的コミュニケーション能力が向上する、と主張している。その能力が向上することで、英語に対する、継続的かつ意欲的な学習も助長されることが予測できる。

これらをまとめると、内向的であること（外向的行動を行わないこと）は、英語の使用機会への障壁となり、間接的な遠因として、少なからず一般的に日本人が英語が苦手であることに結びついていると言える。

■ 理由5：文法偏重の中等英語教育

しばしば、文法中心、暗記中心の英語教育が批判的となるが、文法能力も暗記能力も、英語を運用していく上で必要不可欠な能力であることは明白である。問題は、英語教育が、それらの能力の教授だけに“偏重”してしまっている点である。なぜなら、英語の読み書きだけで十分である時代は、とうに過ぎ去り、読み書き能力に加え、コミュニケーション能力（聞く力、話す力）を含めた4技能そろっての英語能力が、求められるようになってきたからである。

そのような中等教育を受けてきた学習者にとって、英語での会話が苦手であることは、当然であると言える。そんな中で、中高におけるバイリンガル教育⁹の導入、小学校における外国語（原則として英語）活動の必須化などの流れがあり、音声にも焦点を当てた英語学習を開始するという方針も出されてはいる。しかしながら、新しい時代に対応した英語学習の教授法、ならびに、それを教えられる教師などの体制が整っておらず、目下、過渡期であることは間違いない¹⁰。

■ 5つの理由のまとめ

以上より分かることは、「もともと日本人にとって英語が苦手なことは当然である」ということである。ここで示したいことは、その事実を逆手に取り、いわば開き直りの心的態度をはじめからとっていくことで、中長期的な動機付けに役立てられるということである。つまり、日本人は簡単には英語能力が向上しないという認識のもと、忍耐強く学習を続けて行く覚悟をあらかじめ持つておくことで、中長期的な動機付けをより強固なものにできるという示唆である。

2.3 どんな英語学習者が成功するのか？

■ 動機付け

⁹ 学習対象言語を習うのではなく、その言語環境の中で、他の教科を学習することで言語能力の向上を図る教育。

¹⁰ 次節2.3で触れられている方略30、方略31も参照されたい。

まず、CLAメソッドなどの学習方略を利用する前に、そもそも学習者の動機付けについて考える必要がある。なぜなら、前節でも触れたように、英語が公用語である国々に比べ、日本における環境的な英語に対する動機付けは相対的にかなり弱いと言えるからである。その中で、いかに動機付けをして、英語学習に対する高いモチベーションを持続していけるかが、英語学習の成功において重要であることは言うまでもない。

第二言語習得における動機づけに関する研究は、1950年代後半以来、西オンタリオ大学のRobert Gardnerを中心に進められてきた。その研究の中で、Gardnerは、第二言語習得における学習意欲を、「統合的動機付け」と「道具的動機付け」とに分類した。

「統合的動機付け」は、学習対象言語を話す人々の文化に対して共感をもち、同じように振る舞いたいという欲求から生まれる動機付けである。EUや北米などと比べ、移民が比較的少ない日本においては、その対象言語を公用語としている国の音楽や映画などに惹かれる場合が主なる例である。

「道具的動機付け」は、実利に関わる動機付けである。例えば、資格、就職、昇進などのために英語を学習するといった、金銭面に関わる意欲であったり、受験や留学に向けてテストでの点数を獲得するためなど、実利的な目的を達成するための「道具」としての動機付けである。

以上のように、英語学習にさしあたり、方略などの選択を行う前に、統合的／道具的な視点から、学習者自身が自分の本質的な欲求と向き合い、学習者自身の¹¹動機付けを行うことが、英語学習成功の鍵となる。

また、Gardner(1985:83)は、外国語学習の成功に、動機付けだけではなく、外国語学習に対する「態度 (Attitude)」も密接に関係していることを先行事例と分析的調査を用いて示している。次項では、その態度についても絡めて詳述していきたい。

■ 外国語学習成功者に共通する”態度と方略”の成功パターンの抽出

「外国語学習成功者に共通する”態度と方略”の成功パターンの抽出」についての研究としては、竹内(2003:75-209)が最良であると判断した。竹内(2003)が最良であると判断した理由は以下の5点である。

◎1点目：18名のいわゆる英語の「達人」のインタビューを通して、外国語学習成功者に共通する態度と方略の成功パターンを抽出している点。ここで定義される「達人」とは、

- (1) 日本で生まれていること
- (2) 12歳以降に本格的な英語学習を開始していること

¹¹ 私自身が、TOEIC 980点/TOEFL iBT 99点を獲得した際に、動機付け(やる気/モチベーション維持)の方法として用いていた手法(教材)がこちらです。⇒ http://v6.advg.jp/adpv6/r/7py_g23 具体的な点数獲得という成果が実際に出ているので、私自身で効果は実証済みです。

※ただし、こういった教材は好き嫌いがありますので(かつ高額です)、ご購入の前に、一度、以下で紹介している本の付属CDで初回の内容を聴かれて、ご自身の肌に合っているかどうか確認しておけば、ハズレがないはず。⇒ <http://amzn.to/1HrbFwP> (教材の初回内容がCD収録されています。)

- (3) 主として日本で英語を学び、留学経験があるとしても時期的に遅く、豊富ではないこと
- (4) 家庭環境として英語の使用が日常的ではないこと
- (5) 現在は英語を使う仕事をしていること

の5つの条件を満たし、なおかつ竹内あるいは竹内の研究協力者が個人的に接触をもち、

(6) その英語能力が「きわめて高い」と判断を下す機会を持たた人たち、あるいは、職業的にその英語能力に疑いのない人たち（たとえば通訳者）、としている。

(7) なお、ETLL¹²的要素がないことも「達人」の条件として組み込まれている。

●2点目： 外国語学習成功者が著した書籍、69冊（分析総人数169名）について、相当量の分析を行い、その共通パターンを探っている点。 ※達人18名を加えて、総勢187名。

●3点目： 日本人大学生153名にテストを実施し、点数によって、上位群と下位群に分類し、その学習記録を比較分析し、共通パターンをまとめている点。

●4点目： 以上3つの質的分析データから得られた共通パターン（外国語学習成功者に共通した”態度と方略”における成功パターン）をまとめあげ、その結果について、第二言語習得研究の知見から逐一裏付けを行い、一定の整合性を明示している点。

●5点目： 質的分析データから得られた共通パターンの整合性を、量的アプローチ（データの数値化と統計処理を基調とする手法）も用いて、さらに補強している点。

以下に、竹内(2003:75-209)における、外国語学習成功者に共通した”態度と方略”の成功パターンの抽出をまとめた表を示す。その中で使用される初期/中期/後期という3段階は学習進度を表している。

以下の外国語学習成功者に共通する31の方略と5つの示唆が、英語上達レシピである。

【英語上達レシピ】

～留学なしでペラペラになった英語成功者【187名】の成功学習パターン集～

¹² Exceptionally Talented Language Learnerの略で、左脳への言語能力の側頭化が進んでおらず、言語に関する記憶力が極めて高い特異な学習者のことを指す。

I. 【メタ認知方略】における成功者の共通パターン

※メタ認知方略とは、学習の段取り、使用機会や時間の調整、目標の設定、進度の確認など、学習者が1つ上（メタ）の視点から自身の学習を俯瞰する方略。学習に対する“態度”でもある。

《使用機会・使用条件に関して》

◎方略1：（受信面：どの段階でも）対象言語と接触する機会をできるだけ増やす

◎方略2：（発信面：どの段階でも）対象言語を使用する機会をできるだけ増やす

◎方略3： 一段高いレベルで対象言語を使う必要がある場面・タスクに自らを追い込む（中期頃から）

◎方略4：（教室場面や自習場面での）練習活動と並行して、現実場面での言語使用を積極的に増やす（初期後半から）

《時間の調整に関して》

◎方略5： 対象言語を定期的に学習する（どの段階においても）

◎方略6： 対象言語を集中的に学習する（中期） ※中期に寝ても覚めても英語を学習することにより格段に上達する。

《動機付けに関して》

◎方略7：（職業的成功ばかりを考えるのではなく）学習そのものやコミュニケーション活動自体を楽しむ

◎方略8： 短期の技術的な目標を持って学習を進める

◎方略9： 学習方法や学習過程の特性を理解する ※英語における進歩は急速にはやってこず、一定のところまで溜めておいたものが、爆発的に急激に現れるもので、「蓄積と爆発」の繰り返し。

II. 【リスニング】における成功者の共通パターン

◎方略10： 細部にいたるまで「深く」、「細かく」聞く（初期から中期）

※ この方略は、ディクテーション（一字一句聞こえた音声を文字化する学習手法）などの学習手法を通して、韻律・音変化に関する脳内のデータベース形成をはじめとした基礎固めを行う際に、非常に有効である。

◎方略11： 意味内容・情報に着目して「広く」聞く（中期以降）

※ 自然な韻律にのせて大量の外国語を聞くことで、脳内に蓄積された英語に関するデータベースの使用を自動化する効果がある。

III. 【リーディング】における成功者の共通パターン

◎方略12： 細部にこだわり「分析的に」読む（初期後半から中期）

※ 文法、構文などの知識のデータベース化とその意識的な使用が目的。

◎方略13： 意味内容に重点を置きながら「大量に」読む（中期以降）

※ データベース使用の自動化と言語経験の増大が目的。

◎方略14： 繰り返し音読する（初期から中期）

※ 我流にならないように、CDなどモデル音声とともに音読。

◎方略15： 母語に訳さないで読む（中期以降）

IV. 【スピーキングと発音・韻律】における成功者の共通パターン

《スピーキングに関して》

※外国語は勝手に湧いてこないなので、(1) まず大量の例文をしっかりと覚えて、(2) 活用練習をする。その後、覚えた例文を(3) 実際のコミュニケーション場面で積極的に使用していく。この(1) → (2) → (3) という一連の方略の流れが、成功者の共通パターンとして抽出された。

◎方略16： 基本文例・表現を大量に、徹底的に暗記する（初期から中期）

◎方略17： パターンプラクティス（第5章で後述）などを通して、暗記したものを自由に使えるように練習する（初期から中期）

◎方略18： 「流暢さ」を重視して、会話実践を行う（初期から中期）

◎方略19： 外国語による独り言や会話シミュレーションをする（中期）

◎方略20： 「正確さ」を重視して、会話実践を行う（中期から後期）

《発音・韻律に関して》

◎方略21： モデル音声をよく聞き、正確にまねる（初期から中期）

◎方略22： シャドーイング・リピーティングをおこなう（中期から後期）

◎方略23： 母語話者の口元に着目し、その動きをまねる（個人差大）

V. 【ボキャブラリー】における成功者の共通パターン

◎方略24： 基礎語彙の速やかな蓄積をおこなう（初期）

◎方略25： 文脈化／音声化／身体化／ネットワーク化などの多重経路と複数の手がかりを使い、語彙を記憶する（初期から中期）

◎方略26： リスト化により特定の語彙を増やす（初期および後期）

※ 記憶に関しては、入力経路を増やし、記憶材料を文脈化、音声化、身体化、そしてネットワーク化していくことが有効なようである。

Ⅶ. 【ライティングと文法】における成功者の共通パターン

《ライティングに関して》

◎方略27：リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れる」（中期以降）

◎方略28：読んだものから表現を借りて覚え、利用する（中期以降）

◎方略29：定期的に書き、添削してもらう（中期）

《文法に関して》

◎方略30：形式やルールを意識的に学ぶ（中期前半頃から）

◎方略31：学んだ形式やルールについて文脈の中で気づき、確認する（中期以降）

※この「学び」と「気づき」の二つは、学んでいなければ気づくことができず、学んでいても実際場面での形式やルールの使用に気づくよう注意を向けられなければ知識の段階で終わる、というような関係にある。こうしてみると、日本における従来の文法教育は「学ぶ」側面に重点が置かれすぎており、大量の題材に触れながら文脈の中で「気づく」側面を十分に強調しえなかったことが、役に立たないとの批判を受けてきた理由の一つなのかもしれない。

【5つの示唆】外国語学習に王道はあるのか

● 示唆1： 以上の31の方略は、秘術などではなく、ごくごくありふれたものである

● 示唆2： 方略には適切な使用時期というものがある

● 示唆3： 第二言語習得環境の違う北米での研究をそのまま日本に移植はできない

※日本人には日本人に適した方略があるということ。

● 示唆4： 学習成功者が利用する方略には、ある一定の共通の範囲があり、その中から個々人が好みに合わせて選択していること

※成功者の方略は、「絶対にこうしなければ英語がうまくならない」というような一意的な方略ではなく、ある程度の幅（個人差／個人の好みの違い）がある。

● 示唆5： 竹内(2003)が「外国語学習成功者が何か特別な学習方法を採用しているのか」というテーマに取り組み、十数年の年月を費やし、最終的に至った結論は、、、

「学問に王道なし。」

特別優れた秘術のような方略があるのではなく、ごくありふれた学習方法を挫折せずに、継続的に行えば、相当に高いレベルまで外国語を習得できる

※竹内(2003)は、この結論を、「ある意味ではホッとさせられるような、万人に外国語習得の可能性を留保した、歓迎すべき結論であった」と締めくくっている。

※以上のI～VIならびに【5つの示唆】は竹内(2003)を参考に独自に再構成した図

※これらのまとめに関する詳細は、竹内(2003:197-209)を参照されることを強く薦める。

以上の31の方略と5つの示唆（英語上達レシピ）が、竹内(2003:75-209)における、外国語学習成功者に共通するパターン（態度／方略）である。

このパターンをそのまま実践することができれば、外国語学習に成功する可能性が格段に向上するのは間違いない。しかし、問題は、比較的抽象度が高い状態で31の方略が提示されており、具体的にどのような手法や教材を使って実践していけばいいのかを、学習者個人の趣味趣向に合わ

せながら考え出さなければならない点である。つまり、これらのパターンを実践するには、実践する前に、一度、メタ認知方略を取らざるを得ないという障壁にぶつかってしまう。相当に動機付けされた学習者であれば、これら31の方略を自分なりに実践するような学習計画を組み立てることは可能であるが、そうでない場合は、参考にする程度か、もしくは、面倒であるために、あまり重要視せず、これまでの方略なき学習法から抜け出せないケースさえ考えられる。

その解決案として、**CLAメソッド**を考案した。つまり、CLAメソッドとは、これらの「31の方略と5つの示唆」（英語上達レシピ）を具体的に実践する際に参照するガイドライン（道案内役）であり、基本の英語上達レシピを、さらに理論武装した”本格派レシピ”である。

また、英語上達レシピをベースにして創られたCLAメソッド（本格派レシピ）を、さらに簡単に利用できるようにしたのが eigo-manabu.jp（特に、サイドバーの『**CLAメソッド活用例**』）である（第8章で後述）。

逆に言えば、CLAメソッドは、第二言語習得研究による「31の方略と5つの示唆」（英語上達レシピ）をベースとして構成が組まれているため、巷にあふれている個人的経験のみに依拠した英語学習アプローチ法とは、確実に一線を画している。そして、CLAメソッドは、先人の汗と涙の結晶である第二言語習得における先行研究をベースとしているため、その一事をもってしても、この時点ですでに一定の客観性と信頼性が認められると言える。

それでは、実際にCLAメソッドとは具体的にどういったものなのか、次章で詳述していく。

第3章 CLAメソッド（本格派レシピ）とは

《キーワード》

CLAメソッド 本格派レシピ 等級段階別に分類 中間性 オーダーメイド性

3.1 CLAメソッドの定義と本質的な効用

CLAメソッド・・・ **Classified Language Acquisition メソッド**
の略称。以下の3.3でその意味と、内容を詳述していく。

また、CLAメソッドは、2章で紹介した31の方略と5つの示唆（英語上達レシピ）を理論武装した”本格派レシピ”であり、その方略と示唆を具体的に実践するためのガイドライン（道案内役）でもある。

第3章～第7章は、その”理論武装”の内容を詳述している。この内容を理解することで、

- ・外国語学習者が目指す、理想の料理（理想の英語力）を完成させるために、
- ・何の食材（教材）がどれだけ必要か？
- ・どんな調理器具（学習手法）でどれだけ時間、調理（学習）を行えばいいか？
- ・どのような調理手順（学習手順）が効率的かつ最短か？

を自らの状況と好みと目標に合わせて、自ら導き出せるようになり、**英語学習の手順で迷うことはなくなる**。そして、**最短距離で、効率良く理想の英語力を獲得できる**ようになる。これが、CLAメソッドの本質的な効用である。

3.2 CLAメソッドの早見表の提示

以下に、Listening, Speaking, Reading, Writingの各4技能におけるCLAメソッドの早見表（全体像）を提示する。現時点で全て理解する必要はなく、それぞれ第4、5、6、7章で詳述していく。この早見表を使いこなせるようになれば、各4技能において、学習者自身が、今現時点でどの段階のレベルにいるかを客観的に把握でき、次の段階に上がるために「今やるべきこと」を明

確に導き出せるようになる。これが可能になれば、謳い文句で魅惑的に宣伝された高額な教材に惑わされることもなくなり、「今やっていることが本当に正しいのかどうか分からない」という不安でモチベーションを下げられることもなくなる。つまり、英語学習におけるブレない軸ができ、成果が出ていない状況下でも、自信を持って学習を継続できるようになる。

Listening Sectionの早見表

<Listeningの段階の早見表>

段階 1. 生の音を言語として認識する準備段階 (フィルター段階)

準備 1 : 単音 2 6 音の体得 (慣れ)

準備 2 : 聞こえる周波数音域の拡大

段階 2. リスニングの“基盤”作りの段階

基盤 1 : 音声知覚の自動化 (下位: メモリ中の初期処理)

基盤 2 : ループの効率化による、リテンション能力の向上と内在化の効率化 (中位: メモリ中の中心処理)

段階 3. 音変化への“慣れ” (下位: メモリ中の初期処理)

段階 4. 理解段階 (上位処理: メモリと長期記憶データベースがリンクする意味理解の処理)

理解 1 : 「理解処理段階でアクセスされる長期記憶内の6つのデータベース」へのアクセスの高速化

理解 2 : 長期記憶データベースの情報量の向上

<手法の早見表>

段階 1.

・発音 (単音) に特化した教材 (Ex. 『発音が良くなる本 (DVD付き)』中経出版 など)

・高周波数に特化した教材 (Ex. 『奇跡の音』きこ書房 など)

段階 2.

1. 教材をリスニング (Ex. 『K/Hシステム』アルク などのCD教材を活用)

2. マンプリング (小声で行う初期のシャドーイング)

3. パラレルリーディング (音声にフォーカス)

4. 英文の意味をチェック

5. K/Hシステム方式のシャドーイング (シャドーイング、スラッシュリーディング/リスニング、自分の声の録音、目的の意識化) による Prosody (基本のリズム、語調、強弱、抑揚) の習熟

6. コンテンツ・シャドーイング (意味をつかみながらのシャドーイング)

7. やまと言葉落とし (日本語を使用して、意味を音声とリンクさせる)

8. リピーティング (音韻ループを効率化しリテンション能力を向上させる)

9. delayed シャドーイング (1秒遅れで行う、さらに負荷が増す強化版のシャドーイング)

10. レシテーション (暗唱)

+

・英語のラジオを集中して聞き、頭の中でシャドーイングする手法

・立体ノートテーキング → 英語戻し (暗唱の代わり) → チャンクとしての独り言

(ラジオと立体ノートテーキングの順番は任意)

段階 3.

映画 (ネイティブのナチュラルスピードの会話教材) のディクテーション

↓
映画 (DVD) のシャドーイング (=アクティング/演技)

↓
慣れてきたら耳だけで、もう一度ディクテーション

↓
最後にもう一度、アクティング

・このセットの繰り返し

段階 4.

多聴段階:

・映画を楽しむ+意味調べのセット (※段階3以前の多聴は、能力向上ではなく、英語に慣れるためや、モチベーション維持が目的。)

・TV・動画・ラジオ・講義 (TEDなど) ・会話・洋楽 (歌) などの“生の英語”に、どんどん触れる

Speaking Sectionの早見表

<Speakingの段階の早見表>

(Listening Sectionとの違い=“手法”が各段階の中に組み込まれていること。)

ポイント： <行動主義と構成主義的手法を組み合わせる>

認知・行動主義的手法(教室的)・・・パターンプラクティス(PP)、音読、パラレルリーディング、文法、表現チャンクの繰り返しによる
暗記・暗唱

VS

社会・構成主義的手法(実践的)・・・会話、独り言、会話シミュレーション、実況中継、会話の反芻

↓

組み合わせる：

PPや音読、独り言などにより、チャンク使用の自動化が促進され、注意資源が余ることで、さらに高次な会話が可能になる。その自動化されたチャンクを実際の会話の中で使用し、それぞれのチャンクごとの習熟度を上げることで、より柔軟な会話が可能になる。

段階 1. 舌作りの段階

- ・単音26音の発音(手法：発音本のパラレルリーディング、口まね)
- ・基礎的な単語の発音を体得、舌作り(音、文字、脳、舌の連結)
- ・「日本語的英語」の語彙(中間言語)から、「英語的英語」の語彙への変換作業(Listening段階1の単音体得やListening段階2のシャドーイングでも行う作業) Ex. キャリア と career(/kə'ri:ə/)の違い
- ・初歩的文法の体得と活用形の練習(英語における“九九”)
- ・過去、未来、受け身、現在完了などの基礎文法の理解と体得

※英語を本格的に学習したことがない学習者へ

- ・英語の始め方：自分が好きな英語の歌、映画、演説などの、音声とプラスイメージから学習を開始する
- ・英語の基礎理解の方法：中学の教科書などの基礎レベルの教材を利用し、基礎語彙と基礎文法を理解する
- ・簡易チャンクの体得方法：I go to ～などの一文を使い、全ての活用形を反復練習して、自動化するまで続ける

段階 2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階(チャンク会話法の6つのステップ)

<チャンク会話法の6つのステップ>

1. 表現集の通読、丸暗記、一問一答(運用段階2-1に依拠)
2. PP(パターンプラクティス)(運用段階2-1, 2, 3に依拠)
3. CDなどのモデル音声で、パラレルリーディングを行いリズムを体得(運用段階2-2に依拠)
4. PPを行い、その例文の後に、一文ずつ新たな内容を加えながら独り言(運用段階2-2, 3に依拠)
5. ボイスレコーダーで録音して確認と修正(運用段階2-2, 3に依拠)
6. テーマを決めて、体得した表現チャンクを使って自由に独り言(運用段階2-3に依拠)

運用段階2-1：表現チャンクが集積(手法：表現集、パターンプラクティス、活用表、シャドーイングやアクティングからの一部転移)

構文集・会話フレーズ集・中学レベルのチャンク集、メールマガジン、iKnowやBusuu.comなどのOnline学習サイト、ラジオ英語講座などを利用する。

運用段階2-2：正確さよりもある程度の流暢さを意識(手法：英会話、パラレルリーディング)

根拠・・・始めは正確さよりも、ある程度の流暢さを重視した方が、学習が進みやすいという英語学習成功者の共通パターンがあるため。
(“通じた”という感覚が始めは大切。)

「流暢さ」と「正確さ」のトレードオフについて・・・注意資源には限りがあるため、発話する際に、流暢さを意識すると、正確さが失われる。その逆もしかり。

運用段階2-3：チャンクの運用の自動化と正確さの向上

(手法：独り言、パターンプラクティス)

段階 3. さらなる流暢さと機転の利いた会話(構成主義的手法の段階)

(手法：英会話 + DVDアクティング、歌、ボイスレコーダーを用いたテーマを決めた独り言)

Reading Sectionの早見表

<Readingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟段階

- ・基礎語彙（2500～3000語が目安）を、文脈の中で暗記していく（速読英単語などの教材を利用）
- ・文法構文に関しても、速読英単語などの教材を利用し、文章の中で習熟していく

※ただし、初歩的な語彙・文法が理解できていない場合は、中学の教科書レベルの教材を利用し、初歩的な語彙と基礎文法を先に体得する必要がある。

段階 2. 文字と音（内語）のつながりの強化段階（音読段階／リーディングの基盤作りの段階）

手法：音読

音読による効果・・・音読を通して、文字と音のつながりを強化し、それを繰り返すことで、デコーディング（文字を見て→その語彙を脳内の長期記憶データベースから検索して→ワーキングメモリのループに内語として音声化する下位処理）の自動化・スピードが促進される。それにより、理解（上位処理）に、より多くの認知・注意資源を費やすことができるようになり、理解度も上がる。また、音読によって、ループ中の復唱能力も向上するため、リテンション能力が上がり、インプットされた情報（学習内容）が短期記憶でとどまらず長期記憶になりやすくなる（長期記憶データベース量が増強される）。さらに、音読によるリテンション能力向上は、リスニング能力の向上にまで効果が波及する。

<音読の留意点>

- ・音読は負荷が小さいことが難点であるため、常に速いスピード（負荷）で行うこと、そして、スピードの向上を意識して行うことが重要
- ・音読は集中型ではなく、長期継続型で繰り返すことで効果が増す
- ・音読は教材をまず理解してから行うこと（長期記憶データベースへのアクセスの高速化に伴う理解度の向上、内在化の高速化も同時に行えるため）
- ・それに伴い、音読をする前に、理解のための精読（細かく分析的に読む手法）を行うことになる
- ・音読はモデル音声をしっかり聞いてから行う方が好ましい
- ・多読ではなく、深くじっくり音読する意識で行う

段階 3. 多読段階

- ・雪だるま方式の多読法＝「偏ったテーマの文章を大量に読みこなすことで、雪だるまのコアとなるような多読の基礎（主に語彙量／スキーマ情報量／大意を掴む能力の向上）を醸成し、その多読の基礎をベースに様々な文章を多読していく手法」
- ・雪だるま方式の語彙習得法＝「偏ったテーマの単語集で集中的に語彙数を増やすことでコアとなる語彙群を獲得し、その語彙群をベースに、関連付けを行いながら他のテーマの語彙も覚えていく手法」

Writing Sectionの早見表

<Writingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟（Readingの段階1と同じ）

段階 2. 英借文の習熟と文章の添削（Speakingの段階2と同じく、論述用のチャンクを収集し、パターンプラクティスを通して、チャンクを使用したアウトプットに習熟する）

段階 3. Readingからの転移（Reading能力向上に伴う自動的なWriting能力の向上）

3.3 CLAメソッドにおける独自の3つの特徴

■ 特徴1：等級段階別に分類

特徴1の「等級段階別に分類」は、Classified Language Acquisitionの“Classified”に該当する部分であり、CLAメソッド最大の特徴である。では、具体的に何をどのように分類しているのかを詳述していく。

2.3の「示唆2： 方略には適切な使用時期というものがある」にあるように、各4技能別に、2.3で指摘された31の方略をそれぞれ、「初期／中期／後期」の基準に従って、各スキルの習熟段階（レベル／難易度）別に分類しなおした。分類の基本的なやり方として、「初期／中期／後期」の方略を、それぞれ、「初期→段階1」、「中期→段階2」、「後期→段階3、4¹³」の方略と読み替えて、習熟段階（レベル／難易度）別に再分類を行った。それが、上記した4技能別の早見表であり、この早見表の段階的な分類仕様自体が、CLAメソッドの根幹である。

また、下図のように、方略と手法と教材は連動しており、方略に習熟段階（レベル／難易度）があることは、とりもなおさず、手法と教材にも、習熟段階（レベル／難易度）が存在していることを意味している。



例えば、リスニングにおける方略10「深く聞く」に対応する手法は、一字一句音声を真似して口に出して練習するシャドーイング¹⁴もしくはパラレルリーディングなどが適していると考えられる。この両者においても、学習者への負荷の視点からみれば、テキストを読みながらシャドーイングする手法であるパラレルリーディングの方が難易度は低い。このように手法についても、習熟段階ベースでの分類が必要であることが分かる。また、その際に注意しなければならないのが、方略と手法との親和性である。例えば、方略11「広く多く聞く」に対応する手法としてシャドーイングが適していないのは明らかである。

その手法と結びつくのが教材である。当然、教材にも難易度があるのは周知の事実であり、その難易度と手法（さらには、その元である方略）の難易度（習熟レベル）を合致させる必要がある。また、方略と手法の関係と同じく、手法と教材の関係においても、両者の親和性が重要となってくる。

例えば、映画のDVDをシャドーイング（方略10「深く聞く」）の教材として選ぶのは、次の2つの理由により危険であると言える。1つ目の理由は、認知資源の問題である。門田(2007:58)が指摘しているように、Grabe and StollerおよびPressleyは、脳内にある認知資源(cognitive resources)の視点を利用して、リスニングにおける音声の知覚と理解について論じている。それを映画の文脈に当てはめると、英語の音声知覚が自動化していない状態で、映画の視覚情報が入ってくると十分に音声に認知資源を配分することができずに、結局音声知覚の自動化が進まないという現象が起こってくる。また単純に視覚情報で、音声がかつたつもりになってしまう危険性もはらんでいる。

2つ目の理由は、門田(2007:236)による、「 $i - 1$ 」¹⁵の素材選びについてである。ここでは、「 $i =$ 学習者の能力」を表しており、100語のテキストであれば、未知語が2、3語程度で

¹³ 段階4は、Listening Sectionのみ。Listening Sectionでは、テキストの分量の関係上（つまり、より分かりやすく表記するために）、方略と手法の段階分けを別個に行った。また、EMにおける、Listening Sectionでは、「慣れ」という曖昧な概念に対しても、別の角度から4つの段階に分類することで、Listening能力理解へのアプローチを試みている。

¹⁴ モデル音声を聞いた直後に、影を追うように、その音声の真似をしながら英語を発音していく英語学習手法である。

¹⁵ CLAメソッドにおいては、「 $i - 1$ 」の*i*を学習者のレベルではなく、TOEFLの得点別に分けたLv1からLv5を当てはめることで、個々人の曖昧かつ感覚的な段階分け基準を「得点という数字」により可能な限り画一化し、一定の客観性を保った上で、手法・方略の習熟段階に適した教材の選定を行っている。

ある、比較的簡単な素材 ($i-1$) を選ぶことをシャドーイングの際の留意点として示している。一般的に映画は、会話スピード、音変化、未知語ともに相当に難易度／負荷の高い教材であり、習熟段階（レベル／難易度）が低い方略である方略10「深く聞く」にとっては、不適切であると言わざるを得ない。（※もちろん、英語音声知覚の自動化が進み、多くのCD教材でシャドーイングの訓練を積んだ後であれば、シャドーイングの教材として映画を選択することは妥当である。）

このように、3 1 方略の各4技能における適性時期を、「初期→段階1、中期→段階2、後期→段階3、4」と読み替えて分類し、かつ、その方略を実行するために必要な手法と教材においても、その適性段階を示し、方略とセットで分類している。これが、CLAメソッドの最大の特徴であり、CLAメソッドがCLAメソッドたる所以である。

またCLAメソッドの段階分けにおいて、さらに分かりやすさを追求するために、テストの点数という、より馴染みのある別の尺度から、その分類仕様を”簡易便宜的”に表現してみた。

具体的には、その「初期→段階1／中期→段階2／後期→段階3、4」という習熟段階（レベル／難易度）の基準を、テストの点数という基準に変換し直した。伴って、早見表では4技能別であったが、点数という1つの尺度を軸に各4技能の方略を分類し直した。そのテストの点数として使用した指標が、TOEFLスコアである。TOEFLスコアという明確な点数により各技能の難易度／習熟レベル¹⁶を示し、“時期”や“段階”という少々感覚的な尺度ではなく、より客観性の高い分類として表現した。以下が、そのイメージである。



※筆者（足立）による作図

このイメージについて、<http://www.eigo-manabu.jp/5level/5level.html>で、各段階（レベル）ごとの説明と変換過程を詳述している。ただし、この「TOEFLスコアによる英語5段階」の表現は、より分かりやすく、かつ、教材選定の際には非常に有効であるものの、あくまで、上記の早見表

¹⁶ 本稿では、TOEFLの、各4技能における、実践的かつ精度の高い英語力測定を信頼し、「得点ベースのLv1からLv5の難易度」=「英語の習熟レベル」ととらえる。

の”簡易便宜的”な表現であり、その本質的な理解を得るためには、本稿の第4、5、6、7章を読み解き、早見表を理解する必要があることを、ここで明記しておく。

■ 特徴2：中間性

CLAメソッドの2つ目の特徴は、「中間性」である。中間性を、一言で説明すれば「一般書と専門書の間」ということになる。ここでいう、一般書とは、第二言語習得研究の知見／客観的な研究データを伴わない（または伴っていても乏しい）、著者個人の体験談がベースとなった書籍を指す。一方、専門書は、第二言語習得研究の知見／客観的な研究データを伴う、専門的に体系化された書籍を指す。

以下に、両者の良い点／悪い点をまとめた。

《一般書》の英語学習法

良い点：簡易な言葉で、即実践しやすい形でまとめられている点。

悪い点：客観的なデータがなく裏付けされていない場合が多いので、その学習方法が、誰にでも効果的であるという可能性が相対的に低い点。

VS

《専門書》の英語学習法

良い点：客観的なデータで裏付けされた専門的な学習方法であるため、信頼性／再現性が高い点。

悪い点：専門用語が中心であるため、第二言語習得研究者ではない英語学習者が、その理解と実践までに時間がかかってしまう点。

CLAメソッドは、この両者の中間に位置づけられる。つまり、CLAメソッドは、第二言語習得研究における専門的な知見を、できる限り簡易な言葉で、即実践できる形で体系化した学習法である¹⁷。

■ 特徴3：オーダーメイド性

特徴3の「オーダーメイド性」は、2.3の示唆4に依拠している。

● 示唆4： 学習成功者が利用する方略には、ある一定の共通の範囲があり、その中から個々人が好みに合わせて選択していること ※成功者の方略は、「絶対にこうしなければ英語がうまくならない」というような一意的な方略ではなく、ある程度の幅（個人差／個人の好みの違い）がある。

¹⁷ EMは、CLAメソッドをさらに分かりやすく即実践できる形で提供しているウェブサイトである。CLAメソッド内ではカバーしきれていない教材についても情報提供している。

すなわち、この示唆4を実践しているCLAメソッドにおいては、方略の意図とその段階分けさえ理解すれば、あとは、学習者の好みを方略利用時に反映させても構わないというスタンスをとっている。具体的には、手法／教材の選択も学習者の自由であり、どの技能のどの段階からでも学習者の英語の習熟レベルと目的に合わせて活用できるように体系化してある。初期／中期／後期という感覚的な基準を、段階1、2、3、4という基準に変えて、さらに、TOEFL点数ベースの指標を設けたのもそのためである。つまり、各学習者ごとの英語習熟レベルに合わせて、学習者の比較的曖昧な学習時期だけではなくて、点数ベースの英語能力も基準にして、各方略を利用できるように設計されている。

さらに具体的に言えば、CLAメソッドを実装したEMのサイト左に表示される「CLAメソッド活用例」（第8章で後述）の機能がその最たる例である。ここでは、受験、留学、海外旅行、ビジネスなど様々な目的に合わせたCLAメソッドの具体的な活用例がいくつも提案されている。つまり、CLAメソッドの利用方法は絶対的な1つのものではなく、学習者の目的／好み／レベル／状況（投資する時間や期限など）に合わせた、いわば、オーダーメイドのような形で利用可能なのである。これが、特徴3：オーダーメイド性の真意である。

最後に、竹内(2003:197)から同時通訳者の枝廣淳子の発言を引用させてもらう。

『〇〇式学習法がいいらしい』と飛びついて挫折する人が何と多いことか。〇〇式はその作者にはベストであっても、万人向けとは限らない。自分を勉強法に合わせる必要はない。

第4章 CLAメソッドにおけるListening Sectionの裏付け

《キーワード》

音韻ループ シャドーイング 内在化 音声知覚の自動化 認知資源

4.1 LISTENING SECTIONにおける早見表の再提示

Listening Sectionの早見表

<Listeningの段階の早見表>

段階1. 生の音を言語として認識する準備段階 (フィルター段階)

準備1: 単音26音の体得 (慣れ)

準備2: 聞こえる周波数音域の拡大

段階2. リスニングの“基盤”作りの段階

基盤1: 音声知覚の自動化 (下位: メモリ中の初期処理)

基盤2: ループの効率化による、リテンション能力の向上と内在化の効率化 (中位: メモリ中の中心処理)

段階3. 音変化への“慣れ” (下位: メモリ中の初期処理)

段階4. 理解段階 (上位処理: メモリと長期記憶データベースがリンクする意味理解の処理)

理解1: 「理解処理段階でアクセスされる長期記憶内の6つのデータベース」へのアクセスの高速化

理解2: 長期記憶データベースの情報量の向上

<手法の早見表>

段階1.

・発音 (単音) に特化した教材 (Ex. 『発音が良くなる本 (DVD付き)』中経出版 など)

・高周波数に特化した教材 (Ex. 『奇跡の音』きこ書房 など)

段階2.

1. 教材をリスニング (Ex. 『K/Hシステム』アルク などのCD教材を活用)

2. マンプリング (小声で行う初期のシャドーイング)

3. パラレルリーディング (音声にフォーカス)

4. 英文の意味をチェック

5. K/Hシステム方式のシャドーイング (シャドーイング、スラッシュリーディング/リスニング、自分の声の録音、目的の意識化) による Prosody (基本のリズム、語調、強弱、抑揚) の習熟

6. コンテンツ・シャドーイング (意味をつかみながらのシャドーイング)

7. やまと言葉落とし (日本語を使用して、意味を音声とリンクさせる)

8. リピーティング (音韻ループを効率化しリテンション能力を向上させる)

9. delayed シャドーイング (1秒遅れで行う、さらに負荷が増す強化版のシャドーイング)

10. レシテーション (暗唱)

+

・英語のラジオを集中して聞き、頭の中でシャドーイングする手法

・立体ノートテーキング → 英語戻し (暗唱の代わり) → チャンクとしての独り言

(ラジオと立体ノートテーキングの順番は任意)

段階3.

映画 (ネイティブのナチュラルスピードの会話教材) のディクテーション

↓

映画 (DVD) のシャドーイング (=アクティング/演技)

↓

慣れてきたら耳だけで、もう一度ディクテーション

↓

最後にもう一度、アクティング

・このセットの繰り返し

段階4.

多聴段階:

・映画を楽しむ+意味調べのセット (※段階3以前の多聴は、能力向上ではなく、英語に慣れるためや、モチベーション維持が目的。)

・TV・動画・ラジオ・講義 (TEDなど) ・会話・洋楽 (歌) などの“生の英語”に、どんどん触れる

4.2 2.3の方略10と方略11との整合性

II. 【リスニング】における成功者の共通パターン

◎方略10： 細部にいたるまで「深く」、「細かく」聞く（初期から中期）

※この方略は、ディクテーション（一字一句聞こえた音声を文字化する学習手法）などの学習手法を通して、韻律・音変化に関する脳内のデータベース形成をはじめとした基礎固めを行う際に、非常に有効である。

◎方略11： 意味内容・情報に着目して「広く」聞く（中期以降）

※自然な韻律にのせて大量の外国語を聞くことで、脳内に蓄積された英語に関するデータベースの使用を自動化する効果がある。

※竹内(2003)を参考に独自に再構成した図

2.3で示した、リスニングにおける、「外国語学習成功者に共通する”態度と方略”の成功パターンの抽出」から得られた、方略10、11と整合性を図る形で、CLAメソッドListening Sectionの段階分けがなされている。

まずはじめに方略10に注目すると、その適切な方略使用時期は、初期から中期である。これを、段階1、段階2として分類した¹⁸。段階1は【英語の音声自体を「深く」聞く段階／レベル】とし、段階2は【ナチュラルスピードより少し遅めの教材用英会話を「深く」聞く段階／レベル】とした。また、段階3は、中期から後期への過渡期として【映画のようなナチュラルスピード、もしくはそれ以上の英語を「深く」聞く段階／レベル】として設定した。

次に、方略11の適切使用時期である中期以降（後期）を、段階4として設定した。段階1、2、3によってリスニングの基盤を固めた上で、色々な教材や生の英語などの大量かつ幅広いインプットを行うことで、リスニングの理解力がさらに向上していくように設計した。

以上が、「方略10、11との整合性を保った上での、CLAメソッドのListening Sectionへの実装」に関する説明である。つまり、ここでは、「外国語に対する学習方略」という第二言語習得研究の視点から、CLAメソッドの説明を行った。次節からは、言語に対する機能的側面の第二言語習得研究の角度から、臨床実験データに基づいた脳科学の成果とともに、CLAメソッドについてさらに掘り下げた詳述を行っていく。

¹⁸ この段階分けは、TOEFLスコアによる難易度ベースのレベル分けを指していないので注意。なぜなら、この段階分けを行った後、この段階分けを根拠として、TOEFLスコアによる難易度ベースのレベル分けを行ったため。

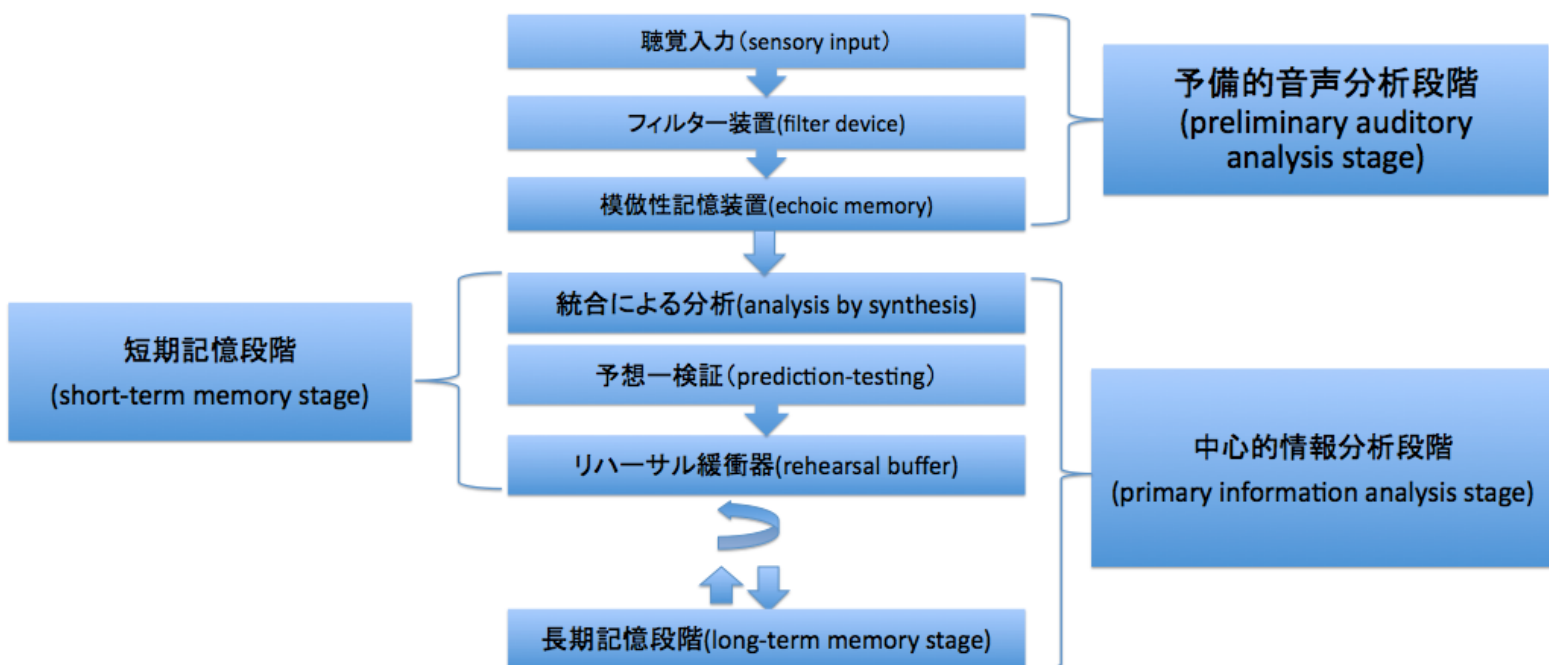
4.3 【段階1. フィルター段階】

■ 機能的側面の第二言語習得研究と脳科学から見た段階の構成

まず、【段階1. 生の音を言語として認識する準備段階（フィルター段階）】を裏付ける第二言語習得研究として、リスニングのモデルとリスニングにおける「知覚と理解」について詳述する。

門田（2007:42）は、Pimsleurの論考を参考にして作成した、以下のようなリスニングの簡易モデルを提示している。

【リスニングの簡易モデル】



※門田（2007:42）を参考に筆者（足立）が作成した図

門田(2007:43)による、このリスニングモデルに関する記述を参考に、以下詳述する。

フィルター装置は、同時にさまざまな音源から競合して耳に届く聴覚信号（聴覚入力）の中から、私たちが注目する音声だけをセレクトできる装置のことを指す。つまり、この装置で、聴覚信号が言語であるか雑音であるかを判別する。シャドーイングを使用した聴覚音声学研究成果が生かされて、この段階が設定されている。

模倣性記憶装置（エコイックメモリ）では、感覚記憶(sensory memory)として、聴覚入力をそのままの形で、ごく短い間格納する処理を行う。一般に視覚版の感覚記憶をアイコニックメモリというのに対し、聴覚版の感覚記憶をエコイックメモリと呼ぶ。

ここまでの、予備的音声分析段階（低次処理段階）であり、ここでは統語（文法）処理や意味処理は行われない。次の短期記憶（現在では、ワーキングメモリと呼ぶのが一般的）段階で、中心的な統語（文法）処理や意味処理が行われると考えられている。

中心的情報分析段階は、長期記憶¹⁹内の各種の言語知識データベースから言語情報を検索して、それを基にした「総合による分析」を通して各種言語情報処理が行われる舞台である。基本的には、予備—検証システムが働いているとされている。関連する言語情報には、(a)音変化などの音声知識、(b)文法知識、(c)語彙知識、(d)文脈知識、(e)パラ言語（paralanguage：喜び、怒り、悲しみなどの話し手の感情情報）、(f)ボディランゲージについての知識などがある。この段階に至ってはじめて、意味を理解するという現象が起こる。

以上が、リスニングの簡易モデルにおける、リスニングの仕組みである。次に、このモデルのプロセスを、「知覚と理解」の観点から、さらに分かりやすくカテゴライズし直すと、以下のような図式になる。



※門田(2007:45)を参考に筆者（足立）が作成した図

- ・ 音声入力： リスニングの簡易モデルにおける聴覚入力
- ・ 知覚： リスニングの簡易モデルにおけるフィルター装置とエコイックメモリ
- ・ 理解： リスニングの簡易モデルにおける中心的情報分析段階

そもそも知覚とは、外界の情報入力（インプット）に対して脳内データベースから関連データを検索・適用する作業である。音声の文脈で言えば、音声の知覚段階は、耳から聴こえた音声を、脳の中の言語処理システムにインプットし、どんな音が含まれているか分かることを意味する。言い換えると、音声知覚とは、耳で聞いた音声がどのようなものか判定し、それを脳の中で操作可

¹⁹ 長期記憶段階とリハーサル緩衝器（短期記憶段階）との関係性と機能については、4.4にて後述する。

能な音声形式に変換することである。この変換された音声形式は、一般に音声表象や、音韻表象と呼ばれている。

こうして取り込んだ音声に対し、理解段階では、その意味を理解するために各種の処理を総合的に行う。つまり、理解段階では、この脳の中で形成した音声・音韻表象をもとに、1. 語彙処理、2. 統語（文法）処理、3. 意味処理、4. 文脈処理、5. スキーマ（一般的常識や背景知識）処理、といった様々な操作を実行する。これらの処理を総合的に行うことで、音声の理解を行う。

音声を「知覚と理解」のプロセスの中で解釈するにあたり、学習者は、長期記憶にあるメンタルレキシコン（心的辞書／脳内のデータベース）を引いて、その音声を解釈しようとする。これは、単語認知や語彙アクセスと呼ばれる。メンタルレキシコンは様々な情報を保管しているが、音声知覚については、音韻データをすでに保持していることが前提条件となる。例えば、英語学習初心者はこれを有していないので、英語の音声を聞いた場合に、解釈することができず、意味処理をす
る前段階で、雑音として処理されてしまう。

また、特に日本人英語学習者に顕著に見られる傾向として、中間言語（Appleを /'æpl/ ではなく /アップル/ と日本語式英語発音で記憶すること）を使用して音韻データ収集（記憶）を行ってしまっている。よくこの中間言語（日本語式英語発音）で覚えることの弊害として I ate rice.（お米）と I ate lice.（Louse:シラミの複数形）の例が紹介されている。同じ /ライス/ の発音でも意味が全く異なってしまう例である。このように日本語式英語発音で音韻データ収集を行っていれば、当然、リスニングにおいてもスピーキングにおいても大きな障害となることは容易に察しがつく。これは、会話などのコミュニケーションが重要視されてこなかった文法偏重型教育において、長らく看過されてきたゆゆしき問題であり、中間言語を使用しない状態での音韻データ収集（または修正）が、リスニングの初期段階（先に説明した知覚段階）において必要であると言える。

このような学術的裏付けに依拠して、【**段階 1. 生の音を言語として認識する準備段階（フィルター段階）**】という方略を、CLAメソッド Listening Sectionの**段階 1**として設定した。

■ 準備 1：単音 26 音の体得（慣れ）について

次に段階 1 の中の下位項目である、【準備 1：単音 26 音の体得（慣れ）】の方略の設定について詳述していく。

先に説明した「音韻データベースにおける中間言語の排除の重要性」を根拠に、この準備 1 の方略を設定した。それに加えて、補足理由として、以下の 3 つの理由をここで提示する。

- (1) 「リスニングにおける 4 つの慣れ」の段階 1
- (2) モーター理論
- (3) 日本語と英語の分節・音韻情報の違い

1 つ目は、筆者（足立）が、リスニングにおける、いわゆる”慣れ”を 4 段階に分けて作成した図（次頁）に基づいた理由である。

段階1	単音レベル (abc) での慣れ
段階2	単語レベル (音・意味・文字+語彙) での慣れ
段階3	文レベル (文法・表現) での慣れ
段階4	文章&会話レベル (音韻・音変化・スピード) での慣れ

「段階1. 単音レベルでの慣れ」がリスニングにおける最初に習得されるべき慣れであり、それは、単音26音の音声データを日本語式英語ではなく、ネイティブの正しい発音のまま音韻データとして収集するプロセスを示したものである（詳細はEMの <http://www.eigo-manabu.jp/Listening/Listening.html> を参照）。これが、とりもなおさず、**準備1**の方略設定を下支えしている。

2つ目の、モーター理論とは、人間が音声を認識する際に、音声を発声する筋肉（モーター）への指令を参照しているという考え方で、米国Haskins研究所のLiebermanらによって提唱された²⁰。最近の認知科学において、人間の言語認知能力（特にリスニング能力）にとって身体性の記憶が重要である、という知見が一般化してきている。その身体記憶と整合性を保つ形で、モーター理論では、音声認識において、相手の発音を自分が出す場合にどの筋肉を動かすかを覚えており、その記憶をベースに認識していると考える。また、「発音できれば聞き取れる（ミラー・ニューロン）」にも依拠した理論である。未だ確証的なデータに乏しく、仮説の域を超えてはいないが、モーター理論が正しい可能性も完全に否定できないため、一考の価値ありと判断し、理由の1つとしてここに提示した。

3つ目の理由は、日本語と英語の分節・音韻情報の違いである。JACET SLA研究会(2005:163)によると、日本語の母音が5母音であるのに対し英語では8母音あり、音節も日本語は98種とされるが、英語は3000種以上と言われている。また、日本語を発話する場合はモーラ（拍）が中心となり、音節中心の英語とは全く違った音韻的特徴が認められる。さらに、日本語は、「子音+母音」の開音節を基本としている点で、「子音+母音+子音」の閉音節を基本とする英語と音節面で異なった言語といえよう。であるから、英語の音声を注目して繰り返し聞き、英語独特の音節構造に対する分節音声知識を獲得することではじめて、フィルター装置段階において、英語の音声を言語として認識できるようになる。逆に、この英語の音節情報がなければ、“注目”して英語を聞いていても、脳内で雑音と処理され（＝リスニングモデルの「中心的情報分析段階」においてメンタルレキシコン内の音韻データと音声とが合致せず、理解不能の音声情報として処理されるという意味）、いつまでたっても理解処理段階まで至らない。したがって、まず単音から音韻データを収集した上で、単語レベルにおいて正しい分節・音韻情報データを収集することが必要である。

以上が、**【準備1：単音26音の体得（慣れ）】**の方略の設定を裏付ける第二言語習得研究からの知見である。

²⁰ 最適性理論による英語学習 <http://www.eikaiwanopl.jp/information/nazemuzukashi/motorthory.html>

その方略に関連した、手法と教材についても、ここで詳述しておきたい。この**準備1**の方略を体現する手法として、モデル音声を真似て繰り返し発音練習する手法を採用した。その手法に適した教材として、モデル音声（単音）を聴覚的かつ視覚的に学べるDVDが付属している『英語の発音がよくなる本（巽 一郎・著 中経出版 2005/03）』をあくまで1つの例としてEMで紹介している。こういった教材を使い、徹底的に単音（単語）のモデル音声を真似し、スマートフォンのボイスメモ機能や、ボイスレコーダーでの確認（英語母語話者の発音のように学習者自身の発音が行われているかどうかの確認）を行うことで、正確な音韻データを収集し、単音26音を体得することができる。

ちなみに、Speaking Section 段階1でも後述するが、『英語の発音がよくなる本』で使われている初歩的な文法が理解できない場合は、中学の教科書レベルの教材で、初歩的な語彙と文法を先に習熟しておく必要がある。

※この教材の、学習期間の**目安**などのさらなる詳細（動画も含む）は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html#info02>（Listeningセクションの”単音マスター”）」へ。

■ 準備2：聞こえる周波数音域の拡大

次に、**【準備2：聞こえる周波数音域の拡大】**の方略設定の裏付けに入る。この周波数については、既に2.2の理由3で説明してある。繰り返せば、イギリス英語は2,000ヘルツから12,000ヘルツ以上の周波数を持っているのに対し、日本語は125ヘルツから1,500ヘルツ以下の周波数であり、両者の周波数はまったく重ならない。このために日本人は英語が苦手であるという説明である。

この考え方は未だ仮説段階ではあるものの、周波数の違い自体は看過されるべきではない。なぜなら、「言語が聴こえ、理解できる」という現象は、音声の知覚自動化プロセス（先述の知覚段階を指す）と、その音声を理解するプロセスから構成されており、周波数の違いが、前者のプロセスにおいて重要な役割を果たす可能性を完全に否定できないからである。

この知見に立脚して、**【準備2：聞こえる周波数音域の拡大】**の方略は設定された。

またこの周波数に関連して、巷でもはやされている”英語耳”、”英語脳”、”右脳英語学習”などの俗説についても触れてみたい。

まず英語耳について。篠原(2006)は、「脳が知覚段階で、耳の中耳構造を成しているアブミ骨筋に指令を出して、どの周波数帯を受け入れるのかを調整しており、英語の周波数帯を受け入れるような耳」を英語耳と呼んでいる。そして、英語のパスバンド（主音域、優先周波数帯）を強調した音声を吹き込んだCDを聞くことで英語耳をつくるのが可能であると主張している。この主張に基づき、**準備2**の方略に対応した手法／教材として、『奇跡の音（篠原佳年・著 きこ書房 2006）』（教材）を選び、CDを集中して聞くという手法を選択した。

ただし、篠原(2006)独自の知見に依拠した根拠のみしか提示されておらず、周波数とリスニングの関係について、また、英語耳の存在についても、完全に実証されていないことを理解しておくことが肝要である。すでにお分かりのように、「英語の周波数帯を知覚できるようになったとしても、中間言語を排除した形での語彙／音変化などの脳内データが不足し、知覚ならびに意味処理

プロセスが自動化していなければリスニングができるようにはならないということも心に留めておく必要がある。

この英語耳に加えて、「英語脳」や「右脳英語学習」についても、白畑(2004:127-146)が、第二言語習得研究と脳科学²¹⁾の知見から論じている。以下にまとめだけを抜粋した。

- ・学習者の母語の周波数の違いにより英語の聞き取り能力の優劣を説明するには無理がある。
- ・脳科学の研究結果より、日本語話者が脳内で/l/と/r/を聞き分けている可能性がある。
- ・日本語と英語を聞く際の脳内の活動部位には、ほとんど違いがない。
- ・今(2004年)のところ「日本語耳」「英語耳」のような区別があるという決定的な証拠はない。
- ・英語は、右脳のみでは学習できない。
- ・日本語は左脳で処理され、英語は右脳で処理されるということはない。通常、日本語でも英語でも、言語は左脳で処理される。
- ・理解可能な音の連続を聞いた場合にのみ、脳はそれを言葉として認識する。
- ・単語は左脳の特定部位で記憶される。

詳しくは、白畑(2004:127-146)を参照されたいが、脳科学の臨床実験データから導き出された以上の結論を考慮すれば、「英語耳」、「英語脳」、「右脳英語倍速学習法」などをうたった英語学習教材や手法には、いささか疑いの念を持って接していく必要があると言えよう。

また、周波数の考え方に依拠した「ある日突然英語が聞けるようになる、魔法のような教材」なども販売されているが、こちらも**注意**が必要であることは言うまでもない。この「ある日突然英語が聞こえるようになる」と感じられる主な原因は、2.3の方略9で指摘された「蓄積と爆発」の爆発部分であると予測できる。これは、「レミニセンス効果」（あるタスクを行った後に、しばらく期間を置く事で、そのタスクに対する能力が格段に向上している効果）²²⁾と呼ばれる現象として、脳科学でも身体科学の分野でも認知されている。それは、コップに注ぎ続けた水が、ある瞬間から、一気にあふれ出す現象によく例えられる。つまり、**日頃の継続的な学習・努力の蓄積が一定量溜まることで、成果として顕現化する**のであって、決して**「魔法」**（のような教材）があるわけではない。

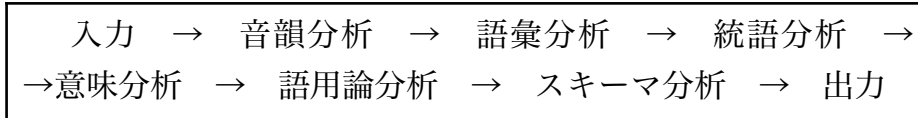
さらに、次頁の英語音声の「知覚と理解」における、モジュールモデルの図を参照されたい。本来は、これらの要素が相互に関連しあう「制約にもとづくモデル」²³⁾の妥当性が高いといえるが、あえて、前者のモデルを参照したのは、入力後の「音韻分析」に着目したかったからである。

²¹⁾ 脳科学における脳とことばの関連研究では、事象関連電位、ポジトロン放射型断層撮像法、機能的磁気共鳴画像法（fMRI）、そして光トポグラフィなどのような脳内活動を可視化する装置が普及し、客観的なデータに基づき研究がなされている。

²²⁾ 池谷(2002:82)

²³⁾ 門田(2007:52) 音韻分析、語彙分析、統語分析、意味分析、語用論分析、スキーマ分析の6つの各処理に、順序性はなく、ほぼ同時進行に適応され、相互に作用しあいつつ、文処理が行われるとする考え方。相互作用的モデルとも呼ばれる。

仮に、周波数が音韻分析（もしくは知覚の初期段階）に関連しているとしても、英語における主音域の周波数の体得は、リスニングの知覚過程における一要素の能力向上に寄与しただけであり、それだけで、英語が劇的に聞けるようになることはない。また、音韻分析には、先に筆者が示した4つの慣れや、中間言語を介さない音韻データ収集などの要素も関連していることも追記しておく。



「知覚と理解」におけるモジュールモデル

※門田(2007:52)を参考に筆者（足立）が作成した図

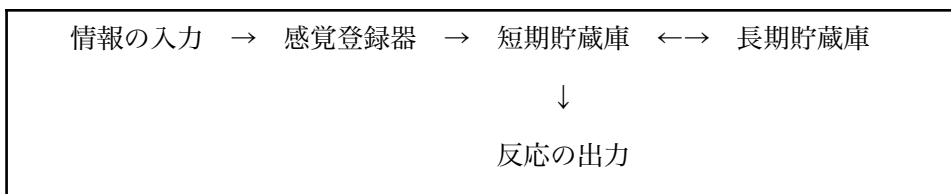
このように、「魔法」のような甘い言葉を標榜している教材や手法については、お金／労力／時間の浪費を避けるためにも、第二言語習得研究の見地からの裏付けを確認してから、購入・使用することを強く薦める。ダイエットも「食事制限、筋力トレーニング、有酸素運動」の3つの基本を地道に継続していけば健康的な体型を維持できると言われているが、「飲むだけ、乗るだけ、付けるだけ、、、などの楽をしてやせる商品」が跋扈しており、なかなかダイエット効果が出ないケースがある。英語学習も同じことである。2.3の示唆5にあったように、英語学習において、効果的であると裏付けされた手法を継続して地道に行っていくことが**肝要**であることを、再度ここで強調しておきたい。

4.4 【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】

■ 情報処理における3種類の貯蔵庫モデル

【段階2. リスニングの”基盤”作りの段階】を裏付けるためには、先に示したリスニングの簡易モデルにおける、知覚段階の中心的情報分析段階、その中でも短期記憶段階とその装置について理解を深める必要がある。

下図は、AtkinsonとShifrinによって一定の体系化がなされた情報処理の3種類の貯蔵庫(storage)を図示したモデルである²⁴。門田(2007:131-138)の内容を引用しながら、このモデルと後述のワーキングメモリ・モデルについて説明していく。



※門田(2007:131)を参考に筆者（足立）が作成した図

まず、聴覚、視覚などそれぞれの感覚器官を通じて入力された知覚刺激は、感覚記憶と呼ばれるバッファ（感覚登録器）で一旦短時間保存される。

²⁴ 門田(2007:131)

聴覚の場合は、最大限約3～4秒の間エコニックメモリに、視覚の場合はさらに短く、通常約0.2～0.3秒の間アイコニックメモリに、ほぼ何ら加工・処理しないオリジナルのままで保持されると言われている。いわば、「聴覚的・視覚的残像」とも呼べるような記憶である。

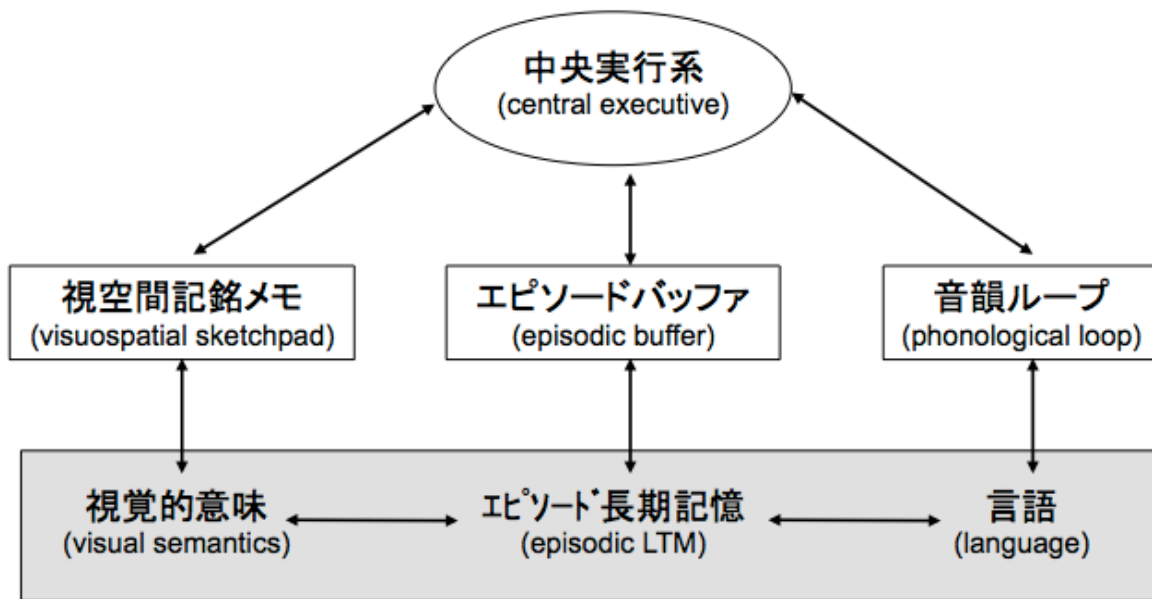
その後、処理の中心舞台である短期記憶（短期貯蔵庫）に入れられる。この短期記憶は、感覚記憶から送られてきた入力情報と対応する情報を長期記憶中の知識データベースから検索して、情報の処理をする中心舞台である。ほぼ永久に知識として保存される長期記憶（長期貯蔵庫）への橋渡しとして位置づけられたところから、短期記憶と名付けられた。

短期記憶は、その中の情報を、約15秒以内という短い期間、保持する場所と考えられた。ただ、それではすべての情報が知識として定着せず、消去されてしまう。そこで、

- (1) 情報を消去されないように保持し続けるための仕組み
- (2) 既存の知識との関連づけをして知識として長期記憶に格納するための仕組み

が明らかにされた。これをリハーサルと呼び、前者(1)のリハーサルを維持リハーサル、後者(2)を精緻化リハーサルと呼んでいる。

■ Baddeleyのワーキングメモリ・モデル



Baddeleyによるワーキングメモリ・モデル²⁵

Baddeleyは、以上に述べたような短期記憶が持つ保持(storage)機能に加え、さらに処理(processing)機能を持たせたワーキングメモリ・モデルを提案した。これを多層モデルと呼んでいる。²⁶

²⁵<http://bsd.neuroinf.jp/wiki/健忘症候群>

²⁶ 門田(2007:134,135)

短期記憶のモデルでは、すべてリハーサルに依存していた記憶方法に、ワーキングメモリ内で処理するという概念を持ち込むことで、その処理の深さに応じて、長期記憶に転送できるという考え方ができるようになった。また、ワーキングメモリはしばしば、コンピューターの内部に組み込まれた内蔵メモリや、様々な書類を置いて仕事をする作業机に例えられる。すなわち、様々なアプリケーションソフトを実行したり、様々な書類を机の上に置いて、分類・整理などのタスクを行う場所を提供している。このように、ワーキングメモリとは、人の認知的活動を実行していく上で必要な情報を、必要な期間だけ、能動的・意識的に保持し、処理する機構を指している。

上図にあるように、ワーキングメモリの構成は、

- (1) 音韻ループ (phonological loop)
- (2) 視空間記銘メモ(visuo-spatial sketchpad)
- (3) エピソードバッファ(episodic buffer)

という3つのサブシステム、さらにこれら3つのサブシステムを統括する

- (4) 中央実行系(central executive)

から成っている。

(1) 音韻ループは、言語化できる刺激入力、すなわち言語音声として操作することが可能な情報を、一時的に保持しつつ、長期記憶中の各種の知識データベースから必要な情報を検索して、処理するシステムである。言語化できればよいので、必ずしも言語入力だけでなく、絵・写真・図形などの非言語入力の処理も含む。言語の場合は、具体的には聴覚あるいは視覚を通じて提示された語句や文だが、それを内的音声（音韻：phonology）の形式で能動的に保持し、情報の加工・処理を行う場所と考えられている。

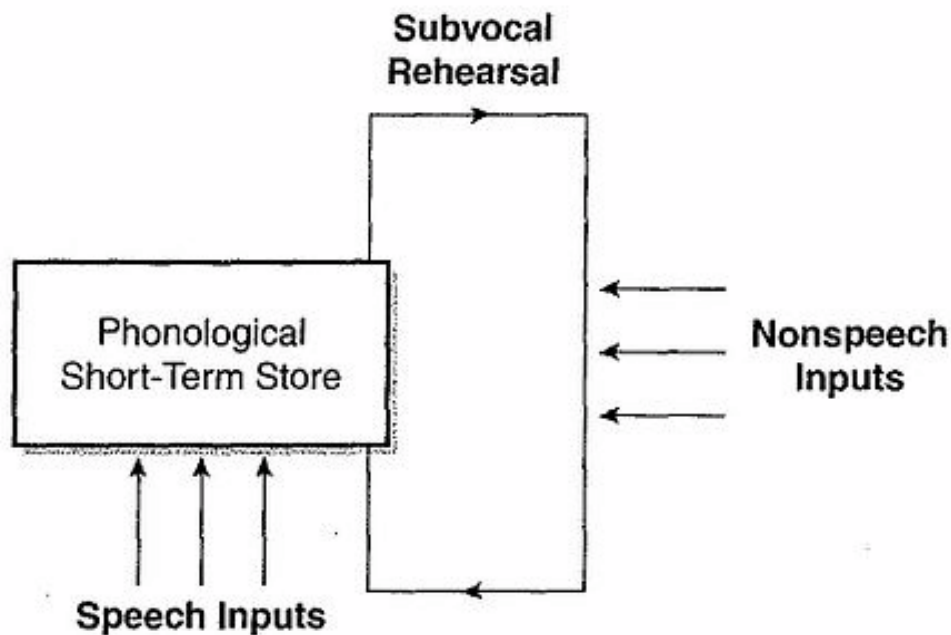
(2) 視空間記銘メモ（視空間スケッチパッド）は、言語化できない、言語音声として操作できない、つまり音韻符号化できない情報（絵・写真・図形など）の保持および処理を担うシステムである。

その(1) (2)の情報を(3) エピソードバッファが体験的に一気に統合・表象する働きを担う。

また、(4) 中央実行系は、種々の処理作業のための認知資源（注意資源とも呼ぶ）をいかに配分するかというように、情報処理プロセスを制御する役割を果たす。例えば、認知資源を(1) (2) どちらかに割り当てるかという役割などである。4.6で映画教材における認知資源の配分（視覚情報処理と音声情報処理のトレードオフ）もこの中央実行系によって決められているわけである。

※さらなる詳細に関しては、非常に分かりやすくまとまっている引用元の門田(2007:131-138)を参照されたい。

■ Baddeleyの音韻的ワーキングメモリ・モデル



さらに詳しく、(1) 音韻ループを理解するにあたり、上図の音韻ループ（音韻的ワーキングメモリ）の構成²⁷について詳述する。この構成要素は以下の2つである。

I. 音韻性短期ストア(Phonological Short-Term Store) : 音声情報をそのまま保持する受動的機能を担い、この音韻性短期ストア内の音声情報は、特にリハーサル（反復）をしなければ、約2秒で消失すると言われている。

II. サブボカール・リハーサル(Subvocal Rehearsal) : 音声情報を内的に反復しつつ心的音声化(subvocalization)を行うことで能動的に保持する機構であり、このサブシステムにより音韻ループ内の音声情報の保持期間を延長することができるようになる。²⁸

※この音韻ループの存在根拠として、音韻的類似性効果の実証実験が挙げられる。²⁹また、音韻ループの神経心理学的基盤として、fMRIなどによる実験心理学的データ（ブレインイメージングなど）により、大脳皮質における、音韻ループの機能的配置も明らかになってきている。³⁰

ここで面白い視点は、Chomskyが考案した普遍文法（UG）と言語獲得関数から成る言語獲得装置（LAD）は、実は、音韻ループなのではないか、というBaddeleyによる仮説である。また普

²⁷ http://en.wikipedia.org/wiki/File:Baddeley_phonological_loop.jpg Baddeley(1986)

²⁸ 門田(2007:151)

²⁹ 門田(2007:152)

³⁰ 門田(2007:160)

遍文法に対をなす、多くの心理学者が提唱している、一般的な**仮説—検証のプロセスにもとづく問題解決機構**の考え方においても、言語獲得にそれを適用する際に、音韻ループと関連があるのではないかと、ということも仮定されうる。この2つの仮説をとってみても、いかに音韻ループが、言語学習・言語習得において重要な役割を担っているかが分かる。

では実際に、この音韻ループが、第二言語習得において、いかにして語彙・文法を含めた新たな言語システム獲得のための装置になるのだろうか。その1つの解答として、門田(2007:171)は、以下のような**第二言語習得の3段階モデル**を提案している。

- 第一ステップ : 音声をチャンク（かたまり）として丸暗記する時期
- 第二ステップ : 音声を分析的に理解し、文法の体系化を促進する時期
- 第三ステップ : 音声理解の自動化の時期

この3つのステップの中でも、第一ステップにおいて、特に音韻ループが重要な役割を果たしているのではないかと門田(2007)は仮定している。なぜなら、この第一ステップにおいて、約2秒以内に一気に復唱できる語彙チャンクを基礎にして、分析的・体系的な文法ルールの習得が行われると考えられるからである。このように意識的に音韻ループ内のサブボカール・リハーサル（内語反復）を活用することで、単に新たな語彙だけでなく、語彙チャンクを基盤にした文構造の獲得など、第二言語の多くの部分が習得されうると仮定することができる。その論拠として、門田(2007:173)は、Huによる音韻ループと記憶テストの関係に関する実験データを提示している。この実験を通して、Huは、音韻記憶能力と語彙能力との間に、統計的に有意な相関があったことを明らかにした。

■ シャドーイングの5つの効果・機能

この3段階モデルにおける、音韻ループの重要性を確認したが、その音韻ループと非常に高い親和性を持つ手法がシャドーイングである。その根拠としてシャドーイングのもたらす5つの効果・機能を以下に提示する。

【シャドーイングの訓練】

↓

(1) 音声知覚の自動化（リスニングの下位プロセス）

↓

(2) 知覚した音声復唱の高速化／効率化（中位プロセス）

↓

(3) 約2秒間で音声入力を復唱できるスパンの拡大(リテンション能力の向上/中位プロセス)

※(1)、(2)、(3)により、認知資源の余剰分が増加(認知資源の開放)し、理解プロセス(上位プロセス)の効率化を図ることができる。

↓

(4) 語彙、語彙チャンク、文法情報の効率的な記憶(長期記憶への保存)

↓

(5) 第二言語の習得(シャドーイング訓練を活用した「内語反復プロセスの効率化・顕在化」による「新情報の内在化³¹機能」の発揮)

※門田(2007:176)を参考に筆者(足立)が作成した図

また、川島・安達は、脳の可視技術であるブレインイメージングを駆使した研究により、シャドーイング、音読時における脳の広範囲にわたる活性化(新たな情報を記憶・獲得するための準備状態=レディネス[readiness])についてのデータを提示しており、脳科学の知見からもシャドーイング・音読の内在化に関する効果は高いと言える³²。さらに、門田(2007:200-217)は、TOEFLを用いた縦断的研究と中学生に対するシャドーイングの効果実証実験、大学生の対するシャドーイングの下位群への効果確認など、シャドーイングの5つの効果・機能を裏付けるデータを提供している。これらを詳述しようとする、多くの紙面を要し、本稿の本旨とずれてしまうため、この詳細については、『シャドーイングと音読の科学』門田修平・著(2007:200-217)を参照されることを強く薦める。

この音韻ループと親和性の高いシャドーイングによる5つの効果・機能をCLAメソッドにあてはめると、**段階2**の方略の設定の根拠が明らかとなる。すなわち、段階2の中の【**基盤1：音声知覚の自動化**】は、5つの効果・機能の中の(1)をCLAメソッドに適用し、【**基盤2：ループの効率化による、リテンション力の向上と内在化の効率化**】は、その(2)、(3)を適用することで設定された。そして、音声処理段階(下位処理と中位処理)におけるシャドーイングの効果(1)、(2)、(3)をまとめて方略として設定したものが、【**段階2. リスニングの”基盤”作りの段階**】である。

³¹ 簡単なイメージとしては、「血肉化し体得する」という意味。

³² 門田(2007:189)

4.5 【段階 2. リスニングの”基盤”作りの段階】の手法について

段階 2 の方略に対応する手法として、門田(2007:231)が提唱するシャドーイング学習・指導フローチャートをベースに、以下で紹介するK/Hシステムや通訳学校での手法などを融合させて筆者（足立）が独自に作成した、具体的な学習手順を以下に提示する。基本的には以下の順番に学習を進めていくことで、基盤 1 と基盤 2 から構成される段階 2 の方略を体現できるように設計した。

その手法に伴い選定した教材は、『究極の英語学習法—K/H System』国井信一／橋本敬子・著（2001 アルク）である。なぜなら、この教材は単なるCD音声を提供するだけでなく、後述する「やまと言葉おとし」、「スラッシュリーディング」、「音韻情報への意識の仕方」などの手法が、先述のシャドーイングの 5 つの効果・機能と整合性をもった形で提示されているからである。また、この本はシリーズ化されているので、学習者のレベルに合わせた負荷に応じてシリーズを選ぶことができる点も考慮した。

※負荷／教材の選び方については後述する。

※この教材の、学習期間の目安などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html#info02>（Listeningセクションの”リスニングの基盤作り”）」へ。

< 段階 2 の手法の解説 >

1. 教材をリスニング

※ この際、意味のあるかたまり（チャンク）ごとにスラッシュを引きながらリスニングすることで、先述の 3 段階モデルのステップ 1 の「チャンクとして丸暗記する」を実践する。ただし、ここでの丸暗記は、一般的に良くないとされる”盲目的な鵜呑み”という意味ではなく、「中間言語を介さず英語を英語のままチャンク単位で丸ごと覚え体得する」という意味である。また、この段階で、意味を全て理解する必要はなく、概要を把握する程度で聞く。

↓

2. マンブリング

※ 小声で行う初期のシャドーイング。小声でシャドーイングを行うため、CDなどのモデル音声に比較的ついていきやすく、通常のシャドーイングより簡単な手法である。これで、学習者自身の実力に合っているシャドーイング教材かどうかを判断する。

↓

3. パラレルリーディング

※ テキスト付きシャドーイングとも呼ばれる。ここでは、1、2 で聞き取れなかった部分を中心に、音声にフォーカスしながら、テキストで確認する作業を行う。

↓

4. 英文の意味をチェック

※ 1、2、3の過程で意味の分からなかった単語や言い回しを調べて、意味の理解に努める。

↓

5. K/Hシステム方式のシャドーイング（シャドーイング、スラッシュリーディング/スラッシュリスニング、自分の声の録音、目的の意識化）による音律体系[Prosody]（英語の基本リズム、語調、強弱、抑揚）の習熟

※ K/Hシステムの教材ではないシャドーイング教材を使用する場合も、基本的に音韻体系の習熟に注意を払いながらシャドーイングを行えばよい。

※ この訓練により、「基盤1」の音声知覚の自動化が促進される。この自動化が促進されれば、結果、認知資源の開放が起こり、意味理解に認知資源を使うことができ、リスニング力が向上する。自転車も乗り始めは、バランスをとるのに必死だが、自動化すれば、自転車に乗りながら会話ができるようになるのと同じことである。

※ボイスレコーダーなどの録音によるフィードバックは必ず行うこと。音韻体系を正確に構築していく意味でも非常に重要なステップとなることは言うまでもない。また、最近のスマートフォンにはボイスレコーダー機能・アプリが付いているので、身近なツールとして活用できる。

↓

6. コンテンツ・シャドーイング

※ 意味をつかみながらのシャドーイングのこと。段階2の手法であるが、段階4の意味理解についても大きく貢献する手法・過程である。この手法を繰り返し行うことで、単語の意味や統語（文法）に関する情報をメンタルレキシコンから検索して、文の文法構造を分析し、前後の文の意味との関係から、あるいは自身の持っている知識データベース（スキーマ）から、文の意味を捉えるという理解過程（上位プロセス）の処理能力が鍛えられる。

↓

7. やまと言葉落とし

※ 意味を音声とリンクさせる手法。「やまと言葉」とは、日本語の中でも、自分にとって最も身近な言葉、つまり、自分の中で「最もイメージに近い言葉」という意味。やまと言葉で英語のイメージを捉えていくことで、英語を徐々にイメージで瞬間的に理解できるようになっていく。

↓

8. リピーティング（音韻ループを効率化しリテンション能力を向上させる）

※ テキストなしで、句・節や文単位でCDを止めてポーズを入れながらシャドーイング（聞こえたCD音声をそのまま真似して発話）する手法。音韻ループ（音韻性短期ストア）内の約2秒間で保持できる英語の音声情報量をより多くするための手法である。また、日本語式英語発音にならな

いたためにも、この手法は、ネイティブに近い「英語式英語発音」（韻律を含む）を既に体得した後に行う必要がある。

↓

9. delayed シャドーイング

※ 1秒遅れで行う、さらに負荷が増す強化版のシャドーイング。リピーティングと同様に、音韻ループを効率化（処理高速化、データベースとのアクセス強化）し、リテンション能力の強化（に付随して内在化能力と理解力の強化）を促進することで、「基盤2」を強力に体現する手法であると言える。

↓

10. レシテーション（暗唱）

※ 最後に、テキスト全体を暗唱する。これにより、内在化促進の効果が認められるだけでなく、チャンクとしてインプットを捉え直し、スピーキングへの転用の可能性も高められる。ここは学習者自身の好みもあるため、必ずしも全てを暗唱する必要はない。

※ちなみに、これ (<https://www.youtube.com/channel/UCG9qEIDmYf61HrolUEMPWaQ>) が、このすでに効果が実証されている1～10の手法を取り入れて、それらを実践するために作られたリスニング動画である。

ここまでが、1～10の手法の流れである。以下のラジオのシャドーイングと立体ノートテーキングは、この1～10の手法を終えた後に、楽しむ程度に行うとよい。以下の2つは、順番も任意である。

・英語のラジオを集中して聞いて、頭の中でシャドーイングする手法

※ CD教材での「英語学習」のみではなく、毎回違う刺激を求めて、英語を「楽しむ」ために、ラジオ音声やYoutubeなどの英語の動画を、音声に注意を払いながらシャドーイングする手法。学習者自身が興味を持っているネットラジオの番組や、YoutubeにアップロードされているTED（英語でのプレゼン番組）などの動画を楽しみながらシャドーイングする手法。

・立体ノートテーキング → 英語戻し → チャンクとしての独り言

※ 「立体ノートテーキング → 英語戻し」は通訳で使われている手法で、まずリスニングしている内容を、リスニングと同時並行でキーワードを拾いながらメモを取る。そして、聞き終わった後に、そのキーワードを元に、聞いた内容を英語（での発話）で表現しなおすという手法である。キーワードから、聞いた内容を「立体的に」復元するという意味で、立体ノートテーキングと呼称されている。そして最後に、拾い上げたキーワードの中から、英会話で使い回しできそうなチャンク（フレーズ・言い回し）を選定し、独り言でチャンク会話法（※5.4で後述）を実践する。これにより、上記の「10. 暗唱」と同様、スピーキングへの転用の可能性も開かれる。

以上が、**基盤1、2（段階2）の方略に対応した手法**の解説である。次に、その主な手法であるシャドーイングの教材の選び方、留意点について詳述していく。

■ シャドーイングにおける留意点と負荷について

門田(2007:236)によると、教材選びの際に留意すべき点は、学習者のレベル (i) に対して、i-1, i-2となるような教材、つまり少し簡単に感じる程度 (100語に対して未知語が2、3語以内の程度) の教材が好ましい。通常は、i+1で少し背伸びをするくらいの負荷を与える教材や手法が良いとされるが、シャドーイングに関しては、それ自体が非常に負荷 (難易度/レベル) の高い手法であるために、i-1, i-2となるような教材を門田(2007)は薦めている。

逆に、簡単すぎる教材や、集中力がない状態でのシャドーイングでは、シャドーイングによる効果がほとんどなくなってしまうので注意が必要である。負荷があつて必死で付いて行くという行為は、意識を集中して行う行為、つまり、そのタスク自体が非常に重要であるという潜在的な意識を持ちながらタスクを行っている行為である。そのため、前節で説明したような大脳全体が活発で内在化を促進している状態 (レディネス) を持続しながらタスクを行うことになる。であるから、ただ単純に音声を聞き流しているだけでは、「負荷がない→集中しない→重要であるという潜在的な意識がない→レディネスを得ることができない」という理由で、音声知覚の自動化、ループの効率化もあまり期待できないと言える。

それは、100gの軽すぎるダンベルで筋肉トレーニングをしても全く筋肉がつかないことと同じである。また、受験で歴史の人物を覚える時も、上の空で適当に繰り返してもなかなか覚えられないのと同じことである。池谷(2002)が脳科学の見地から指摘しているように、記憶した内容をより定着させるには危機感や重要感をもって記憶しようとする態度が必要である。特に、母語であっても、生命や生活にかかわるようなこと、例えば自分の名前や自宅の住所・電話番号などは、重要感/危機感をもって、音韻ループで繰り返されることにより、長期記憶に保存され、ずっと覚えていられる。

余談ではあるが、このことは外国語学習全般にも言える。例えば、筆者 (足立) が留学先で出会った、10年以上アメリカに滞在している日本人の家政婦の方は、英語が全く話せなかった。アメリカにいても日本人コミュニティーに属し、英語への危機感/重要必要性 (負荷) が全くなかったからである。また、UCLAで物理学を専攻し、大学の成績が非常に優秀な日本人留学生の方も、英語では全く話すことができなかった (日本語での会話になると、むしろ驚くほど外向的な性格になり、よく話していた)。物理学は、比較的、会話をそれほど必要とせず取り組める学問であったことが起因していると予測できる。

このことは、とりもなおさず、留学はあくまで良質な環境 (本場の「生」英語の大量インプットやアウトプットの機会の宝庫) であつて、そこに学習者の危機感/重要必要性 (負荷) が伴わないと、レディネスが形成されず、英語が記憶/内在化されなくなり、結果、英語がうまくならない。

逆に、海外の中学や高校に留学した中高生、臨界期を過ぎてからカナダで一人で生活しなければならなかった30代の女性の留学生は、非常に流暢な英語を身につけていた。前者は、学校という半強制的な大量のインプットと、友達とのコミュニケーションにおけるアウトプットを余儀なくされ、その大きな負荷と危機感を伴う生活を通して、英語を習得していた。また、後者は、病気になつても片言の英語や筆談で一人で対応するなど、文字通り生命の危機を感じながらの生活/英語学習を営んでいた結果と言える。**結局、留学すれば英語が自動的にうまくなるというのは幻想であり、留学という良質な英語環境を、どのように危機感/負荷をもって活用するかは学習者自身にかかっている。**

また英会話スクールも留学と同じく、あくまで環境であるため、目的意識や方略を持たずに、ただ何となく受動的に通うだけでは英語力は向上しない。後述するチャンク会話法などの方略を

用いる積極的な姿勢と、危機感／重要必要性（負荷）を持つことではじめて、環境を十分に生かし、学習効果を得られることができる。

このように外国語学習全般に関しても、シャドーイングに関しても、”正しく”負荷を活用することが英語学習成功の重要な鍵となる。

■ インプット仮説について

●インプット仮説：習得はメッセージを理解することからのみおこり、意識的に学習された知識は発話の正しさをチェックするのに使えるだけである。

VS

●自動化モデル：スキルは、最初は意識的に学習され、何度も行動を繰り返すうちに自動化し、注意を払わなくても無意識的にできるようになる。

※白井(2004)からの引用

白井(2004)は、イメージ教育の事例などを根拠に、この対立に対して以下のような結論を示している。

- (1) 言語習得は、かなりの部分がメッセージを理解することによっておこる
- (2) 意識的な学習は、
 - (a) 発話の正しさをチェックするのに有効である
 - (b) 自動化により、実際に使える能力にも貢献する
 - (c) ふつうに聞いているだけでは気づかないことを気づかせてくれる

この(2)の(b)、(c)に関しては、2.3の外国語学習成功者の共通パターン（行動主義的な手法の採用）との整合性もとれている。

また、このインプット仮説を光背に「赤ちゃんのような英語学習法」や「赤ちゃんのように英語を習得する方法」などが提案されているが、それらはあくまで大量のインプットを危機感（負荷）をもって聞くことが前提である。例えば、白井(2004)によると、乳幼児が1日12時間、インプットの言語処理を行っている想定し、母語を習得する4年間に与えられるインプットの量は、17,520時間（ $12 \times 365 \times 4$ ）ということになる。しかも、生命の危機と隣り合わせの状態（負荷のかかった状態）で、聞き続けるわけである。それに対して、まじめな日本人英語学習者が、中学校から高校までに毎日1時間、休まず6年間英語を勉強したとしたら、その総時間は2,190時間（ $1 \times 365 \times 6$ ）にしかならず、乳幼児の例の8分の1にしかならない³³。負荷／危機感についても、インプットの量についても絶対的に乳幼児の例に及ばない。であるから、いわゆる臨界期を越えた「大人」が学習する際には、インプット仮説のみに依拠することは、端的に危険であると言える。もし仮に、生命の危機（非常に高い負荷）を継続的に持ちつつ、毎日6時間、8年間ほど英語学習を続けられる覚悟と環境が日本において創り出せるのであれば、大人が赤ちゃんの

³³ 白畑(2004)

ように英語習得することは可能であるかもしれない。しかし、それは全く現実的ではないと言える（幼稚園から高校までバイリンガル教育を受けるのであれば可能かもしれないが）。言い換えれば、日本における外国語学習では、「赤ちゃんのように学ぶ英語学習法」や「会話実践などの社会構造主義的手法」のみに特化して、「ある日突然英語がしゃべれるようになる」ことを期待しすぎる方略をとることは賢明ではないと判断できる。

白井(2008:32)によると、第二言語習得研究の先行研究に基づき、外国語学習は「Older is faster, younger is better.」のように一般化される、としている。つまり、大人の方が実は、すでに発達した認知能力を使って短期的には素早く学習することができるということを示唆している。すなわち、大人には大人のやり方があるということである。ただし、先述した白井の指摘のように、インプットが重要であることは疑いようのないことである。であるから、2.3の外国語学習成功者に共通する態度・方略パターンのように、学習段階初期、中期は、インプットは継続しつつも、行動主義的な手法（シャドーイングや音読などの教室での学習のような手法）を採用し、中期後半から社会構成主義的な手法（英会話実践などの実際的かつ実践的な手法）も取り入れていく流れが理想的であると考えられる。この示唆は、CLAメソッドにおける**Speaking Section**（※第5章で後述）を捉える上でも**最も重要な視点**である。

4.6 【段階3．音変化への”慣れ”】

【段階3．音変化への”慣れ”】は、ワーキングメモリにおける、音声知覚段階の下位処理の中でも高度な処理についての方略である。つまり、4.3で説明したモジュールモデルでいう音韻分析段階での高度な処理ということである。高度な処理、それが音変化への慣れである。

例えば、日本語の口語の場合「といたしますか → ていうか → てか」という3つの理解があってはじめて、「てか」と聞いたときに、正式には「といたしますか」という意味で、会話の中で潤滑油的に使われている、ということを理解できる。

それと同様に、「～したい」という「want to → wanna」の音変化も知識として知ってはじめて理解できる。また、「with the table」などtの音が脱落したり重複したり、連結したりしても、その脱落／重複／連結のパターンが音韻データとして獲得されていれば、日常会話で頻繁に起こる音変化に対応し、その音変化を含む音声を音韻分析段階で処理することが可能となる。その音変化の音韻データを多く収集することで、教材の音変化が非常に少ないモデル音声だけではなく、音変化が常に起き続ける実際の会話（例えば映画、TVでの会話）などの英語を聞けるようになる。

また、この音韻分析段階での処理に加えて、先述したりスニングの4つの”慣れ”における4つ目の最終段階が、音変化への慣れであることも、【段階3．音変化への”慣れ”】を設定した根拠である。すなわち、段階1、2で基礎的な音韻データを獲得した後に、音変化の音韻データ量の増加と、ワーキングメモリにおける音韻データベースへのアクセスの高速化を図る段階として段階3を位置付けたわけである。

■ 段階3の手法について

1. 映画のディクテーション（一字一句聞こえた音声を、パソコンや紙に書き出して文字化する学習手法）

※ 映画、もしくは、映画並みのスピード（負荷）の会話の教材を選択。

※ 鳥飼(2003:56)が指摘しているように、ディクテーションには一旦音声を保持しておかなければならないプロセスがあるため、リテンション能力向上（段階2の強化）という効果もある。

※ ディクテーションが終わったら、書き出した内容とスクリプト（台本）とを照らし合わせて、答え合わせを行う。そして、間違えた箇所の音声を、音変化に注目しながら、もう一度聞き直して、音声と文字と意味を合致させていくことで、新たな音変化の音韻データが蓄積されていく。

↓

2. 映画のシャドーイング（＝アクティング／英語という言語部分だけではなく、登場人物のしぐさや口調まで真似て、英語で演技をする手法）

※ 特に、音変化に注目しながらシャドーイングする。

※ 会話での流暢さにもつながる。文化や背景知識（スキーマ）や、肩をすくめたりする非言語的な身体表現、顔の表情や感情表現などのパラ言語まで習得できる。

↓

3. 慣れてきたら耳だけで、もう一度ディクテーション

※ オーラルディクテーションと呼ばれる。パソコンに書き出したり、紙に書き出す作業を省略し、聞こえた音声をそのまま口頭でディクテーションする、より効率的な手法である。

↓

4. 最後にもう一度、アクティング

※ 好きなフレーズをチャンク化して、独り言会話練習で使用（Speaking Sectionで後述）。

この1～4の手法を行うことで、基本的な音変化の音韻データを収集することができ、ネイティブ同士のナチュラルスピードの英会話や、映画が聞き取れるようになってくる。[且安](#)としては、3ヶ月に映画1本のペースで、毎日1時間学習を継続して1年間じっくりかけて、上記「1～4」のディクテーションとアクティングを4本行えば、字幕なしでも初見で60～70%は映画が理解できるようになる。

※残りの30～40%は、背景知識、人名／専門用語／言い回し／スラング、特殊な音変化などの音韻データを、段階4の多聴で収集することで、聞き取れるようになっていく。

※ちなみに、英語学習者とネイティブとの日常英会話においては、映画よりも、文脈情報や非言語情報が多く、それらの理解補助があるため、80～90%は理解できるようになる。

※具体的な教材の紹介を含めた、さらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Movie.html#info02>（音変化への慣れ）」へ。

※また**ビジネス**英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02>（発展ステップ”音変化への慣れ”）」へ。

以下の英語の歌（洋楽）を活用した手法は、気が向いた時に、モチベーション維持として活用する。

- ・英語の歌をうたう。

※ 歌は、音変化の宝庫であり、楽しみの1つとして歌を歌いつつ、音変化の音韻データも同時に収集していく。必ずしも、段階3の手法として行う必要はなく、どの段階であっても、楽しみとして活用できる。ただし、日本語の歌と同様、歌は、通常の会話ではないため、会話以上に音変化が激しく、実は教材としては難易度が非常に高い。であるから、この段階3の手法の1つとして、ここで紹介した。同様に、映画も、最高難易度の教材ではあるが、学習対象としてではなく、楽しみ／モチベーション維持としてであれば、どの段階のレベルであっても活用可能である。

留意点：

教材として映画を選ぶ場合は、ディクテーションの答え合わせとアクティングのためにも、スクリプト（台詞が文字起こしされている台本）の用意は必須である。その制約上、ディクテーション／アクティングをする際には、ラジオ／英語での講義など、スクリプトがなく繰り返し学習できない教材・素材は、控えた方がよい。ちなみに、『超字幕 映画で英語は上達する』というアプリや、『リスニングドリル』というTEDの字幕スクロール機能付きのアプリは、スクリプト字幕をすぐに参照することが可能であり、使い勝手も良く、段階3の教材として最適である。ただし、最初に行うディクテーションの際は、必ず字幕を見ないようにして、聞こえたままの音声をそのまま書き取ること（正確に単語やスペルが分からない場合でもアルファベットの羅列で文字化しておくこと）が**非常に重要**である。

段階3は、段階1と段階2を経て、音声知覚の自動化がなされた後の段階であるため、視覚情報があっても十分に認知資源（※簡単に言えば、集中力／注意力／余力）を残したまま、音声情報の意味理解に取り組むことができる。そのため、段階3においては、DVD／映画のような視覚情報がある教材・素材であっても、十分な学習成果が期待できる。逆に、段階1と段階2で、音声知覚の自動化がなされていないにもかかわらず、**段階3で扱うべき、映画のような視覚情報を含む「高度な」素材で学習を行っても、全く学習成果は期待できない。**それは、足し算、掛け算の基礎（段階1と段階2）を習得していないまま、微分積分の応用（段階3）を解こうとする行為に等しく、避けるべき愚行である。

特に、リスニングを始めたての学習者は、上記のようなメタ認知方略に関する知識が乏しいため、「生の英語」「生きた英語」「赤ちゃんの言語習得方法」「映画で楽しく英語を学ぼう」といった謳い文句に惑わされて、基礎がないままに、いきなり応用である段階3の映画でリスニン

グ学習を開始してしまう傾向がある。その誤った判断を避けられるよう、ここで重ねて注意を喚起したい。

ただし、段階1や段階2のレベルであっても、楽しみのため／モチベーション維持のために、英語で映画を楽しみながら「鑑賞」することに関しては問題はなく、むしろ、単純に、「生きた英語」との接触機会が増える点では有効である。しかしながら、それによる学習成果はほとんど期待できないので、あくまで英語の歌と同様に、英語を楽しむことが目的である。

4.7 【段階4. 理解段階】

■ 理解1：「理解処理段階でアクセスされる長期記憶内の6つのデータベース」へのアクセスの高速化

端的に言えば、段階1の中で説明した「知覚と理解」の、理解の部分が【段階4. 理解段階】の内容である。つまり、この理解の部分に特化した段階が段階4である。したがって、段階1、2、3で「知覚」部分を鍛えた後の、Listening Sectionの一番最後の段階4として設定されている。

具体的に言えば、先に紹介した「制約にもとづくモデル」において想定される長期記憶データベース³⁴への、ワーキングメモリによるアクセスの高速化を図る段階である（**理解1**）。データベースへのアクセスの高速化とは、「1. データベースへのショートカットが形成されること」、「2. 脳内の長期記憶の中に、よく使用され、常に活発である状態の部位（レディネス）が増えること」の2点である³⁵。

例えば、筆者（足立）の体験として、英語をずっと話していた後（英語に関する脳内部位が活発な状態の後）、日本語に戻って話しているのにも関わらず、学校の概念イメージについて、「学校」という日本語ではなくて、「School」という単語が先に頭に現れて、それを口にしたことがある。つまり、Schoolという単語の方が、データベース上で、学校という単語よりもアクティブ（先にアクセスしやすかった状態）であったということである。この長期記憶データベースへのアクセスの高速化は、段階1、2、3の手法の訓練時にも向上している能力でもある。

■ 理解2：長期記憶データベースの情報量の向上

理解2は、長期記憶データベースの情報量の向上である。すなわち、物理的にその情報がなければ音声の意味が理解できないという類いの情報量の向上である。例えば、しきたり／文化などのスキーマ（背景知識）情報や、人名／スラング／言い回し／格言などの語彙情報の蓄積などが

³⁴ 制約にもとづくモデルの文処理／理解過程をベースにして、CLAメソッドの早見表にも明記してある「理解処理段階でアクセスされる長期記憶内の6つのデータベース（DB）」を想定した。音韻ループ内で言語の理解処理を行う過程で、脳内の長期記憶中のメンタルレキシコン内に存在する各種データベースの相互補完的使用（アクセス）により理解が達成されるが、その代表的なデータベースである6つを取り上げた（1. 音韻DB 2. 語彙DB 3. 統語文法DB 4. 意味DB 5. 文脈語用論DB 6. スキーマDB）。そして、理解処理時に活用されるこれら6つのDBを総称して、「長期記憶データベース（DB）」と呼ぶこととする。

³⁵ ちなみに、先述のリスニングの簡易モデルの文脈で言い直せば、「中心的情報分析段階」における理解処理の効率化を図る段階である。

挙げられる。また、文脈、文法、表現や言葉の真意、背景知識が総合的に蓄積してくることで理解力が上がれば、英語による冗談も分かってくるようになる。これはもう、ほぼ母語と変わらないレベルである。いわば、L2（第二言語）がL1（母語）のレベルに近づいていく過程である。³⁶

以上、**理解1**でワーキングメモリと長期記憶データベースとのアクセスが高速化され、**理解2**で長期記憶データベースの情報蓄積量自体を増やすことで、ワーキングメモリの上位処理³⁷である「意味を理解する」という【**段階4. 理解段階**】が形成される。これが、段階4を設置した学術的根拠である。

■ 段階4の手法について

ここでは**多聴**という手法を活用し、多種多様かつ大量のインプットを通して、「理解1」と「理解2」に磨きをかけていく。

より具体的な手法としては、

- 映画を楽しむ+意味調べのセット
- TV／ラジオ／講義（TEDなど）／会話／洋楽（歌）などの”生の英語”に、どんどん触れていく

段階3まで終え、音声知覚が自動化すれば、映画レベルの教材でも、見るだけで理解できるようになる素地が形成され、自動的に新しい情報を内在化できるようになる基盤が整う。つまり、映画に限らず、TV／ラジオ／講義（TEDなど）／会話／洋楽（歌）などの、いわゆる”生の英語”に浴びるように大量に触れることで、どんどん新しい知識を吸収できる（長期記憶に保存することができる）。

留意点として、段階1、2、3の基盤ができたからこそ、多聴の効果が最大化されるということを認識する必要がある。何度も指摘したように、音声知覚の自動化が完全にできていない状態では、認知資源に余りがないため、映画やTVなどの視覚情報が入ってくると、聴覚情報との相互干渉を引き起こし、音声だけに集中することができなくなってしまう。

ただし、歌の手法の説明時にも触れたように、段階4の前段階であっても、生の英語に触れることは動機付け／楽しさの観点から非常に大事なことであり、段階4で期待できるような効果を期待しないで（十分な認知資源が確保できないと予測できるため）、教材として視覚情報を含んだTVや映画を選択し、楽しむというスタンスで学習するのは構わない。むしろ、「楽しい／楽しむ」という感覚は、継続的動機付けにおいて、とても大切なことである。

³⁶ このレベルまでL2が達すれば、複言語主義(plurilingualism)的な振る舞い、あり方が確立されてくると言える。

³⁷ より正確に言えば、ワーキングメモリ（短期記憶）と、長期記憶との連携で処理される、中心的情報分析段階での上位プロセスである理解処理。

第5章 CLAメソッドにおけるSpeaking Sectionの裏付け

《キーワード》

認知行動主義 社会構成主義 チャンク会話法 パターンプラクティス

5.1 SPEAKING SECTIONにおける早見表の再提示

Speaking Sectionの早見表

<Speakingの段階の早見表>

(Listening Sectionとの違い=“手法”が各段階の中に組み込まれていること。)

ポイント： <行動主義と構成主義的手法を組み合わせる>

認知・行動主義的手法(教室的)・・・パターンプラクティス(PP)、音読、パラレルリーディング、文法、表現チャンクの繰り返しによる
暗記・暗唱

VS

社会・構成主義的手法(実践的)・・・会話、独り言、会話シミュレーション、実況中継、会話の反芻

↓

組み合わせる：

PPや音読、独り言などにより、チャンク使用の自動化が促進され、注意資源が余ることで、さらに高次な会話が可能になる。その自動化されたチャンクを実際の会話の中で使用し、それぞれのチャンクごとの習熟度を上げることで、より柔軟な会話が可能になる。

段階 1. 舌作りの段階

- ・単音26音の発音(手法：発音本のパラレルリーディング、口まね)
- ・基礎的な単語の発音を体得、舌作り(音、文字、脳、舌の連結)
- ・「日本語的英語」の語彙(中間言語)から、「英語的英語」の語彙への変換作業(Listening段階1の単音体得やListening段階2のシャドーイングでも行う作業) Ex. キャリア と career(/kə'ri:ə/)の違い
- ・初歩的文法の体得と活用形の練習(英語における“九九”)
- ・過去、未来、受け身、現在完了などの基礎文法の理解と体得

※英語を本格的に学習したことがない学習者へ

- ・英語の始め方：自分が好きな英語の歌、映画、演説などの、音声とプラスイメージから学習を開始する
- ・英語の基礎理解の方法：中学の教科書などの基礎レベルの教材を利用し、基礎語彙と基礎文法を理解する
- ・簡易チャンクの体得方法：I go to ～などの一文を使い、全ての活用形を反復練習して、自動化するまで続ける

段階 2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階(チャンク会話法の6つのステップ)

<チャンク会話法の6つのステップ>

1. 表現集の通読、丸暗記、一問一答 (運用段階2-1に依拠)
2. PP(パターンプラクティス) (運用段階2-1, 2, 3に依拠)
3. CDなどのモデル音声で、パラレルリーディングを行いリズムを体得 (運用段階2-2に依拠)
4. PPを行い、その例文の後に、一文ずつ新たな内容を加えながら独り言 (運用段階2-2, 3に依拠)
5. ボイスレコーダーで録音して確認と修正 (運用段階2-2, 3に依拠)
6. テーマを決めて、体得した表現チャンクを使って自由に独り言 (運用段階2-3に依拠)

運用段階2-1： 表現チャンクの集積(手法：表現集、パターンプラクティス、活用表、シャドーイングやアクティングからの一部転移)

構文集・会話フレーズ集・中学レベルのチャンク集、メールマガジン、iKnowやBusuu.comなどのOnline学習サイト、ラジオ英語講座などを利用する。

運用段階2-2： 正確さよりもある程度の流暢さを意識(手法：英会話、パラレルリーディング)

根拠・・・始めは正確さよりも、ある程度の流暢さを重視した方が、学習が進みやすいという英語学習成功者の共通パターンがあるため。
(“通じた”という感覚が始めは大切。)

「流暢さ」と「正確さ」のトレードオフについて・・・注意資源には限りがあるため、発話する際に、流暢さを意識すると、正確さが失われる。その逆もしかり。

運用段階2-3： チャンクの運用の自動化と正確さの向上

(手法：独り言、パターンプラクティス)

段階 3. さらに流暢さと機転の利いた会話(構成主義的手法の段階)

(手法：英会話 + DVDアクティング、歌、ボイスレコーダーを用いたテーマを決めた独り言)

5.2 2.3の方略16～23との整合性

IV. 【スピーキングと発音・韻律】における成功者の共通パターン

《スピーキングに関して》

※外国語は勝手に湧いてこないなので、(1) まず大量の例文をしっかりと覚えて、(2) 活用練習をする。その後、覚えた例文を(3) 実際のコミュニケーション場面で積極的に使用していく。この(1) → (2) → (3) という一連の方略の流れが、成功者の共通パターンとして抽出された。

◎方略16： 基本文例・表現を大量に、徹底的に暗記する（初期から中期）

◎方略17： パターンプラクティス（第5章で後述）などを通して、暗記したものを自由に使えるように練習する（初期から中期）

◎方略18： 「流暢さ」を重視して、会話実践を行う（初期から中期）

◎方略19： 外国語による独り言や会話シミュレーションをする（中期）

◎方略20： 「正確さ」を重視して、会話実践を行う（中期から後期）

《発音・韻律に関して》

◎方略21： モデル音声をよく聞き、正確にまねる（初期から中期）

◎方略22： シャドーイング・リピートイングをおこなう（中期から後期）

◎方略23： 母語話者の口元に着目し、その動きをまねる（個人差大）

※竹内(2003)を参考に独自に再構成した図

+

◎方略4：（教室場面や自習場面での）練習活動と並行して、現実場面での言語使用を積極的に増やす（初期後半から）

この方略16から方略23（+方略4）より紡ぎ出されるスピーキングにおける学習段階の大きな流れは、以下の通りである。

初期・・・徹底的な暗記による基礎固め（方略16、21、23）

↓

中期・・・行動主義的手法の選択（方略16、17、19、22）

↓

初期後半から後期・・・構成主義的手法の選択（方略4、18、20）

この流れ、つまり、「徹底暗記 → 行動主義 → 構成主義 の流れ」に依拠して、「段階1：基礎固め（舌作りの段階） → 段階2：パターンプラクティス（チャンク会話法） → 段階3：会話実践」の方略を設定した。さらに言えば、CLAメソッドのSpeaking Sectionの最初に提示されている「ポイント」についても、この方略ベースの流れを論拠にしている。

竹内(2003:180-183)によると、外国語学習の成功者にもっとも頻繁に、そして一貫して現れた共通方略として、「基本文例の徹底した暗記と反復」および、その文例の主語や時制を入れ替えての「パターンプラクティスの実施」が挙げられる。これらの方略は、刺激(stimulus)と反応(response)のS-R連合形成を主眼とした行動主義心理学に基盤を置くものであり、1940-1950年代にAudio-lingual Habit(ALH)アプローチの中で中心的な役割を果たした。ただ、意味や文脈から切り離して機械的に行う点や、生得的な言語獲得能力を重要視する生成文法の流れに反していることなどの批判を受けていた。しかしながら、前章でも触れたように、生得的な学習の流れが「大人」にとって必ずしも正しいとは限らず、「大人には大人の学習の仕方がある」という視点³⁸に加えて、方略16から23を考慮すれば、行動主義的な手法／アプローチの意義をここで再確認できるであろう。

また、ここで強調したいことは、学習成功者たちが行動主義的な基盤形成だけに留まっていない点である。方略4からも分かるように、彼らは、形成された基盤を実際の場面において利用することにこだわる。最近の社会・文化的な心理学のアプローチにおいては、実際場面での、いわば、「文脈の中での学習」を重要視するが、現実場面での使用にこだわる学習成功者の行動は、この考え方とも一脈通じるものといえよう。

以上のような考え方に則り、CLAメソッドのSpeaking Sectionの肝である、「行動主義と構成主義の手法を組み合わせる」という方略を設定した。以下がそれを敷衍したCLAメソッド上での説明（ポイント）である。

ポイント： <行動主義と構成主義的手法を組み合わせる>

認知・行動主義的手法（教室的）・・・パターンプラクティス（以下、PPと表記）、音読、パラレルリーディング、文法、表現チャンクの繰り返しによる暗記・暗唱

VS

社会・構成主義的手法（実践的）・・・会話、独り言、会話シミュレーション、実況中継、会話の反芻

↓

CLAメソッドでは両手法を組み合わせる： PPや音読、独り言などにより、チャンク使用の自動化が促進され、注意資源が余ることで、さらに高次の会話が可能になる。この行動主義的手法により自動化されたチャンクを実際の会話（構成主義的手法）のなかで使用し、それぞれのチャンクごとの習熟度を上げることで、より柔軟な会話が可能になる。

³⁸ 先述した「インプット仮説だけでは不十分である」という視点のことである。スピーキングに関しても、「ある日突然英語がしゃべれる」という現象を否定はできないが、その現象の必要条件として、危機感を感じるほどの負荷と乳幼児の例（17,520時間）のような尋常ではない大量のインプットが必要であることを再度強調しておく。

5.3 【段階1. 舌作りの段階】

【段階1. 舌作りの段階】について、以下の実際の内容に沿って、1つずつ裏付けを行っていく。

「

【段階1. 舌作りの段階】

- (1) 単音26音の発音（手法：発音教材の平行リーディング、口まね）
- (2) 基礎的な単語の発音を体得、舌作り（音、文字、脳、舌の連結）
- (3) 「日本語的英語」の語彙（中間言語）から、「英語的英語」の語彙への変換作業（Listening Section段階1の単音体得やListening Section段階2のシャドーイングでも行う作業） Ex. キャリアと career (/kəˈrɪər/) の違い（第4章で説明した、Appleと同様の例。日本語を介さず、英語を英語のまま記憶しなおす作業。）
- (4) 初歩的文法の体得と活用形の練習（＝英語における「九九」の体得。算数で習う「九九」のように、意識しなくても三単現のsやesが自動的につけられる状態を目指す。）
- (5) 過去、未来、受け身、現在完了などの基礎文法の理解と体得

」

まず、**段階1**全体については、前章のリスニングの段階1で詳述した内容と重複する部分が多い。つまり、「中間言語の排除」「4つの慣れ」「モーター理論」「分節・音韻情報の蓄積」の4点が、スピーキングの初期段階である**段階1**にも適用される。中間言語の排除は(1)と(3)に適用され、「4つの慣れ」は(1)と(2)に、「モーター理論」は(2)に、「分節・音韻情報の蓄積」は(1)と(2)と(3)にそれぞれ適用される。

また、(4)は「英語における九九」³⁹ととらえられるように(5)と合わせてスピーキングの土台を形成している。この2つは、方略16に裏付けされている。つまり、**徹底暗記の実践**である。第4章でも見てきたように、基本的に母語も含め外国語学習においても、音韻ループによる「記憶」が鍵を握っており、それはすでに脳神経科学の臨床実験データにより裏付けされた事実である⁴⁰。

誤解のないように付け加えておくと、丸暗記が批判される原因として、「暗記のための暗記」、「中間言語による暗記の弊害」が考えられる。「暗記のための暗記」は、会話などでのアウトプットを想定しない暗記であるために、記憶された学習事項が眠ってしまっている、もしくはインプットの理解時のみでしか活用されない学習である。一方、「中間言語による暗記の弊害」は、繰り返しになるが、中間言語、つまり日本語式英語の発音で丸暗記してしまうことで、リスニング、スピーキングにおいて記憶した事項が活用されづらい形で脳内の記憶データベースに保管されてしまうという弊害である。この2点に注意すれば、丸暗記の効果は最大化され、言語（英語）習得、特に、スピーキングに関して力を発揮するのはこれまで説明してきたとおりである。

このような経緯を背景に、**【段階1. 舌作りの段階】**を設定した。また、英語初心者にも学習が行いやすいように以下のような説明も、CLAメソッド早見表内に追記してある。

³⁹ 英語の九九ととらえられる、英語における活用形について。本文中（次頁）で紹介しているI go to ~. を例に取った場合、goをwent, will goのように変える「時制の活用」、IをYou, He, She, We, Theyに変える「人称の活用」、～をJapan, The US, Koreaなどに変える「目的語の活用」などを総括して、英語における活用形ととらえられる。また、その活用形を変える発話練習方法をパターンプラクティスと言う。

⁴⁰ 門田(2007:160)

「

※英語を本格的に学習したことがない学習者へ

- ・英語の始め方：自分が好きな英語の歌、映画、演説などの、音声とプラスイメージから学習を開始する
- ・英語の基礎理解の方法：中学の教科書などの基礎レベルの教材を利用し、基礎語彙と基礎文法を理解する
- ・簡易チャンクの体得方法：I go to ～.などの一文を使い、全ての活用形を反復練習して、自動化するまで続ける ※具体的な活用例については、前頁下段にある脚注38を参照。

」

※中学基礎レベルの教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info02> (Readingセクションの”中学の基本文法マスター”)」へ。

※また”舌作り”を体現する教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細（動画も含む）は、Listeningセクションの段階1同様、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html#info02> (Listeningセクションの”単音マスター”)」へ。

5.4 【段階2．行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階】

■ 「話す」の仕組み

門田(2007:79)によれば、スピーキング (Speaking) は、おおざっぱに言って、次のふたつの段階から成り立っている。※以下は、門田(2007:79)の説明の引用。

(1) 発話プランニング (planning) 段階：

これから発話しようとする意味内容 (メッセージ) を作り出し、それを言語生成システムに取り込んで、個々の語彙の検索もメンタルレキシコンから行い、心の中で文を作り上げる段階。

(2) 実行 (execution) 段階：

上記 (1) の発話プランニングにより形成された心の中の音韻表象 (発音記号など、調音器官への指示が示された発音設計図のようなもの) をもとに、実際に、喉頭、舌、口唇などを使って音声を発する段階。

※ ちなみに、意味ではなく音声知覚の自動化にフォーカスしているシャドーイングは、スピーキングのプランニング段階とは特に関係はない。しかし、スピーキングの実行段階である、各調音器官に対する一種の運動には大きく作用する。もともと、学習者にとって、負荷がかかる程度のスピードで英文を聞き、それをシャドーイングするので、結果として、一定のスピードを持った話し方 (調音) のトレーニングにもなっている。

この考え方の(1)、(2)を実践する意図と、5.2で示した「行動主義と構成主義の手法を組み合わせる」という方略を論拠に、【段階2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階】を設定した。

■ 運用段階2-1：表現チャンクの集積

この運用段階2-1を捉える上で重要になる考え方は、4.4でも触れた第二言語習得の3段階モデルである。その中の、第一ステップをそのまま、運用段階2-1に適用した。

◎ 第一ステップ：音声をチャンク（かたまり）として丸暗記する時期

その方略に対応する手法として、

- ・表現集（チャンク集）の丸暗記
- ・その表現集のパターンプラクティス
- ・活用表（時制や主語や目的語などの1単語を変えるためにパターン化した表のこと）

Ex. I have a pen. という一文において、[You] have a pen. / [He] has a pen. / [They] have a pen. / [One of them] has a pen. のように主語を変えながらパターンプラクティスを行うことで、基礎文法を英会話で自動的に使えるようになる。（この練習の例では、意味内容ではなく、三単現を自然に英会話で使えるようになることに特化している。）

・シャドーイングやアクティングの暗唱による一部転移

を選定した。また、その教材として、

・構文集・会話フレーズ集・中学レベルのチャンク収集用の教材（『ネイティブなら子どものときに身につける 英会話なるほどフレーズ100』ステーブソレイシィ著—2000—アルクなど。※さらなる教材の紹介はEMへ）

・活用表として最適な教材（『中学英語で言いたいことが24時間話せる Part 1』市橋敬三著—2000—南雲堂）

・iKnowやBussu.com(Online学習サイト)、メールマガジン、ラジオ英語講座などのチャンク収集用の教材

を選定した。

■ 運用段階2-2：正確さよりもある程度の流暢さを意識

この運用段階2-2は、方略18に依拠して設定した。

具体的には、竹内(2003)が、「始めは正確さよりも、ある程度の流暢さを重視した方が、学習が

進みやすいという学習成功者の共通パターン」を導き出した。つまり、「初期段階においては、正確さよりも、“通じた”という喜びの感覚が継続的動機付けの意味でも非常に重要となる」という発見（方略18）を竹内は示した。

また、「流暢さ」と「正確さ」のトレードオフが、この運用段階2-2と2-3の間にも生じている。つまり、認知資源（注意資源）には限りがあるため、発話する際に、流暢さにフォーカスすると正確さが失われ、逆に流暢さにフォーカスすると正確さが失われるという関係である。まずは、2-2の流暢さから始めるべきであると、方略18と継続的動機付けの観点から判断し、「運用段階2-2：流暢さの意識」を設定した。

運用段階2-2の方略を体現する具体的な手法は以下のとおりである。

・英会話： 運用段階2-1で蓄積したチャンクを、正確さよりも流暢さを意識しながら英会話で実際に発話してみる。闇雲に英会話を行うのではなく、事前に習熟しておいたチャンクを、英会話の場で何度も試し、修正を繰り返すことでスピーキング能力が向上していく。また、方略2にあったように、常日頃から英語を発話する機会をできるだけ増やし、学習者自身の英語が通じることが確認する姿勢は、継続的動機付けを得る点においても必要不可欠である。

・パラレルリーディング： テキストを見ながら、CDなどのモデル音声をシャドーイングする手法。この運用段階では、正確さよりもリズム・流暢さを意識してパラレルリーディングを行うことにより、発話に対する抵抗が減り、「英語が口から滑らかに出てくる感覚」が得られるようになる。

■ 運用段階2-3：チャンクの運用の自動化と正確さの向上

この運用段階2-3を、方略20に依拠して設定した。方略20と前項での「流暢さ」と「正確さ」のトレードオフの視点より、ある一定の流暢さを求める学習方略から継続的動機付けを得た後は、“伝える”ことにフォーカスした「正確さ」とその自動化を促す過程が必要となってくる。

運用段階2-3の方略を体現する具体的な手法は以下のとおりである。

・パターンプラクティス： 2-1で丸暗記した内容を、実際の英会話で使う前に、内容を変えて練習することで、すぐに会話で使えるチャンクとして記憶しなおす手法。（※パターンプラクティスは、運用段階2-1、2-2でも行う手法であるが、特に運用段階2-3で注力して行う。）

例えば、「I would like to ～ .」（私は～がしたいです。）というチャンク（言い回し・フレーズ）を丸暗記したら、「～」の部分に色んな内容を入れることで、チャンクを応用し、実際に英会話で使えるように繰り返し練習する。目の前に相手がいることを想定しながら、まずは言い間違いなどの失敗をしても恥ずかしくない“独り言”で、発話練習を行う。また、ボイスレコーダーやスマートフォンのボイスメモアプリなどで、学習者自身の英語を録音し、確認と修正を繰り返す。

Ex. I would like to [eat it]. / I would like to [talk to him]. / I would like to [go there]. など。

・テーマを決めて一人で会話／発話する： その実践的なチャンクを用いて、テーマを決めて、自由に一人で会話／発話して、さらにそのチャンクの使用精度を高めていく手法。（※実際に、英語学習成功者たちが好んで実践していた手法である。さらに発展させて、現状を英語で表現してみる”実況中継”の手法や、うまく表現できなかった過去の”英会話を反芻”し、英会話シミュレーションとして、一人で表現し直してみる手法なども有効である。）

■ チャンク会話法の6つのステップ

この運用段階2-1、2-2、2-3に依拠し、かつ、それらを体現する形で、以下のSpeakingにおけるチャンク会話法の6つのステップを作成した。要するに、パターンプラティスの手法を効率的に実践しやすいように、6つのステップに分割して流れを作った学習手法である。

<チャンク会話法の6つのステップ>

1. 表現集（チャンク集）の通読、丸暗記、一問一答 （運用段階2-1に依拠）
2. PP（パターンプラクティス） （運用段階2-1, 2, 3に依拠）

Ex. I would like to ~（～がしたい）というチャンク表現例文の場合。以下の、～に当たる []部分が、PPを行っている箇所。

I would like to [eat it].
I would like to [talk to him].
I would like to [go there].

3. CDなどのモデル音声で、パラレルリーディングを行いリズムを体得 （運用段階2-2に依拠）
4. PPを行い、その例文の後に、一文ずつ新たな内容を加えながら独り言 （運用段階2-2, 3に依拠）

Ex. I would like to ~（～がしたい）というチャンク表現例文の場合。以下の、{ }部分が、新たな内容を加えながら独り言を行っている箇所。

I would like to [eat it] {and bring it home.}
I would like to [talk to him] {and work on our homework together.}
I would like to [go there.] {and I'm getting excited just by thinking about it.}

5. ボイスレコーダーで録音して確認と修正 （運用段階2-2, 3に依拠）
6. テーマ決めて、体得した表現チャンクを使って自由に独り言 （運用段階2-3に依拠）

※このチャンク会話法を実践する教材の紹介、学習期間の目安などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html#info02>（Speakingセクションの”チャンク会話法”）」へ。

※また**ビジネス**英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02> (Speakingセクションの”チャンク会話法”)」へ。

5.5 【段階3. さらなる流暢さと機転の利いた会話】

【**段階3. さらなる流暢さと機転の利いた会話**】を、方略4と先述した「方略ベースのスピーキングの大きな流れ」に依拠し、それらを実践する段階として設定した。つまり、自習環境のパターンプラクティスで培ったチャンクを基盤に、実際の英会話での場数を増やして行く段階である。段階2が、認知行動主義と社会構成主義の過渡期であったが、この**段階3**は、ほぼ完全に社会構成主義に軸足を置いて、スピーキングの学習を進めていく段階である。

その方略（段階3）に対応した具体的な手法は以下のとおりである。

・英会話 : 基本的には、この英会話を通してのチャンク実践による試行錯誤を繰り返すことで、さらにチャンクの精度を上げ、それに伴う「正確さ」と「流暢さ」をともに向上させていく

※安価で気軽に利用できる新たな英会話の場として、Skypeを利用したオンライン英会話（Ex. [ラングリッチ](#)）などもEMでは紹介している。英会話実践の学習期間の**目安**を含めた、さらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html#info02> (Speakingセクションの”英会話実践”)」へ。

※また**ビジネス**英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02> (Speakingセクションの”英会話実践”)」へ。

十 英会話が段階3のメインの手法であるが、以下は補足手法として選定した。

・DVD（映画などの）アクティング : リスニングの段階3の手法であるアクティングにより、チャンクを収集し、それをスピーキングの場面でも活用する。

・歌 : 同じく、リスニングの段階3の手法として紹介した。音変化に富んだ歌という教材／素材を使い、チャンク収集を行い、それをスピーキングの場面でも活用する。また、楽しさ／動機付けという点においても有効である。

・ボイスレコーダーを用いたテーマを決めた独り言 : 段階2のチャンク会話法の6つのステップ中、5、6ステップ目の手法を継続的に段階3でも行う。ここでは、英会話から収集したチャンクを繰り返し反復し、自在に使えるチャンクとして体得する補完的な役割を果たす。

第6章 CLAMETHODにおけるReading Sectionの裏付け

《キーワード》

音読 音韻符号化 多読 雪だるま方式

6.1 READING SECTIONにおける早見表の再提示

Reading Sectionの早見表

<Readingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟段階

・基礎語彙（2500～3000語が目安）を、文脈の中で暗記していく（速読英単語などの教材を利用）

・文法構文に関しても、速読英単語などの教材を利用し、文章の中で習熟していく

※ただし、初歩的な語彙・文法が理解できていない場合は、中学の教科書レベルの教材を利用し、初歩的な語彙と基礎文法を先に体得する必要がある。

段階 2. 文字と音（内語）のつながりの強化段階（音読段階／リーディングの基盤作りの段階）

手法：音読

音読による効果・・・音読を通して、文字と音のつながりを強化し、それを繰り返すことで、デコーディング（文字を見て→その語彙を脳内の長期記憶データベースから検索して→ワーキングメモリのループに内語として音声化する下位処理）の自動化・スピードが促進される。それにより、理解（上位処理）に、より多くの認知・注意資源を費やすことができるようになり、理解度も上がる。また、音読によって、ループ中の復唱能力も向上するため、リテンション能力が上がり、インプットされた情報（学習内容）が短期記憶でとどまらず長期記憶になりやすくなる（長期記憶データベース量が増強される）。さらに、音読によるリテンション能力向上は、リスニング能力の向上にまで効果が波及する。

<音読の留意点>

・音読は負荷が小さいことが難点であるため、常に速いスピード（負荷）で行うこと、そして、スピードの向上を意識して行うことが重要

・音読は集中型ではなく、長期継続型で繰り返すことで効果が増す

・音読は教材をまず理解してから行うこと（長期記憶データベースへのアクセスの高速化に伴う理解度の向上、内在化の高速化も同時に行えるため）

・それに伴い、音読をする前に、理解のための精読（細かく分析的に読む手法）を行うことになる

・音読はモデル音声をしっかり聞いてから行う方が好ましい

・多読ではなく、深くじっくり音読する意識で行う

段階 3. 多読段階

・雪だるま方式の多読法＝「偏ったテーマの文章を大量に読みこなすことで、雪だるまのコアとなるような多読の基礎（主に語彙量／スキーマ情報量／大意を掴む能力の向上）を醸成し、その多読の基礎をベースに様々な文章を多読していく手法」

・雪だるま方式の語彙習得法＝「偏ったテーマの単語集で集中的に語彙数を増やすことでコアとなる語彙群を獲得し、その語彙群をベースに、関連付けを行いながら他のテーマの語彙も覚えていく手法」

6.2 2.3の方略12～15, 24～26との整合性

III. 【リーディング】における成功者の共通パターン

- ◎方略12： 細部にこだわり「分析的に」読む（初期後半から中期）
 - ※ 文法、構文などの知識のデータベース化とその意識的な使用が目的。
- ◎方略13： 意味内容に重点をおきながら「大量に」読む（中期以降）
 - ※ データベース使用の自動化と言語経験の増大が目的。
- ◎方略14： 繰り返し音読する（初期から中期）
 - ※ 我流にならないように、CDなどモデル音声とともに音読。
- ◎方略15： 母語に訳さないで読む（中期以降）

IV. 【ボキャブラリー】における成功者の共通パターン

- ◎方略24： 基礎語彙の速やかな蓄積をおこなう（初期）
- ◎方略25： 文脈化／音声化／身体化／ネットワーク化などの多重経路と複数の手がかりを使い、語彙を記憶する（初期から中期）
- ◎方略26： リスト化により特定の語彙を増やす（初期および後期）
 - ※ 記憶に関しては、入力経路を増やし、記憶材料を文脈化、音声化、身体化、そしてネットワーク化していくことが有効なようである。

※竹内(2003)を参考に独自に再構成した図

以上の方略12～15、方略24～26に基づき、リスニング、スピーキングでも提示したような、以下の大きな流れの枠組みを設定した。

初期・・・基礎語彙を中心とした暗記による基礎固め（方略12、24、26）

↓

中期・・・文字と音のつながりの強化（方略14、15、25）

↓

中期以降から後期・・・多読段階（方略13）

6.3 リスニングとリーディングの関連性

「インプットを処理する」という観点から見れば、リスニングとリーディングは、知覚する刺激が視覚と音声という違いはあれど、共通している部分が多い。ここでは、シャドーイングにより「聞く仕組み」を理解したのと同様に、シャドーイング部分を音読にすり替えて、音読という手法を切り口に「読む仕組み」を理解していく。リスニングセクションで説明した「知覚と理解」、「音韻ループ」の知見を元に詳述していく。

■ 音読による「読む仕組み」と音読による「第二言語習得への貢献」⁴¹

【音読訓練】

↓

(1) 音韻符号化（ディコーディング）⁴²の自動化

↓

(2) 音韻符号化した音声復唱の効率化

↓

(3) 約2秒間で視覚入力を音韻符号化（音読）できるスパンの拡大

↓

(4) 語彙、語彙チャンク、文法情報の効率的な記憶

↓

(5) 第二言語の習得

※門田(2007:178)からの引用

以下、門田(2007)を引用し、1つずつ順を追って詳述していく。

(1) 音韻符号化（ディコーディング）の自動化

眼球停留中に眼から取り込んだ視覚情報を音韻符号化して、約2秒間にできるだけ早く多くリハーサルできるためには、その前提として、リーディングの下位プロセスである音韻符号化（ディコーディング）が自動化している必要がある。音読のトレーニングによる、リーディングにおけるこの音韻符号化の自動化の仕組みは以下のようなものである⁴³。

⁴¹ 門田 (2007:178)

⁴² 簡単に表現すれば、音読（のための文字の音声化）のことである。

⁴³ さらなる詳細については、門田 (2007:120) を参照されたい。

<音読によるディコーディング過程の自動化への6ステップ>

ステップ1) 文字と発音との結びつきの強化

ステップ2) 音読の高速化

ステップ3) 復唱能力の向上

ステップ4) 音韻符号化の自動化

ステップ5) 単語認知⁴⁴の自動化

ステップ6) 読みのディコーディング過程の自動化

(2) 音韻符号化した音声復唱の効率化

音読の繰り返しにより、この音韻符号化が自動化されると、相乗的に音声的に復唱する内語反復過程スピードの高速化も達成することができる。

(3) 約2秒間で視覚入力を音韻符号化(音読)できるスパンの拡大

上記の(2)ができるようになってくると、約2秒間という限られた時間内に、より多くの語や語句などの言語情報を音韻化(音読)することが可能となる。

(4) 語彙、語彙チャンク、文法情報の効率的な記憶

以上の(1)～(3)の結果、聴覚提示された言語情報の場合と同様に、第二言語の個々の単語や、語彙チャンク、さらには新たな文法項目などの効率的記憶、すなわち長期記憶への迅速な搬送が可能になると考えられる。

(5) 第二言語の習得

そして、最終的に、効率的な情報の取得を通じて、視覚的に取り込んだ言語情報をもとにした、新たな言語の習得が可能となる。

こうして、シャドーイングの場合と同様に、音読訓練が「内語反復プロセスの効率化・顕在化」を促進させ「新情報の内在化」を可能にする。言い換えれば、これが、音読を通じた内語反復の自動化をはかり、第二言語を獲得するための道筋と言えよう。(※引用おわり)

※音読の有効性を立証するために、門田(2007:211-217)は、教育実践のデータを提示している。その中で特筆すべきデータは、大学入試の英語問題対策として音読が有効かどうかを問うもので、センター試験の客観式問題、また記述式テスト問題に対しても、音読が有効であることを明らかに

⁴⁴ メンタルレキシコン内への語彙情報アクセスに関係する心的操作。

している。また、音読は、集中的に学習を行うよりも、毎日5分間継続的に分散した学習を行う方がより効果が上がると示唆している。

6.4 【段階1．基礎語彙力と文法構文の習熟段階】

音韻符号化の前段階（音読のための文字音声化の前段階）として、方略12、24、26に依拠する形で、【段階1．基礎語彙力と文法構文の習熟段階】を設定した。

音読のための文字音声化の前段階として、単音、そして基本的な英文のリズムも含む知覚的な音韻データを収集しながら、同時に、意味理解をした上で、語彙データを収集する必要がある。なぜなら、この両方が揃わないと、そもそも音読（文字音声化）自体ができないからである。

ちなみに、留意点として、音韻データ収集時には、中間言語（日本語式英語発音）を使わないようにすることが肝要である。というのも、モデル音声（ネイティブの発音）の音韻データを初期から収集しておくことで、リーディングの知識が、リスニングやスピーキングに生かされる可能性が大きく広がるからである。

早見(1992)によると、基礎語彙に関しては2500～3000語（日本の大学試験の文章の90%がこの範囲の単語数で構成されている）と分析されているため、目安として提示した。また、方略25に指摘されている「文脈化／音声化／身体化／ネットワーク化などの多重経路と複数の手がかりを使い、語彙を記憶する」という手法は、池谷(2002:78)の脳科学の知見にも整合性を求めることができ、非常に有効な手法であることが明らかにされている。その中でも、文脈で単語を記憶していくことに特化した『速読英単語—必修編』早見寛著（1992 増進会）を、その手法に対応する教材として選定した。また、この教材は様々なシリーズ／レベルがあり、CDも買い求められ、さらに文章としても面白い内容が多いため、次の段階2の音読の教材としても選定した。

また、文法構文に関しても、速読英単語シリーズなどの教材を通して、語彙を増やしながら習熟していく。なお、それ以前の基礎文法や初歩的な語彙が身につけていない場合は、Speaking Sectionの段階1で先述したように、中学の教科書などで先に基礎理解を深める必要がある。

※中学基礎レベルの教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info02>（Readingセクションの”中学の基本文法マスター”）」へ。

6.5 【段階2．文字と音(内語)のつながりの強化段階】

【段階2．文字と音(内語)のつながりの強化段階】は、2.3の方略14、15、25を論拠として設定した。また、先述したワーキングメモリの音韻ループの機能を背景とした「音読による第二言語習得への貢献」も、この段階2を設定した根拠である。

段階2を体現する手法として音読が選定された理由は、6.3で詳述してあるが、もう一度、ここで流れを示しつつ説明する。

<音読による効果>

1) 音読訓練を通して、文字と音（内語）のつながりを強化し、それを繰り返すことで、反応スピードも上がっていく

※脳内にあるメンタルレキシコン内の語彙データベースと音韻データベースの連関の強化

↓

2) 1) が達成されると、デコーディング（「文字を見て→その語彙を脳内の長期記憶データベースから検索して→ワーキングメモリの音韻ループに内語として音声化する下位処理」）の自動化・スピードが促進される ※つまり「知覚と理解」における知覚が自動化される

↓

3) それにより、理解（上位処理）に、知覚の自動化によって開放された認知資源を費やすことができるようになり、理解度も上がる

↓

4) また、音読によって、ループ中の復唱能力も向上するため、リテンション能力が上がり、インプットされた情報（学習内容）が短期記憶でとどまらず長期記憶になりやすくなる（長期記憶データベース量が增強される）

↓

5) さらに、音読によるリテンション能力向上は、リスニング能力の向上にまで効果が波及する（※ただし中間言語を介さずに音読する場合に限る）

■ 音読の留意点

<音読の留意点>

- ・シャドーイングと比較した場合、音読は負荷が小さいことが難点であるため、常に速いスピード（負荷）で行うこと、そして、スピードの向上を意識して行うことが重要
- ・音読は集中型ではなく、長期継続型で繰り返すことで効果が増す（6.3を参照）
- ・音読は教材をまず理解してから行うこと⁴⁵（長期記憶データベースへのアクセスの高速化に伴う理解度の向上、音韻符号化・単語認知の自動化、内在化の高速化も同時に行えるため）
- ・それに伴い、音読をする前に、理解のための精読（細かく分析的に読む手法）を行うことになる
- ・音読はモデル音声をしっかり聞いてから行う方が好ましい（中間言語の排除のため）
- ・そのため、教材に関しては『速読英単語』など、必ずCDでモデル音声を確認できる教材で行うこと
- ・手法自体に高い負荷がかかるシャドーイングと違い、音読は負荷がそれほど高くないため、学習者のレベル(i)よりも少し高め(i+1)程度の、少し背伸びをするくらいの負荷を与える教材が好ましい
- ・多読ではなく、深くじっくり音読する意識で行う（方略12、14、15を参照）

※音読の教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.cigo-manabu.jp/Goal-oriented/EntranceExams.html#info02>（Readingセクションの”文字と音のつながりの強化”）」へ。

⁴⁵ 門田（2007:240）

※また **ビジネス** 英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02> (Readingセクションの”文字と音のつながりの強化”)」へ。それと合わせて、同リンク先の、Readingセクションの”ビジネス用の基礎単語と構文の習熟”も参照されたい。

6.6 【段階 3. 多読段階】

【**段階 3. 多読段階**】の設定は、先述した「方略 1 3： 意味内容に重点をおきながら”大量に”読む」に依拠している。この段階 3 の目的は、段階 1、2 で培った語彙／音韻データベースと、音韻符号化の自動化をもとに多読を行うことによる、ループ内での理解処理過程で行われる、メンタルレキシコン内に存在する各種データベースへのアクセス高速化と関連強化である。また、その理解という過程の処理自体の自動化も促進され、言語経験／データベース量を増大していく目的も兼ねている。

その**方略に対応する手法**として、**雪だるま方式の多読法**を提案した。その雪だるま方式の多読法とは、「偏ったテーマの文章を大量に読みこなすことで、雪だるまのコアとなるような多読の基礎（主に語彙量／スキーマ情報量／大意を掴む能力の向上）を醸成し、その多読の基礎をベースに様々な文章を多読していく手法」を指す。具体的には、手当たり次第ランダムなテーマを多読するのではなく、雪だるまを作る際の一番始めの小さな雪玉（コア）を作るイメージで、そのコアとなるテーマ・分野を 1 つ決める（例えば、経済分野など）。そして、その分野を徹底的に多読してコア（多読の基礎）を醸成した後、別のテーマ・分野へと多読範囲を広げていくことで、転がす雪玉（コア）に雪が自然と付いていくように、どんな文章でも読みこなせる多読力が自然と付いていくという学習法である。この学習方法については、白井(2008)や本田(2008)でも、実証データとともに提示されているので参照されたい。教材に関しては、学習者の好みのテーマの教材を選ぶのが、動機付けの観点から最適であると言える。

また、この手法を語彙習得に転用すれば、**雪だるま方式の語彙習得法** = 「偏ったテーマの単語集で集中的に語彙数を増やすことでコアとなる語彙群を獲得し、その語彙群をベースに、関連付けを行いながら他のテーマの語彙も覚えていく手法」という提案も可能であり、この手法は、方略 2 6 との高い親和性を有している。

※「雪だるま方式の多読法」と「雪だるま方式の語彙習得法」に関する教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/AcademicWriting.html#info02> (Readingセクションの”多読力の向上”と”専門分野におけるコア単語の習得”)」へ。

※また **ビジネス** 英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02> (Readingセクションの”多読によるスピードアップ”)」へ。

■ 英英辞典の留意点

巻でよく紹介されている「英英辞典を活用する」という手法は、一見、「方略15：母語に訳さないで読む」を体現しているかのような印象を受けるが、実は注意が必要である。以下でその理由を詳述していく。

そもそも、母語（日本語）に訳さないで英語が読めるようになるためには、以下の5つの能力が必要である。

- (1) 段階1の基礎語彙力と文法構文の習熟
- (2) 段階2の音韻符号化の自動化
- (3) 段階2の単語認知の自動化
- (4) 前から意味を汲み取っていく英語特有の語順への慣れ（段階2、段階3で強化される）
- (5) 英語特有の表現様式への慣れ（段階2、段階3で強化される）

以上の5つの能力が揃ってようやく、英語を英語のまま理解できる状態が醸成される。

逆に言えば、その5つの能力が乏しい状態では、完全には英語を英語のまま理解できない状態であり、そのような曖昧な状態で英英辞典を活用しても、ほとんど意味がない（学習効果が得られない）のは明らかである。つまり、それほどまでに英英辞典の活用は難易度が高い手法であり、段階3の終盤でようやく使いこなせる程の最高難易度の手法なのである。

もちろん、リスニングにおける最高難易度の教材である映画と同様、単純に「英単語を英語でどのように表現するのか」などの英語特有の表現様式を学習するための目的であれば、どの段階でも”触る”程度の活用は可能ではある。しかし、手法としては完全に上級者向けであり、読解力を母語レベルにまで押し上げるために活用されるべき手法であるため、上級レベルに至っていない段階で、”英語を英語で理解している”という頭が良くなったような錯覚に惑わされて、軽々しく英英辞典に手を出さないように重ねて**注意**を喚起したい。

第7章 CLAMETHODにおけるWriting Sectionの裏付け

《キーワード》

ルールと気づき 英借文 転移 開かれた文法

7.1 WRITING SECTIONの早見表の再提示

*Writing Section*の早見表

<Writingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟 (Readingの段階 1 と同じ)

段階 2. 英借文の習熟と文章の添削 (Speakingの段階 2 と同じく、論述用のチャンクを収集し、パターンプラクティスを通して、チャンクを使用したアウトプットに習熟する)

段階 3. Readingからの転移 (Reading能力向上に伴う自動的なWriting能力の向上)

7.2 2.3の方略27～31との整合性

Ⅵ. 【ライティングと文法】における成功者の共通パターン

《ライティングに関して》

◎方略27： リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れる」（中期以降）

◎方略28： 読んだものから表現を借りて覚え、利用する（中期以降）

◎方略29： 定期的に書き、添削してもらう（中期）

《文法に関して》

◎方略30： 形式やルールを意識的に学ぶ（中期前半頃から）

◎方略31： 学んだ形式やルールについて文脈の中で気づき、確認する（中期以降）

※この「学び」と「気づき」の二つは、学んでいなければ気づくことができず、学んでいても実際場面での形式やルールの使用に気づくよう注意を向けられなければ知識の段階で終わる、というような関係にある。こうしてみると、日本における従来の文法教育は「学ぶ」側面に重点がおかれすぎており、大量の題材に触れながら文脈の中で「気づく」側面を十分に強調しえなかったことが、役に立たないとの批判を受けてきた理由の一つなのかもしれない。

※竹内(2003)を参考に独自に再構成した図

この2.3の方略を以下のように、流れをつけて再構成した。

「

◎方略30： 形式やルールを意識的に学ぶ（中期前半頃から）

◎方略31： 学んだ形式やルールについて文脈の中で気づき、確認する（中期以降）

↓

◎方略28： 読んだものから表現を借りて覚え、利用する（中期以降）

◎方略29： 定期的に書き、添削してもらう（中期）

↓

◎方略27： リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れる」（中期以降）

」

この流れをさらに段階によって分類したものが、以下の流れである。

「

<Writingにおける基礎段階 = 段階1>

◎方略30： 形式やルールを意識的に学ぶ（中期前半頃から）

◎方略31： 学んだ形式やルールについて文脈の中で気づき、確認する（中期以降）

↓

<Writingにおけるパターンプラクティスとその実践 = 段階2>

◎方略28： 読んだものから表現を借りて覚え、利用する（中期以降）

◎方略29： 定期的な書き、添削してもらう（中期）

↓

<Reading (Input) からWriting (Output) のチャンクを収集する段階 = 段階3>

◎方略27： リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れる」（中期以降）

」

この流れから、段階で分類した部分だけを抜き出し、再定義し直したものが、CLAメソッドのWriting Sectionである。

7.3 【段階1．基礎語彙力と文法構文の習熟段階】

【段階1．基礎語彙力と文法構文の習熟段階】を、ライティングにおける基礎段階として、

◎方略30： 形式やルールを意識的に学ぶ

◎方略31： 学んだ形式やルールについて文脈の中で気づき、確認する

の方略に依拠して設定した。また、方略では言及されていなかったが、形式やルール、文脈の中で学ぶためには、当然、Reading Sectionの段階1（初期段階）と同じ基礎を有していることが前提である。Writing Sectionの方略が全て中期以降であるのも、そのためである。その認識に基づき、基礎語彙力と文法構文の習熟を、**段階1**として組み込んだ。

手法／教材に関しては、導入部分であるため、6.4を参考にしつつ、個人の趣味趣向にあった単語帳や、基本的な文法が学べる入門レベルの文法書から学習を開始することを薦める。

※中学基礎レベルの教材の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info02>（Readingセクションの”中学の基本文法マスター”）」へ。その教材の学習後「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info02>（Writingセクションの”基礎語彙／基礎文法の習得”内の発展ステップ）」へ。

7.4 【段階 2. 英借文の習熟と文章の添削】

【**段階 2. 英借文の習熟と文章の添削**】を、ライティングにおけるチャンク収集とパターンプラクティスを実践する段階として、

◎方略 28： 読んだものから表現を借りて覚え、一部を変えて利用する（英借文の利用）

◎方略 29： 定期的な書き、添削してもらう

の方略をもとに設定した。これは、Speaking Sectionの段階 2、3に相当している。つまり、チャンク会話法に代表されるパターンプラクティスをライティングでも行い（英借文の実践）、それを実際に添削という実践の場でアウトプットする、ということである。

手法としては、英借文の利用を選定した。英借文の利用とは、チャンク会話法と同じく、論述用のチャンク集を使って（表現を借りてきて）、そのチャンクの一部を変えて、自分のアウトプットとする手法である。

例えば、When it comes to ~（～に関しては）という論述向きのチャンクを使い（表現を借りてきて）、以下のようにパターンプラクティスを行い、実際にアウトプットしていく。

When it comes to [this issue],

When it comes to [the current situation],

When it comes to [decision making],

教材としては、留学生向け、学術論文向けの数多くのチャンクが詰まった『TOEFLテスト必修ライティング攻略ゼミ』 Park Kwang-Heui著 MHRプランニング翻訳（2001 ピアソンエデュケーション）を選定した。

※この教材による英借文の習熟方法、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/AcademicWriting.html#info02>（Writingセクションの”学術様式の英借文の習熟”）」へ。

また、文章の添削については、自宅にいながらにしてネイティブの添削が受けられる『オンライン英文添削アイディー（<https://idiy.biz/>）』というオンライン英文添削サービスを選定した。

※英文添削サービスの具体的な活用方法、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/AcademicWriting.html#info02>（Writingセクションの”添削”）」へ。

※また**ビジネス**英語の習得が目的の場合は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02>（Writingセクションの”ビジネス様式の英借文の習熟”と”添削”）」へ。

7.5 【段階 3. READINGからの転移】

【段階 3. Readingからの転移（Reading能力向上に伴う自動的なWriting能力の向上）】は、リーディング（インプット）からライティング（アウトプット）のチャンクが自動的に収集される段階として、

◎方略27： リーディングを通じて対象外国語に「大量に触れる」

の方略にもとづいて、設定した段階である。これは、リスニングにおける多聴や、DVDアクティングなどの手法により、なかば自動的にスピーキング用のチャンクが収集される段階と同様の効果がある。つまり、リーディングにおける多読を通して刷り込まれた「お気に入りのフレーズ」（ライティング用チャンク）が、自動的に収集される段階である。

※「Readingからの転移」に関する教材（転移の例）の紹介、学習期間の**目安**などのさらなる詳細は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/AcademicWriting.html#info02>（Readingセクションの”多読力の向上”）」へ。

※また**ビジネス**分野における教材（転移の例）の紹介は、EMの「<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html#info02>（Readingセクションの”多読によるスピードアップ”）」へ。

また、段階1、2で基盤を固めることに成功した学習者ならば、多読中にも、精読中にも、意識的にライティングにおけるチャンクを収集するという手法をとることも可能になってくる。

以上が、「リーディング能力向上に伴う自動的なライティング能力の向上」の真意である。このレベルにまで学習が進めば、学習初期段階では、インプットされた情報を処理するためだけに、受動的な形でしか活用されなかった文法（統語データベースとその処理）が、「開かれた文法」に進化を遂げる。すなわち、パターンプラクティスを通してアウトプットを重ねることで、文法の能動性が開発され、最終的に、チャンクを自動的に収集し、それを再利用できる形で文法処理関連データベースに記憶していくことが可能になる。いわば、閉ざされた文法から、開かれた文法への進化とも呼べるべき現象が起こるわけである。

第8章 EMによるCLAMメ

ソッドの実践とモニター評価

《キーワード》

EM モニター 個人面談 講演会

8.1 EM (EIGO-MANABU.JP) とは

- EMのトップページのスクリーンショット



www.eigo-manabu.jp

■ EMの特徴と使用方法

EMとは、筆者（足立）がCLAメソッドを元に作成したウェブサイト（<http://www.eigo-manabu.jp/>）のことである。このEMは、CLAメソッドの特徴2:中間性（3章で先述）をさらに押し進めて実行したものである。つまり、もっとCLAメソッド自体を分かりやすく学習者に使ってもらうという試みである。

EMの最大の特徴は、CLAメソッドの特徴3でもあるオーダーメイド性をさらに高めた点である。オーダーメイド性に関して、もう少し俗な例えで言えば、CLAメソッドは、ホテルのバイキングレストラン会場に例えられる。レストラン会場には、肉、魚、サラダ、果物、ごはん、パン、飲み物などが並べられており、それを来場者が各々の趣味趣向に合わせて選び盛り合わせていき、1枚のお皿の盛り合わせが完成する。同様に、CLAメソッド内には、各4技能における学習段階（方略）と手法、教材が提示されており、学習者は、学習者の趣味趣向／学習レベル／目的に合わせてそれらを選定していき、学習者だけのパッケージ（学習計画）を作ることができる。

また、さらに分かりやすくCLAメソッドを”手っ取り早く”使えるように、「CLAメソッド活用例」も提示した。バイキングでも何を選べば良いか迷ってしまう人向けに、いわば「定食」も用意したわけである。つまり、学習者の目的に合わせて、サンプル（お手本／たたき台）となる学習方法の盛り合わせのパッケージ（「定食」）を提示し、そこから自由に内容を少しずつ変えられるような道筋を作った。これが基本的なEMの使用法である。

視覚的にも直観的にも分かりやすくすることで、よりCLAメソッドの選定・活用を行いやすい場を提供しているのが、EM（eigo-manabu.jp）である。

以下が、サイトのスクリーンショットであり、順番に、

「CLAメソッド活用例 → ”手法”に関するガイドラインの提案 → ”教材”に関する提案」を表している⁴⁶。

⁴⁶また、EM内の「ガイドラインの作成方法」にて、どのように各4技能における段階（方略）の選定を行ったかについても、各活用例ごとに詳しく説明している。

■ EMにおける「CLAメソッド活用例」の一例

活用例（英語の目的）：



詳細 → <http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html>

「海外旅行で自由に英会話を楽しむための英語力」

を身につけるために必要なCLAメソッドの**方略（段階）**を選定：



詳細 → <http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info03>

具体的には、

リスニング : 段階1、段階2

スピーキング : 段階1、段階2

リーディング : 段階1、段階2

ライティング : 段階1

を選定した。



以下が、その選定された段階・方略に対応した（「海外旅行」の目的に適した）、CLAメソッドの”手法”だけを4技能ごとにまとめた概要イメージ（ガイドライン）：



詳細 → <http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info01>



以下が、その手法に対応する教材とその学習の流れ：

【Listening（聴く）】



【Speaking (話す)】



【Reading (読む)】



【Writing (書く)】



詳細 → <http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Kaigairyoko.html#info00>

以上が、「海外旅行で自由に英会話を楽しむための英語力」を身につけるために必要なCLAメソッドの段階・方略に基づく手法と教材の紹介、ならびに学習ガイドラインの提案である。学習者は、このガイドラインをたたき台として、学習者自身の好みやレベルに合わせて、教材や手法を自由に変更し、自分だけの学習プランを創り出すことができる。

EM⁴⁷では、このような活用例（英語の目的／学習ガイドライン）がたたき台として、**合計9つ**提示されているので、学習者ごとの目的に合わせた「CLAメソッド活用例」を選択することが可能である。

⁴⁷ 留学体験記などのコラムも掲載している。 <http://www.eigo-manabu.jp/Column/column.html>

また、「聞き流すだけで英語はペラペラになりますか？」などのQ&Aも参照されたい。 www.eigo-manabu.jp/QA/qa.html

■ 各教材ごとの「卒業条件」「獲得する能力」「目安」の提示

EMでは、紹介されている各教材ごとに、「教材のゴール（卒業条件）」、「教材を通して獲得する能力」、「学習期間のおおよその目安」の3点が提示されているため、学習者自身の目的／投資可能な時間／レベルに合わせて、教材（手法）を学習プランに組み込みやすくなった。

以下がその一例である。

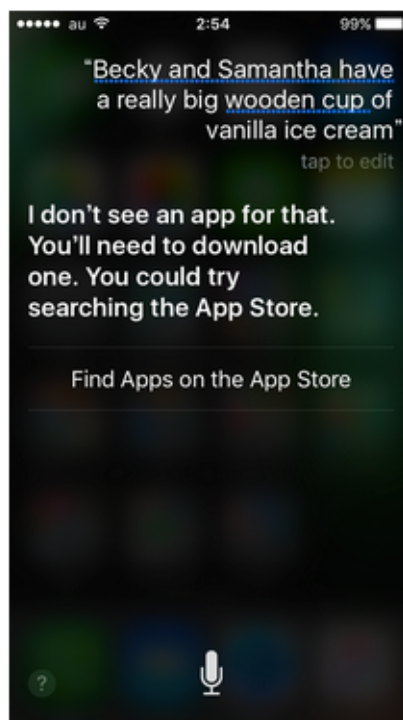
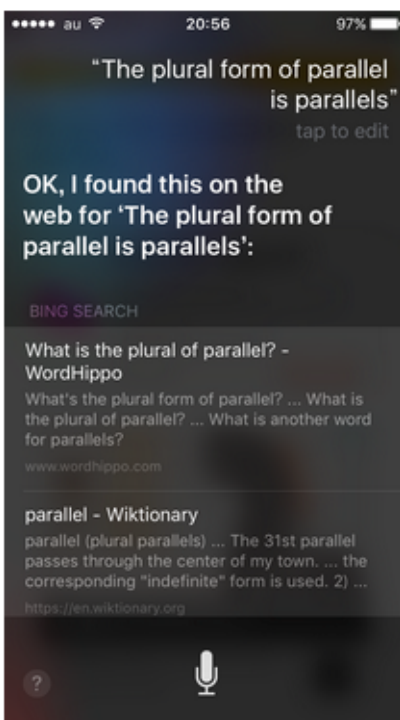
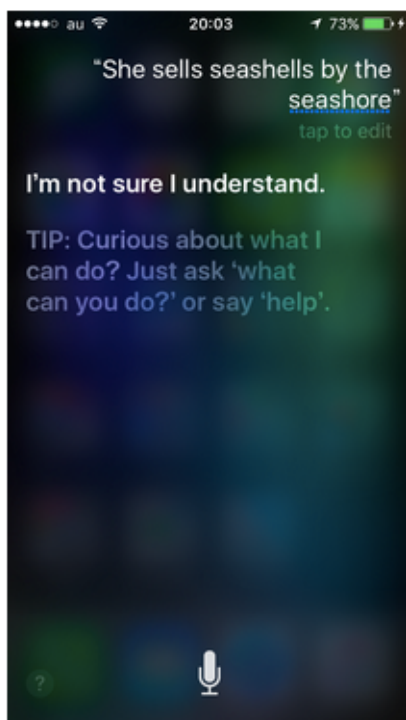


教材のゴール（卒業条件） = 「以下の3文を、Siriが正しく認識できるようになること。」

教材を通して獲得する能力 = 「単音マスター、単語・文単位の音に慣れる（音韻情報の蓄積）。」

学習期間のおおよその目安 = 「毎日3時間学習の短期集中型であれば、最短2週間～1ヶ月。毎日30分学習の中長期継続型であれば、3ヶ月。」

1. She sells seashells by the seashore.
2. The plural form of parallel is parallels.
3. Becky and Samantha have a really big wooden cup of vanilla ice cream.





上記イメージの動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=9ndoBgNNqhM>) では、動画というメディアを介して、より具体的に、教材のゴール（卒業条件）を提示している。

8.2 CLAメソッドの実践によるケース別モニター評価

■ 概要

モニター、個人面談による処方箋、講演会という3つのカテゴリーを設け、それぞれのカテゴリーから直接フィードバックをもらい、その評価を行った。フィードバックの形式は、「慶應義塾大学の学生10名からの自由記述式アンケート」であり、その10名の内訳は、「モニター2名、個人面談4名、講演会参加者4名」である。

■ モニター

以下の、2名の被験者にCLAメソッドのモニターを行ってもらった。

●守 淳史さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 2年

●東ヶ崎 裕介さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 2年

モニター内容：

はじめに面談を通して、CLAメソッドとEMの概要説明を行い、被験者の英語目標と意向に沿った学習の方向性と計画を立てて、CLAメソッドを使用し、一定期間、継続的に英語学習を行ってもらった。また定期的に筆者（足立）との面談を設け、経過報告と学習法の修正を行った。

モニター期間：

- ・守さんに関しては、2011年11月から2012年1月までの13ヶ月間
- ・東ヶ崎さんに関しては、2012年2月から2012年9月までの7ヶ月間

モニターの成果：

・守さん

TOEIC 705 → 955 (2011,11-2012,01)

TOEFL iBT 56 → 89 (2012,03-2012,09)

・東ヶ崎さん

TOEFL iBT 56 → 80(2012,02-2012,09)

注目すべきコメントの抜粋：



ATSUSHI MORI - 慶應義塾大学環境情報学部 2年

私にとってこのサイトは、TOEICとTOEFLの勉強をする上での道しるべとなってくれました。これから英語を学習する人にも是非、英語学習を開始する際には、このサイトを参考にしてほしいです。

学習結果：

TOEIC 705 (2011,11) → **955** (2012,01) ---- 3ヶ月で250点Up

TOEFL iBT 56 (2012,03) → **89** (2012,09) ---- 6ヶ月で33点Up



YUSUKE TOGASAKI - 慶應義塾大学環境情報学部 2年

このHPは、英語学習の方法を非常に論理的に説明しており、一英語学習者として参考にさせて頂きました。実際に、このHPに書かれている音読やシャドーイングを通してTOEFLの成績を上げることができたので、理論に間違いはないのだと強く感じています。

以下、原文のままの各モニター被験者からのフィードバックである。

USER'S VOICE



守 淳史さん — 慶應義塾大学／環境情報学部 2年

私にとってこのサイトは、TOEICとTOEFLの勉強をする上での道しるべとなってくれました。

勉強であればどんなものであれ、目標をたて、それを達成するために計画をたて、実行します。このサイトは、英語学習の計画を立てること、自身の学習進捗状況の確認に役立ちました。

例えばスピーキングでは、リスニング力と発音、英文構築能力が試されます。このことを踏まえた上で、どのようにしてそれぞれの能力を高めればいいのか、具体的な方法と参考書が紹介されています。

勉強をする際には、どの参考書をどのような目的で活用するのかといった目的意識がとても重要です。このサイトでは、参考書を使う目的がしっかりと簡潔に述べられています。定期的にサイトにアクセスして、自分は今どの段階にいるのかを確認して学習を進めました。

私がちょうどTOEICを勉強しようと思った時に足立先輩に出会えて、サイトを紹介して頂けました。なので、これから英語を学習する人にも是非、英語学習を開始する際には、このサイトを参考にしてほしいです。

学習結果：

TOEIC 705 → 955 (2011,11-2012,01)

TOEFL iBT 56 → 89 (2012,03-2012,09)



東ヶ崎 裕介さん — 慶應義塾大学／環境情報学部 2年

このHPは、英語学習の方法を非常に論理的に説明しており、一英語学習者として参考にさせて頂きました。実際に、このHPに書かれている音読やシャドーイングを通してTOEFLの成績を上げることができたので、理論に間違いはないのだと強く感じています。

また、「どうしたら英語を話せるようになるのか」という日本人にとって非常に深刻な問題については、チャンク会話法という答えを出しており、個人的にこれと音読をバランスよく組み合わせればどんな日本人も英語が話せるようになるのではないかと感じています！

このサイトは学習者に対して明確に学習法を授けるだけでなく、それに応じた参考書も明確にしており、英語学習者が学習方法に迷うことをなくしてくれるという素晴らしいサイトであると思います。

学習結果：

TOEFL iBT 56 → 80(2012,02-2012,09)

■ 個人面談



個人面談の内容：

個人的に一对一で面談を行い、CLAメソッドとEMの説明をした後、各学習者の英語レベルや英語目標などをヒアリングして、各学習者に適した学習ガイドラインを作成した。その後も、定期的に連絡を取り合い、進捗状況の確認と学習法の修正を行った。

成果とフィードバック：

● 志治 康伸さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 3年

・注目すべきコメントの抜粋 = ” 自分もアルファベットの発音さえ通じない状況で、「このままでは、、、」という気持ちから、一番基礎でもある単音の発音練習などもしっかりとやっています。実際に、練習を始めてから以前より相手に聞き返されるということがなくなっています。”

● 板橋 由佳さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 3年

・注目すべきコメントの抜粋 = ” その結果、2週間でTOEICスコアを585から720にあげることができました。大きく伸びたのはリスニングの点数で、100点近く伸ばすことができました。それまで何となくやっていた発音を正確にとらえることで聞き取れなかった単語が聞き取れるようになり、自分の英語力が伸びている実感を得ることができました。”

● 扇 仁志さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 2年

・注目すべきコメントの抜粋 = ” 受験英語しか頭になかった過去と比べると英語についての意識は大きく変わりました。”

◎ 井島 総一朗さん — 慶應義塾大学 環境情報学部 3年

・注目すべきコメントの抜粋 = ” やっている事に関しての不安が解消されて、がんばろうと思えました。”

以下、原文のままの各学習者からのフィードバックである。

USER'S VOICE



志治 康伸さん — 慶應義塾大学／環境情報学部3年

英語を学ぶ方法を学ぶサイトを実際に利用してみて：

私は、現在学校の方を休学して、1年間アメリカの方に留学に来ています。現在、ちょうど5ヶ月目を過ぎようとしているところです。私は留学に行く直前に、サークルの先輩であり、留学の先輩でもある足立さんに、アドバイスをいただきました。今振り返っても、あの時期に足立さんからアドバイスをいただいたことが、非常に意味のあったことだと思っています。その時に教えていただいたのが、先輩が立ち上げた、「英語を学ぶ方法を学ぶサイト」です。

このサイトを、ゆっくりと時間をかけて読みました。もともと、母親の妹が色々なところへ留学に行っているような人だったので、事前に色々な話を伺っていました。「ただ、海外に行って普通に生活を送っているだけでは、英語はできるようにならないよ」などといった話しをしていただき、しっかりと自分から学びにいく姿勢をもたなくてはならないのだということを教えていただきました。

しかし、正直どのように学んでいいのか、このサイトを読むまでは漠然としていました。大学受験を通して、英語はかなりできる方だと自分では思っていたのですが、正直それはreadingに関してだけで、他の分野は全く自信がありませんでした。そうした状況の中、このサイトを読み、留學生活の中で自分はどうのように勉強していけばいいのかということを知ることができました。留学に行く直前ではなく、もっと前から知っていたらと最近思います。

実際に、サイトの学習法通りにやっているのですが、少しずつではありますが、成長を実感することができています。自分も足立さんのように、母親にお願いをして日本の英語学習に関する本をアメリカに送ってもらいました。サイトでもありましたが、自分もアルファベットの発音さえ通じない状況で、「このままでは、、、」という気持ちから、一番基礎でもある単音の発音練習などもしっかりとやっています。実際に、練習を始めてから以前より相手に聞き返されるということがなくなっています。

こちらに来て本当に思うことは、留学すれば英語ができるようになるという考えは幻想であるということです。このサイトのコラムでも書いてありますが、留学というのは最高の環境を得ることができるというだけで、それだけでは英語はできるようにはなりません。こうしたことを事前から知って留学できた自分は、他の人よりも積極的な留學生活を送れていると思います。

「英語を学ぶ方法を学ぶサイト」を通して、学習法だけではなく、英語に対する姿勢そのものが変わりました。今、実際に留学という経験を通して、この学習法を試している自分が、本当にお勧めできるサイトです。



板橋 由佳さん — 慶應義塾大学／環境情報学部3年

サイトを利用する前までの自分は、巷で話題になる良い教材を使ってはいたものの、これで英語力がつくのか、と勉強していても心のどこかで不安に思っていました。しかし、このサイトの学習法は、作成者の体験を含め、とても論理的に英語力をつける勉強法について分析されていたので、とても信頼することができました。

そういった分析から、なぜ英語力がつかないのか、なぜモチベーションが上がらないのか、そういった自分の中の問題点を発見して理解し、それを解決する勉強方法を組み立てられたので、勉強していても不安になるということはなくなり、はかどるようになりました。

これまでは、たくさん英文や単語を覚えたり、TEDのような英語のコンテンツに毎日触れるようにしていました。しかし、これでは全く成長実感がなく、ただ丸覚えしているだけでした。

サイトと個人面談を基に、新しい学習法を2点取り入れました。英語の発音をアルファベットや母音といった単音レベルから一音一音声に出して正確に言えるように練習するようにしました。それから、英文のシャドーイングを一言一句正確にできるようにひたすら繰り返し練習を重ねました。

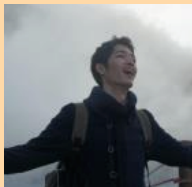
どちらも全くやったことのなかった勉強方法でしたが、実際に声に出して練習する勉強法はとても新鮮でたのしく、飽きずに続けることができました。

その結果、2週間でTOEICスコアを585から720にあげることができました。

大きく伸びたのはリスニングの点数で、100点近く伸ばすことができました。それまで何となくやっていた発音を正確にとらえることで聞き取れなかった単語が聞き取れるようになり、自分の英語力が伸びている実感を得ることができました。

まだまだ良いスコアとは言えませんが、目標としていた700点台に到達することができ、こうした結果がついてきたことで、また勉強していこうというやる気につながりました。

これからはアルファベットの発音や英文のシャドーイングといった英語の基礎力をさらに確実につけて、もっと実践的な英語力(Speaking & Listening)を身につける勉強を長期的に続けていきたいと思っています。



扇 仁志さん — 慶應義塾大学／環境情報学部 2年

ひろしさんの英語講座を受けての感想：

☆きっかけ

僕は中学校に入る時から今まで約8年間英語の勉強をしてきました。しかし、これまで英語の勉強法についてはきちんと教わったことがなく、いつも自分で模索した英語の勉強法で勉強していました。受験英語にとどまっていた僕の目標は英会話だったので、英会話をうまく話せるようにならないかということで、今回ひろしさんの講座を受けようと思いました。

☆勉強環境、意識

僕は、飽き症な性格ということもあり、今まで何事も継続が難しかったです。しかし、今回初めてひろしさんの講座を受け、きちんと勉強法を教わり、そのやり方も相談することができたので、意識と共に環境も変わりました。そして、1日5分でも継続して毎日やることが大切だということも教わりました。とりあえず3週間続けることを目標にして今頑張っています。

☆過去と現在の比較

大学に入る前までは、僕にとって英語は受験英語という側面がとても強く、田舎だったため英語を話す機会もあまりありませんでした。その結果、僕の英語は受験英語、特にリーディング、ライティングが強く、リスニング、スピーキングはおろそかにしていました。慶応SFCに入ってから、SFCの環境から英語に触れる機会が圧倒的に増え、英語の授業を取ったことにより、周りの英語力の高さに驚きを隠せませんでした。そして、英語の必要性、特にスピーキングの必要性を強く感じました。

現在では、毎日英語のスピーキングに関する教わった勉強法を試していて、英語のスピーキングに対し、抵抗がなくなってきました。まだ、実績としては出てきていませんが、意識的な面から考えると受験英語しか頭になかった過去と比べると英語についての意識は大きく変わりました。また、身近なことからは、毎週英語の授業が1つあるのですが、その授業で少しずつ発言する時に声が大きくなったり、思ったことが先週よりも言えるようになっていたり成長を実感しています。これからさらにスピーキングの力を伸ばすことができるように、毎日学習者として、また表現者としても英語に触れていきたいと思っています。



井島 総一郎さん — 慶應義塾大学／環境情報学部 3年

私は2013年9月からUSAに留学に行くために3月までにTOEFLのIBTで決められたスコアをとらなくてはなりません。今回足立さんのeigo-manabu.jpのプログラムを通して、ついつい先走って見落としがちな「a, b, c」などの英語の本当の基礎から勉強するべきであるという事を再確認できました。また、プログラム内はTOEFLと同様にListening, Speaking, Reading, Writingという4セクションに別れており、それぞれどのような能力が必要で、その力をつけるために、どのような教材でどのように勉強すべきかという事が、分かりやすい例えを用いながら説明されていました。それまで英語を勉強するにあたって、どのような方法が正解か？自分のやり方は合っているのか？など心配でした。しかし、このプログラムでそもそもの根本である英語とは？というところから掘り下げて丁寧に教えてもらったので、やっている事に関しての不安が解消されて、がんばろうと思えました。

■ 講演会



講演会：

CLAメソッド／EMをテーマにした講演会を以下の3回行い、参加者に一定期間、自発的にCLAメソッド／EMを使用して学習してもらった後に、アンケート調査を実施した。

☆第一回講演会「英語うまくなりませんか？」 2012年10月17日 16:30～ @慶應義塾大学
SFCメディア2階にて開催。

☆第二回講演会「英語うまくなりませんか？」 2012年10月24日 16:30～ @慶應義塾大学
SFCメディア2階にて開催。

☆第三回講演会「英語うまくなりませんか？」 2012年12月19日 16:30～ @慶應義塾大学
SFCのAVホールにて開催。

成果とフィードバック：

◎土肥 梨恵子さん — 慶應義塾大学 総合政策学部 1年

・注目すべきコメントの抜粋 = ”私は、このサイトを通して英語学習を本格的に再開しました。”

◎呉 文さん — 慶應義塾大学 総合政策学部 1年

・注目すべきコメントの抜粋 = ”自分で英語を勉強するにあたって、受験英語のように与えられたものをこなしていくものではなかったもので、とまどっていました。ですが、サイトを通して、細かく分野別にどこを伸ばすにはこれをやればいい、と明確に書いていたので、腑に落ちる部分があった。”

◎安増 千絵さん — 慶應義塾大学 総合政策学部 2年

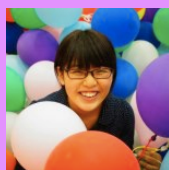
・注目すべきコメントの抜粋 = ”このHPによって、今の自分をしっかり自己分析しそのレベルにあった勉強をカスタマイズすることが出来ました。がむしゃらにやるのではなく、自分というもの、英語というものを再び冷静に捉えなおし、自分の勉強プランを立てる事が出来ました。”

◎石崎 遊太さん — 慶應義塾大学 総合政策学部 2年

・注目すべきコメントの抜粋 = ”きちんとしたロードマップが示されています。まさに路頭に迷っていた僕にとってこの上なくありがたいサイトでした。”

以下、原文のままの各学習者からのフィードバックである。

USER'S VOICE



土肥 梨恵子さん — 慶應義塾大学／総合政策学部 1年

今まで、英語を頑張ろうとやる気が出た時、何から始めればよいかわからない間にモチベーションが下がり、結局できなかった経験を何度もしていました。その中で、このサイトは何から始めればいいのか道筋を示してくれ、モチベーションを保ったまますぐに勉強に移る事ができる点がよかったです。

私は、このサイトを通して英語学習を本格的に再開しました。次の長期休みに海外旅行に行くので、現在は聞く／話すに集中して取り組み、日常会話から更に使えるようになることを目指しており、その後、書く／読むにも力をいれてTOEFLにつなげたいと考えています。このサイトはそれぞれのカテゴリー毎に段階があるので、4つの能力すべてではなく、いくつかに的を絞って自分のできる範囲で学習できる点が良かったです。



呉 文さん — 慶應義塾大学／総合政策学部1年

目標：語彙力を増やす

今やっていること：高校の時に使っていた「ジーニアス英熟語」とTOEFL対策で購入した「聞いて覚える英単語キクタン」を二つ使って隙間時間に覚えている。毎日10～20分ぐらい。

サイトと講演会を通して：

自分で英語を勉強するにあたって、受験英語のように与えられたものをこなしていくものではなかったのが、とまどっていました。ですが、サイトを通して、細かく分野別にどこを伸ばすにはこれをやればいい、と明確に書いていたので、腑に落ちる部分があった。そこから、私は英語の論文を読みこなしていきたくかったので、ひとまず語彙力に特化。いきなり難しい専門用語ばかりの英単語より、だいたい理解できる、自分の中であやふやに覚えている単語を確実に覚えようと思って、今こうやって勉強しています。また、講演会で、自身の失敗談から学んだことをおっしゃっていて、英語というのがなじみやすく感じられるようになりました。



安増 千絵さん — 慶應義塾大学／総合政策学部2年

留学をしたい。

留学をするからには、英語を勉強しにいくだけではなく、英語が話せる前提でその先の事を学びたい。その為にはTOEFL〇x点！このような目標のもと、私の留学への勉強は始まりました。

しかし、TOEFLのスコアという明確な目標があるように見えて、何をしたいのか具体的によく分からず、大人気！と書いてある問題集を片っ端からしていました。しかし、幼い頃の海外生活の経験がある私にとっては、speakingとlisteningは簡単だけど、readingはできないなど、sectionごとの能力もばらばらで、参考書のレベルが合わなかったり、うたい文句に誘われて買って見たものの役に立たなかったりと思うように勉強は捗りませんでした。やはりTOEFL専用の学校に通った方が良いのかなと思い始めているとき、このHPに出会いました。

このHPによって、今の自分をしっかり自己分析し、そのレベルにあった勉強をカスタマイズすることが出来ました。がむしゃらにやるのではなく、自分というもの、英語というものを再び冷静に捉えなおし、自分の勉強プランを立てる事が出来ました。自分がどれだけやれば良いと分かると、不思議と勉強への意欲がわいてきます。

また、勉強法が紹介してあるので、1つ1つの参考書から学べる事が多くなり、時間を有効的に利用出来ました。本屋さんではあまり目立たない本がとても役に立ったり、難しすぎる参考書を買ってしまい、やる気がなくなったりすることがなくなりました。

なによりも、自分の目標である、現地でも通じる英語力をつけるという目標に近づけていると思います。私は受験の為の英語学習に親しみすぎてしまっていて、偏った勉強しかできていませんでした。しかし、自分の真の英語力を鍛えることによって、TOEFLの点数を上げるという勉強法にシフト出来ているのではないかと考えています。総合力のある使える英語を身につける勉強は、今までより楽しく充実感があります。

この調子で、留学中により充実した生活ができるよう、HPを参考にしながら勉強していきたいと思います。



石崎 遊太さん — 慶應義塾大学／総合政策学部2年

私は大学受験が終わってからというもの、一切英語を学習する機会がなくなっていました。大学に合格したことで、自分の頭を悩ませていた英語にもう触れなくて良いという開放感があったことに加え、帰国子女として流暢な英語を使いこなすSFCの友達と触れ合う中で、「どうせどんなに頑張っても彼らには勝てないから、英語なんてやっても意味が無いな」というネガティブな感情が生まれていたのも事実です。しかし大学の授業などを通して、将来的に国内だけを見て生きていくことが不可能であることを痛感したり、外国人の友達ができた事もあって、なんとなく「英語を学ばなければいけないなあ」という気持ちは芽生えていました。しかしいざ勉強するとなると、どんな教材を、どんなペースで、どのように使って勉強したらいいのかがわからず、路頭に迷ってしまいました。

大学受験の時は「この大学の入試はこういった問題が出るから、こういった対策をすればいい」といったある種のゴールが存在していましたが、大学生になった今、そのようなゴール（英語ができるってそもそもどういうことなのか？）が見えずにいたわけです。そういった状況でいざ勉強を始めても全く続かず、本屋で何気なく買った教材も三日坊主で終わってしまうことが何回かありました。

そうこうしているうちに、あっという間に約2年間が過ぎ去ってしまいました。だんだんと進路を考えていく中で、外資系の企業で働きたいという思いが生まれていく中、「今度こそ本気で英語を勉強してみよう！」と決意した時にちょうどお誘いを受けたのが、足立さんの講演です。足立さんが作成したEigo-Manabu.jpを拝見してまず驚いたことは、目的やレベルに応じてやるべきことが明確化（具体化）されていること。僕が目標としているTOEICの点数の向上（800点が目標）のためにはこれとこれをやれば良いという、きちんとしたロードマップが示されています。まさに路頭に迷っていた僕にとってこの上なくありがたいサイトでした。

またその根底をなすCLA学習法という概念にも非常に共感を覚えました。意外と盲点だったのが、段階1の「単音の慣れ」でした。「あいうえお」もうまく聞き取りや発音ができないのに、リスニングや会話ができるわけがない、という考えは、当たり前すぎて逆に意識したことがありませんでした。そういった盲点に気づけるのもこのサイトの良さだと思います。

また、一番やる気になったのは、このサイトの作成者である足立さん（TOEFL-iBT 99点／120点中、TOEIC 980点／990点中というハイスコアを保持）が、帰国子女ではないということです。当然たゆまぬ努力を続けられた結果だとは思いますが、帰国子女に対してコンプレックスを感じていた自分にとっては、本当に励みになる事実です。講演も本当にアグレッシブで、30分があっという間に過ぎてしまいました。僕はまだTOEICも未受験で自分のレベルすらよくわかっていない状況ですが、できるだけ早くTOEICを受けてスコアを保持した上で、学習に移っていきたいと思っています。

■ フィードバックの評価

モニターに関しては、CLAメソッド／EMにより、具体的にTOEFL、TOEICの点数が両者ともに大幅に上がっている点が特筆に値する。

個人面談に関しては、”英語学習に対する態度の変容と本質的な理解”が各学習者に見られたことが、CLAメソッド／EMが大きく貢献した点であると評価できる。

講演会に関しては、これまで英語学習法に疑問や迷いを感じて何度も挫折を繰り返してきた学習者が、CLAメソッド／EMによって、その不安を解消することができ、それに伴ってモチベーションが著しく向上し、学習再開の第一歩目を踏み出すことができた。その後押しを担えた点において、CLAメソッド／EMの本領が発揮されたと言える。

第9章 仮説への解答

《キーワード》

CLAメソッド 仮説検証

9.1 まとめと結論

■ 仮説検証

「CLAメソッドは、純ジャパにとって英語が上達するための効果的学習法になりうるのではないか？」を検証されるべき仮説として第1章で提示した。

● 第2、3章では、31の方略／5つの示唆（英語成功者の成功学習パターン集である「英語上達レシピ」）とCLAメソッドとの整合性を示した。

● 第4、5、6、7章では、臨床実験データに基づいた脳科学と第二言語習得研究の知見による、CLAメソッドの理論的裏付けを行った。

● 第8章では、CLAメソッド／EMの実践によるケース別モニター評価を通して、CLAメソッドの一定の客観的な有効性と再現性を確保した。

以上の3点を踏まえれば、**仮説への解答**は、「CLAメソッドの汎用性については、さらなる検証データが必要ではあるが、純ジャパにとって英語が上達するための効果的学習法として、CLAメソッドの理論的な信頼性と一定の客観的な有効性・再現性は確保された」ということになる。

第10章 獲得した3つの能力

《キーワード》

3つの能力 [看破力 戦略眼 実装力] ガントチャート 時間リソース

10.1 獲得した1つ目の能力：【鋭敏な看破力】

■ CLAメソッド／英語上達レシピという”判断基準”の獲得

CLAメソッド／英語上達レシピという判断基準を獲得する前までは、俗説／高額教材の甘い謳い文句、そして、その有効性が正しいかどうかを見抜くことが困難であったが、この判断基準を獲得した今では、以下の俗説を全て一蹴することができる**鋭敏な看破力**が備わっている。

- ☑ リスニングは聞き流すだけでOK ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 勉強せず赤ちゃんのように習得すべき ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 最初から映画・洋楽で学ぶと良い ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 英英辞典で学ぶと良い ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 英語耳・英語脳を形成すべき ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 右脳倍速学習が良い ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 留学すれば勝手に上達する ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 英会話スクールに行けば勝手に上達する ▶▶▶ **ウソ!**
- ☑ 周波数を論拠とした魔法のような教材がある ▶▶▶ **ウソ!**

この看破力により、無駄な英語学習への時間投資、無駄な教材への金銭投資を回避できるようになっている。かつ、最短距離で、最も効率の良い教材と学習手法を選択できるようになっている。


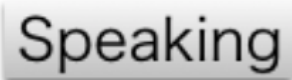
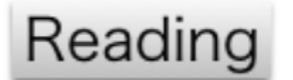
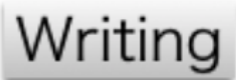




さらに、EMにおける教材の「目安」部分にも精通すれば、ある1つの教材を見た時に、CLAメソッド／英語上達レシピの観点から、その教材が、「どの技能の、どの段階の、どの手法に対

応した教材なのか？」また「どのような効用・目的で、どれだけの期間、どこを教材のゴールとして、どのような手法で学習を行えばいいのか？」が見抜けるようになっていないはずである。かつ、自分自身の英語力がどの段階であるのかも分かるようになっていないため、その教材が今、そして今後の自身の英語学習に必要なか否かを的確に判断できるようにもなっていないはずである。

10.2 獲得した2つ目の能力：【高次元の戦略眼】

■ CLAメソッド早見表とロードマップの理解

すでに以下の、各4技能におけるCLAメソッド早見表が理解できるようになっている。

			
			
<u>リスニング早見表</u>	<u>スピーキング早見表</u>	<u>リーディング早見表</u>	<u>ライティング早見表</u>

そして、それに付随して、その早見表をTOEFLの点数軸で再構築したEM記載 (<http://www.eigo-manabu.jp/5level/5level.html>) の「TOEFLスコアによる英語5段階」と「ペラペラへの道のり (ロードマップ)」も理解できるようになっている。

以上の3つの理解により、日本で生まれ育った純ジャパとして、ペラペラになれる道筋を明確に見通せたことになる。つまり、純ジャパが独学でペラペラになれる方法・道筋を獲得した。それにより、「本当にこの学習でペラペラになれるのか?」、「この学習で本当に効果が出るのか?」という不安が消え去った。そして、そういった迷いや不安による学習意欲の低下も回避できるようになり、短期的に成果が出ない時でも、心に”余裕”と”希望”を持ってモチベーションを維持しつつ、英語学習を継続できるようになった。

10.3 獲得した3つ目の能力：【創造的な実装力】

■ CLAメソッド／英語上達レシピ／EMをベースにした学習計画の作成

CLAメソッドの全貌を理解したことで、すでに各技能の段階から、自身に必要な手法と教材を抜き出してきて、自分だけのオーダーメイドの英語学習計画を立てられる創造的な実装力が身についている。ただ、ゼロから完全にオーダーメイドの学習計画を作成するのは手間がかかるため、以下の【学習計画の作成例】のように、EMの「CLAメソッド活用例」を叩き台にして、自分だけの学習計画に作り変えていけば、より簡単に精度の高い学習計画を作ることができる。

■ 学習計画の作成例

● ワーキングホリデーでのカナダ留学（2年間）を控える大学3年生のK.Kさんの例。

■ 状況：

4月1日から4ヶ月の準備期間を経て、8月にカナダのトロントに渡り2年間留学予定。最初の半年間は、トロントの語学学校（ESL）に通い、その後1年間ワーキングホリデーを行い、最後の半年間の計画は現地での流れを見て決める。

■ 現状の英語レベル：

- ・リスニング = 「段階1～2」（基本的な日常会話なら聞き取れるレベル）
- ・スピーキング = 「段階1～2」（文法的に正確ではないが、「～がしたい」「～がほしい」「～に行きたい」など基本的な意思疎通ができるレベル）
- ・リーディング = 「段階3」（大学受験英語のリーディングレベル）
- ・ライティング = 「段階2」（大学受験英語のライティングレベル）

■ 1年後の英語目標：

- ・まずは、「スムーズに雑談できる英会話力が欲しい」
- ・その次に、「日系ではなく、現地の会社で働けるレベルのビジネス英語力が欲しい」

■ 英語学習に投資できる時間リソース：

・留学直後は、語学学校に通い、語学学習に注力できるため、語学学校での学習に加えて、毎日**3時間**の自主学習の時間を確保できる（予定）。

・留学前の準備期間（4ヶ月間）では、大学の講義とバイトがあるため、以下の表を活用し、現状で英語学習に投資できる時間リソースを確認した。

【1週間の時間リソース確認表】

時間	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜
6:00							OFF (予備)
7:00							
8:00		大学の講義 1、2、3限					
9:00							
10:00	大学の講義 2、3限						
11:00							
12:00					バイト		
13:00			大学の講義 3、4限	大学の講義 3、4限			
14:00							
15:00	英語	英語					
16:00							
17:00		5限	英語	英語	英語	バイト	
18:00	バイト						
19:00							
20:00							
21:00							
22:00	英語					英語	
23:00							
0:00							
0:00~6:00							

英語 学習の合計時間 = 7時間30分（1週間あたり）

この表より、現状では、1週間に7時間30分（おおよそ「毎日1時間」）の時間リソースを英語学習に投資できることが分かった。

以上4つの情報（状況／現状の英語レベル／目標／時間リソース）を踏まえた上で、目標の英語力を獲得するための学習計画を立てていく。先述の通り、0から組み立てるのではなく、EMの左サイドバーにある、9つの目的に合わせた「CLAメソッド活用例」を叩き台にして、修正を加えながらオーダーメイドの学習計画を作っていく。今回のケース（目的）では、【海外生活】目的（<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html>）と【ビジネス】目的（<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html>）の2つの「CLAメソッド活用例」（教材ベースの学習の流れ／学習期間の目安）を参考にした。さらに言えば、ワーキングホリデー開始まで時間的猶予があるため、【海外生活】→【ビジネス】の順番で、教材ベースの学習の流れを組み合わせた。そのオーダーメイドの学習計画表が、以下の「教材ベースの年間ガントチャート」である。

【教材ベースの年間ガントチャート】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
状況・環境	日本での大学生活（毎日1時間学習）					カナダ留学先の語学学校生活（毎日3時間学習）					ワーホリ準備		
Listening	1.発音教材		← 教材：EM紹介の『英語の発音がよくなる本』、目的：単音マスター、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。										
				2.KHシステム		← 教材：EM紹介の『KHシステム"究極の英語学習法"』、目的：リスニングの基盤作り、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。							
	教材：EM紹介の『フレンズDVD』2本と3本目はワーホリを意識して→							3.フレンズDVD→TED					TEDを選択、目的：音変化への慣れ、3ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たし、それを3本分行う。
Speaking	1.チャンク集		← 教材：EM紹介の『なるほどフレーズ100』、目的：チャンク集積とチャンク会話法の習熟、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。										
					2.		← 教材：EM紹介の『中学英語で話せるPart 1』、目的：チャンク集積とチャンク会話法の習熟、2週間の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。						
					3.		← 教材：EM紹介の『中学英語で話せるPart 2』 目的：チャンク集積とチャンク会話法の習熟、2週間の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。						
	教材：EM紹介の『ペラペラビジネス100』 目的：ビジネス用チャンク集積とチャンク会話法の習熟 →										4.		1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。
Reading	教材：EM紹介の『TOEICテストの英単語』、目的：TOEIC（ビジネス用）の基礎単語・構文の習熟とビジネス →										1.TOEIC		様式の記事に慣れる、1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。
Writing	教材：EM紹介の『ビジネスEメール実例集』、目的：ビジネスシーンにおける英借文の習熟 →										1.Eメール		1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。

【教材ベースの年間ガントチャート】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
状況・環境	カナダ留学先の語学学校生活 (毎日3時間学習)											
Listening	日本での大学生活 (毎日1時間学習)											
	1. 発音教材 ← 教材：EM紹介の『英語の発音がよくなる本』、目的：単音マスター、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
	2.KHシステム ← 教材：EM紹介の『KHシステム"究極の英語学習法"』、目的：リスニングの基礎作り、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
Speaking	3.フレンズDVD→TED 教材：EM紹介の『フレンズDVD』2本と3本目はワーホリを意識して → TEDを選択、目的：音変化への慣れ、3ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たし、それを3本分行う。											
	1.チャングク集 ← 教材：EM紹介の『なるほどフレーズ100』、目的：チャングクの集積とチャングク会話法の習熟、1ヶ月半の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
	2.チャングク集 ← 教材：EM紹介の『中学英語で話せるPart 1』、目的：チャングクの集積とチャングク会話法の習熟、2週間の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
Reading	3.チャングク集 ← 教材：EM紹介の『中学英語で話せるPart 2』 目的：チャングクの集積とチャングク会話法の習熟、2週間の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
	4.チャングク集 教材：EM紹介の『ペラペラビジネス100』 目的：ビジネス用チャングクの集積とチャングク会話法の習熟 → 1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
	1.TOEIC 教材：EM紹介の『TOEICテストの英単語』、目的：TOEIC (ビジネス用) の基礎単語・構文の習熟とビジネス ↑ 様式の文章に慣れる、1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											
Writing	1.EMメール 教材：EM紹介の『ビジネスEMメール実例集』、目的：ビジネスシーンにおける英借文の習熟 → 1ヶ月の学習でEM記載の「卒業条件」を満たす。											

※「卒業条件（教材のゴール）」の詳細は、【海外生活】目的（<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/LivingAbroad.html>）と【ビジネス】目的（<http://www.eigo-manabu.jp/Goal-oriented/Business.html>）の2つの「CLAメソッド活用例」に記載されているので参照されたい。

この学習計画表（ガントチャート）を遂行すれば、ちょうど1年後の3月31日には、以下の2つの目標が達成されているはずである。

- 1年後の英語目標：
 - ・まずは、「スムーズに雑談できる英会話力が欲しい」
 - ・その次に、「日系ではなく、現地の会社で働けるレベルのビジネス英語力が欲しい」

【本研究を読まれている方への実装】

以上の例を参考にして、あなた自身の4つの分析（現在の状況／現在の英語レベル／英語の目標／以下のプリントアウト用「1週間の時間リソース確認表」を用いた時間リソースの確認）を行った後に、EMの「CLAメソッド活用例」を叩き台にして、以下のプリントアウト用「教材ベースの年間ガントチャート」を使って、あなただけのオーダーメイドの学習計画表を作成し、それに則って、学習を開始してください。

最後までお読み頂き、本当にありがとうございました。

CLAメソッドが、あなたのお役に立てることを心から願っています。

そして、あなたの英語学習の旅が、より良いものになりますように。

足立 博史

【 1 週間の時間リソース確認表 】

時間	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜	日曜
6:00							
7:00							
8:00							
9:00							
10:00							
11:00							
12:00							
13:00							
14:00							
15:00							
16:00							
17:00							
18:00							
19:00							
20:00							
21:00							
22:00							
23:00							
0:00							
0:00~6:00							

引用・参考文献

書籍（和文）

池谷裕二(2002) 『脳の仕組みと科学的勉強法』ライオン社.

伊藤サム(2003) 『英語は「やさしく、たくさん」』講談社.

大石晴美(2006) 『脳科学からの第二言語習得論 —英語学習と教授法開発』昭和堂.

大島清(2001) 『脳のしくみが解れば、英語は自然にできるようになる』KKベストセラーズ.

門田修平(2007) 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア社.

黒田龍之介(2000) 『外国語の水曜日 —学習法としての言語学入門』現代書館.

小池生夫(2004) 『第二言語習得研究の現在 —これからの外国語教育への視点』大修館書店.

斉藤兆史(2003) 『英語達人塾 —極めるための独習法指南』中公新書.

篠原佳年(2006) 『奇跡の音 —英語聴覚セラピー』きこ書房.

ジョン・C.マーハ；ジュディ・グローヴス(2004)；芦村京（訳）『チョムスキー入門』明石書店.

白井恭弘(2004) 『外国語学習に成功する人、しない人 —第二言語習得論への招待』岩波書店.

白井恭弘(2008) 『外国語学習の科学 —第二言語習得論とは何か』岩波書店.

白畑知彦（編）；若林茂則；須田孝司(2004) 『英語習得の「常識」「非常識」 —第二言語習得研究からの検証』大修館書店.

白畑知彦；若林茂則；村野井仁(2010) 『第二言語習得研究 —理論から研究法まで』研究社.

竹内理(2003) 『より良い外国語学習法を求めて —外国語学習成功者の研究』松柏社.

田村明子(2004) 『知的な英語、好かれる英語』日本放送出版協会.

千野栄一(1986) 『外国語上達法』岩波新書.

徳永哲士(2001) 『英語が上達しないのにはワケがある！ —これが「英語3段とび吸収法」だ』サンマーク出版.

鳥飼玖美子(2003) 『はじめてのシャドーイング』 学習研究社.

早見寛(1992) 『速読英単語 一必修編』 増進会.

本田直之(2008) 『レバレッジ英語勉強法』 朝日新聞出版.

安河内哲也(2011) 『350万人が学んだ人気講師の勉強の手帳』 あさ出版.

English Zone編集部(2003) 『英語で読む だから力になる』 中経出版.

JACET SLA研究会(2005) 『文献からみる第二言語習得研究』 開拓社.

雑誌論文 (和文)

遠藤忍(2010) 「普遍的なコミュニケーション能力と学校外国語教育 —茨城県・英語インタラクティブフォーラムの調査・分析」 慶應義塾大学湘南藤沢会.

欧文文献

Krashen, S.(1985). *The Input Hypothesis : Issues and Implications*. Torrance, CA: Laredo Publishing Company, Inc.

Patsy M. Lightbown, & Nina Spada(2006). *How Languages Are Learned Third Edition* : OXFORD University Press.

R.C. Gardner(1985). *Social Psychology and Second Language Learning - The Role of Attitudes and Motivation* : Edward Arnold Ltd.

インターネット資料・その他

桜井恵三(2011) 「最適性理論による英語学習」 <http://www.eikaiwanopl.jp/information/nazemuzukashi/motortheory.html> (閲覧日：2013年1月7日).

日本政府観光局(JNTO) 「統計データ (訪日外国人・出国日本人)」 http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitor_trends/index.html (閲覧日：2016年7月7日).

文部科学省 「小学校外国語活動サイト」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm (閲覧日：2012年12月20日).

ETS TOEFL(2010). *Test and Score Data Summary for TOEFL Internet-based and Paper-based Tests. January 2010-December 2010 Test Data*. <http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEFL-SUM-2010.pdf> (accessed 2012-12-27).

巻末資料

CLAメソッド早見表一覧

*Listening Section*の早見表

<Listeningの段階の早見表>

段階 1. 生の音を言語として認識する準備段階 (フィルター段階)

準備 1 : 単音 2 6 音の体得 (慣れ)

準備 2 : 聞こえる周波数音域の拡大

段階 2. リスニングの“基盤”作りの段階

基盤 1 : 音声知覚の自動化 (下位 : メモリ中の初期処理)

基盤 2 : ループの効率化による、リテンション能力の向上と内在化の効率化 (中位 : メモリ中の中心処理)

段階 3. 音変化への“慣れ” (下位 : メモリ中の初期処理)

段階 4. 理解段階 (上位処理 : メモリと長期記憶データベースがリンクする意味理解の処理)

理解 1 : 「理解処理段階でアクセスされる長期記憶内の 6 つのデータベース」へのアクセスの高速化

理解 2 : 長期記憶データベースの情報量の向上

<手法の早見表>

段階 1.

・発音 (単音) に特化した教材 (Ex. 『発音が良くなる本 (DVD付き)』中経出版 など)

・高周波数に特化した教材 (Ex. 『奇跡の音』きこ書房 など)

段階 2.

1. 教材をリスニング (Ex. 『K/Hシステム』アルク などのCD教材を活用)

2. マンプリング (小声で行う初期のシャドーイング)

3. パラレルリーディング (音声にフォーカス)

4. 英文の意味をチェック

5. K/Hシステム方式のシャドーイング (シャドーイング、スラッシュリーディング/リスニング、自分の声の録音、目的の意識化) による Prosody (基本のリズム、語調、強弱、抑揚) の習熟

6. コンテンツ・シャドーイング (意味をつかみながらのシャドーイング)

7. やまと言葉落とし (日本語を使用して、意味を音声とリンクさせる)

8. リピーティング (音韻ループを効率化しリテンション能力を向上させる)

9. delayed シャドーイング (1 秒遅れで行う、さらに負荷が増す強化版のシャドーイング)

10. レシテーション (暗唱)

+

・英語のラジオを集中して聞き、頭の中でシャドーイングする手法

・立体ノートテーキング → 英語戻し (暗唱の代わり) → チャンクとしての独り言

(ラジオと立体ノートテーキングの順番は任意)

段階 3.

映画 (ネイティブのナチュラルスピードの会話教材) のディクテーション

↓

映画 (DVD) のシャドーイング (=アクティング/演技)

↓

慣れてきたら耳だけで、もう一度ディクテーション

↓

最後にもう一度、アクティング

・このセットの繰り返し

段階 4.

多聴段階 :

・映画を楽しむ + 意味調べのセット (※段階 3 以前の多聴は、能力向上ではなく、英語に慣れるためや、モチベーション維持が目的。)

・TV・動画・ラジオ・講義 (TEDなど) ・会話・洋楽 (歌) などの“生の英語”に、どんどん触れる

Speaking Sectionの早見表

<Speakingの段階の早見表>

(Listening Sectionとの違い=“手法”が各段階の中に組み込まれていること。)

ポイント： <行動主義と構成主義的手法を組み合わせる>

認知・行動主義的手法(教室的)・・・パターンプラクティス(PP)、音読、パラレルリーディング、文法、表現チャンクの繰り返しによる
暗記・暗唱

VS

社会・構成主義的手法(実践的)・・・会話、独り言、会話シミュレーション、実況中継、会話の反芻

↓

組み合わせる：

PPや音読、独り言などにより、チャンク使用の自動化が促進され、注意資源が余ることで、さらに高次な会話が可能になる。その自動化されたチャンクを実際の会話の中で使用し、それぞれのチャンクごとの習熟度を上げることで、より柔軟な会話が可能になる。

段階 1. 舌作りの段階

- ・単音26音の発音(手法：発音本のパラレルリーディング、口まね)
- ・基礎的な単語の発音を体得、舌作り(音、文字、脳、舌の連結)
- ・「日本語的英語」の語彙(中間言語)から、「英語的英語」の語彙への変換作業(Listening段階1の単音体得やListening段階2のシャドーイングでも行う作業) Ex. キャリア と career(/kə'ri:ə/)の違い
- ・初歩的文法の体得と活用形の練習(英語における“九九”)
- ・過去、未来、受け身、現在完了などの基礎文法の理解と体得

※英語を本格的に学習したことがない学習者へ

- ・英語の始め方：自分が好きな英語の歌、映画、演説などの、音声とプラスイメージから学習を開始する
- ・英語の基礎理解の方法：中学の教科書などの基礎レベルの教材を利用し、基礎語彙と基礎文法を理解する
- ・簡易チャンクの体得方法：I go to ～などの一文を使い、全ての活用形を反復練習して、自動化するまで続ける

段階 2. 行動主義的手法から構成主義的手法への移行段階(チャンク会話法の6つのステップ)

<チャンク会話法の6つのステップ>

1. 表現集の通読、丸暗記、一問一答 (運用段階2-1に依拠)
2. PP(パターンプラクティス) (運用段階2-1, 2, 3に依拠)
3. CDなどのモデル音声で、パラレルリーディングを行いリズムを体得 (運用段階2-2に依拠)
4. PPを行い、その例文の後に、一文ずつ新たな内容を加えながら独り言 (運用段階2-2, 3に依拠)
5. ボイスレコーダーで録音して確認と修正 (運用段階2-2, 3に依拠)
6. テーマを決めて、体得した表現チャンクを使って自由に独り言 (運用段階2-3に依拠)

運用段階2-1： 表現チャンクが集積(手法：表現集、パターンプラクティス、活用表、シャドーイングやアクティングからの一部転移)

構文集・会話フレーズ集・中学レベルのチャンク集、メールマガジン、iKnowやBusuu.comなどのOnline学習サイト、ラジオ英語講座などを利用する。

運用段階2-2： 正確さよりもある程度の流暢さを意識(手法：英会話、パラレルリーディング)

根拠・・・始めは正確さよりも、ある程度の流暢さを重視した方が、学習が進みやすいという英語学習成功者の共通パターンがあるため。
(“通じた”という感覚が始めは大切。)

「流暢さ」と「正確さ」のトレードオフについて・・・注意資源には限りがあるため、発話する際に、流暢さを意識すると、正確さが失われる。その逆もしかり。

運用段階2-3： チャンクの運用の自動化と正確さの向上

(手法：独り言、パターンプラクティス)

段階 3. さらに流暢さと機転の利いた会話(構成主義的手法の段階)

(手法：英会話 + DVDアクティング、歌、ボイスレコーダーを用いたテーマを決めた独り言)

Reading Sectionの早見表

<Readingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟段階

- ・基礎語彙（2500～3000語が目安）を、文脈の中で暗記していく（速読英単語などの教材を利用）
- ・文法構文に関しても、速読英単語などの教材を利用し、文章の中で習熟していく

※ただし、初歩的な語彙・文法が理解できていない場合は、中学の教科書レベルの教材を利用し、初歩的な語彙と基礎文法を先に体得する必要がある。

段階 2. 文字と音（内語）のつながりの強化段階（音読段階／リーディングの基盤作りの段階）

手法：音読

音読による効果・・・音読を通して、文字と音のつながりを強化し、それを繰り返すことで、デコーディング（文字を見て→その語彙を脳内の長期記憶データベースから検索して→ワーキングメモリのループに内語として音声化する下位処理）の自動化・スピードが促進される。それにより、理解（上位処理）に、より多くの認知・注意資源を費やすことができるようになり、理解度も上がる。また、音読によって、ループ中の復唱能力も向上するため、リテンション能力が上がり、インプットされた情報（学習内容）が短期記憶でとどまらず長期記憶になりやすくなる（長期記憶データベース量が増強される）。さらに、音読によるリテンション能力向上は、リスニング能力の向上にまで効果が波及する。

<音読の留意点>

- ・音読は負荷が小さいことが難点であるため、常に速いスピード（負荷）で行うこと、そして、スピードの向上を意識して行うことが重要
- ・音読は集中型ではなく、長期継続型で繰り返すことで効果が増す
- ・音読は教材をまず理解してから行うこと（長期記憶データベースへのアクセスの高速化に伴う理解度の向上、内在化の高速化も同時に行えるため）
- ・それに伴い、音読をする前に、理解のための精読（細かく分析的に読む手法）を行うことになる
- ・音読はモデル音声をしっかり聞いてから行う方が好ましい
- ・多読ではなく、深くじっくり音読する意識で行う

段階 3. 多読段階

- ・雪だるま方式の多読法＝「偏ったテーマの文章を大量に読みこなすことで、雪だるまのコアとなるような多読の基礎（主に語彙量／スキーマ情報量／大意を掴む能力の向上）を醸成し、その多読の基礎をベースに様々な文章を多読していく手法」
- ・雪だるま方式の語彙習得法＝「偏ったテーマの単語集で集中的に語彙数を増やすことでコアとなる語彙群を獲得し、その語彙群をベースに、関連付けを行いながら他のテーマの語彙も覚えていく手法」

Writing Sectionの早見表

<Writingの段階の早見表>

段階 1. 基礎単語と文法構文の習熟（Readingの段階 1 と同じ）

段階 2. 英借文の習熟と文章の添削（Speakingの段階 2 と同じく、論述用のチャンクを収集し、パターンプラクティスを通して、チャンクを使用したアウトプットに習熟する）

段階 3. Readingからの転移（Reading能力向上に伴う自動的なWriting能力の向上）